津田文庫
文庫 1
1773

早稲田大学圖書館藏書

武家
必攣 泰平年表

頒限三百部禁市鬻

忍屋隠士 謹輯 蔵版

つだ文庫

1773

泰平年表凡例

東照宮　家康公御治世三年御壽七十五自　一ヨリ十七丁迄
台徳公　秀忠公御治世十九年御壽五十四自　十七ヨリ二十迄
大猷公　家光公御治世十九年御壽四十八自　二十二ヨリ三十迄
嚴有公　家綱公御治世三十年御壽四十自　三十ヨリ三十七迄
常憲公　綱吉公御治世三十年御壽六十四自　三十八ヨリ四十八迄
文昭公　家宣公御治世四年御壽五十一自　四十八ヨリ五十三迄
有章公　家継公御治世四年御壽八自　五十四
有徳公　吉宗公御治三十年御壽六十八自　五十五ヨリ六十七迄
悖信公　貞享元年至寛延四年迄　六十八ヨリ七十迄
浚明公　家重公御治世十七年御壽五十一自　七十ヨリ七十九迄
大御所公　家治公御治世七年御壽五十　元文二年至天明六年迄
家齊公御治世五十二年御壽萬萬歳　七九ヨリ享九迄
自安永二年至天保八年御辞職迄

泰平年表凡例之云

此書起天文十一年至天保八年三凡二百年之間年表之大畧あり其間治乱興亡之事を悉く記すにおよばず唯其時代の要を撰び記すのみ然れども事實の明白なるを以て細かに記すといへども雲霧縹渺として文字を憑がたきの類ひは一切これを省けり文字憑がたきの類ひとは軍記家傳野史の載する所多くは虚誕にして信がたきの事を謂ふ

此書は天文十一年至天保八年三凡二百年之間年表之大畧あり其間治乱興亡之事を悉く記すにおよばず唯其時代の要を撰び記すのみ然れども事實の明白なるを以て細かに記すといへども雲霧縹渺として文字を憑がたきの類ひは一切これを省けり文字憑がたきの類ひとは軍記家傳野史の載する所多くは虚誕にして信がたきの事を謂ふ

天保辛丑初春　忍屋隠士

泰平年表引用書目

次第不同八本文二出所順也今不改

御年譜　創業記　列祖成蹟　逸史　國史　江亭記　太田家譜　聚樂行幸記　豊臣家譜　元覧日記　慶長年中記　慶長年録　當代年録　道春年譜　羅山文集　退私録稿　丙申記行　日光記行　野槌　常住院記　太徳院記　称名寺由緒書　足利学校由緒書　圓光寺由緒書　惺窩行状　山州名跡志　駿河記　公卿補任　梵舜日記　家忠日記　寛永集　睦子又談　琉球史略　本朝神社考　光記　五音抄　曽我家譜　鈴木家譜　島津家記　細川家譜　神原家記　吉田家譜　中井家譜　御本日記　金地院日記　國師日記　元和年録　續年録　東武實録　嚴政録　光廣卿日光記行　紀州年録　松栄記事　宝賀事畧　日光山旧記　同御縁起　寛永御巡國記　三雲成貞家譜　長崎旧記　諸家本寺帳　寛永御巡諭旧記　孔子堂旧記　春齋畧譜　弘文院家記　徴典拳譜畧　國史館日録　鳳岡年譜　鳳岡全集　正保日記　正保事録　以貴小傳　北條系譜　山室旧記　會津世稿　土津実神言行録　見称出廟記　視聽日録　板坂卜齋記　寛明日記　御當家令条　御景録　慶賀要録　龜岡見旧記　徳山家記　桑山家記　三雲家記　永井尚庸家記　万吾記　貞禄日記　古良日記　宝徳日記　越前堺光長家記　憲廟實録　貞享諸家書　延宝江切繪圖　昔々物語　湯原日記　常山文藁　行實　遺老物語　水野勝長家譜　細井廣澤家帳　享若家記　拗窓憶記　仕官抄義　續紹運録　蕃山實録　太嶋義辺家譜　新令句解　享保録　同續編　同通鑑　同遺事　同成典　水府家記　加州家記　廢物類纂　官中秘策　官中要録　文露叢　玉露叢　狄生家譜　木下寒井家譜　服部保廣家譜　室直清家譜　下田日記　伊勢貞丈家記　小笠原持廣家記　宝永御書物目記　蟻川家記　奈佐勝英家譜　仰高録　春の御舩　多紀安元家記　延寿宝明記　日光御社參記　小笠原忠徳家記　宗義方家記　大村家記　松浦家記　譯鑑聞　鎖國論　山室郊家記　近藤守重記　御觸書留　不得記

泰平年表

一東照宮御世　東照宮淨泰院　忍屋隱士謹輯

天皇二十四代世良田次郎三郎清康君御時ニ至リ三河國ヲ勝從シ伝權大納言廣忠卿の

別記清康ノ二男次郎三郎君八幡宮ニ於テ御元服ノ時ニ當リ足利將軍義晴公ノ一字ヲ賜ハリ松平次郎三郎元信ト改メ給フ

右ニ記ス所ハ廣忠君ヨリ記シ始メ給フ故ニ清康君ノ御事ハ別記ニ出ス

又同年十二月廿日清康公逝去ノ後ハ廣忠君ノ御代ニ移ル

文十二年二月廿六日夜ニ入リ別記ニ出ス

享禄四年辛卯

天文元年壬辰

二年癸巳

三年甲午

四年乙未

五年丙申

六年丁酉

七年戊戌

八年己亥

九年庚子

十年辛丑

十一年壬寅

十二年癸卯

十三年甲辰

十四年乙巳

十五年丙午

十六年丁未

十七年戊申

十八年己酉

十九年庚戌

二十年辛亥

二十一年壬子

二十二年癸丑

二十三年甲寅

二十四年乙卯

二十五年丙辰

二十六年丁巳

二十七年戊午

二十八年己未

二十九年庚申

三十年辛酉

三十一年壬戌

三十二年癸亥

三十三年甲子

三十四年乙丑

三十五年丙寅

三十六年丁卯

三十七年戊辰

三十八年己巳

三十九年庚午

四十年辛未

四十一年壬申

四十二年癸酉

四十三年甲戌

四十四年乙亥

四十五年丙子

四十六年丁丑

四十七年戊寅

四十八年己卯

四十九年庚辰

五十年辛巳

五十一年壬午

五十二年癸未

五十三年甲申

五十四年乙酉

五十五年丙戌

五十六年丁亥

五十七年戊子

五十八年己丑

五十九年庚寅

六十年辛卯

忠政女

於大の方腹

信吉淨泰院と称す

天文十一年十二月廿六日三河額田郡岩津城ニおいて誕生

御幕目 石川安藝守清兼 御箆刀 酒井雅楽助正親 御初名竹千代君 天文 十六年今川義元の居城駿府へ赴
らせらるゝ途中織田家に奪はれ去せられ尾張熱田に御在住 天文 十八年十一
月九日尾州より三州へ御帰り同月又駿州義元の許に赴かせらる 天文 廿三年
御籍首初 弘治 二年正月十五日駿府にて御元服義元首服を加へ名を賜はせ
て次郎三郎元信と申奉る 此時徳川氏へ 世良田とも称す 弘治 三年の春義元の一字を賜ひ元康と御改名
年今川治部大輔義元の女実は関口刑部少輔氏広の娘 築山殿と称せ 天正七年 八月廿九日 故ありて害せらる 謚
西光院殿葬室 別に院號 西来院 を迎へ御室と為給ふ 永禄 元年三州に入給ひ寺部の城を攻落して
鈴木日向守を攻撃せらる是御初陣なり 永禄 二年三月六日嫡男次郎三郎
信康君生 御母ハ今川氏築山殿 天正七年九月 十五日逝謚勝蓮院殿葬清瀧寺 永禄 三年三月十八日亀姫君生 御母ハ今川氏 天
正三年八月奥平美作守信昌に嫁す後加納に住す寛永 二年五月廿七日逝謚盛徳院殿 同年義元討死の後八月廿三日岡崎城
に御帰 永禄 四年織田信長と御和親あり今川氏と好を絶給ふ 永禄 五年二月
源家相傳の軍書四十八冊御相承として書写せらる 永禄 六

年の秋家康と御改名 永禄 七年三州東西御手に属す 永禄 八年三月督姫君生 御母鵜殿氏 天正十一年
七月小田原北条氏直室文禄三年再嫁池田宰相輝政慶長二十年 二月四日逝謚良正院殿葬京知恩院後建国別号光覚寺 永禄 九年十二月廿九日従五位下三河守
叙す先是世良田を称 今年徳川と御復姓ありと云 永禄 十一年正月十一日左京大夫に改む是年氏真を討せられ遠州
御手に属す 元亀 元年正月遠州浜松城に御移徙 元亀 二年正月五日従五位上同十一日
侍従 天正 二年正月五日正五位下二月八日秀康君生 御母永見氏 後羽柴氏十八年三月結城家を継ぐ
上月十四日封越前国八年三月廿六日従三位参議十年七月廿六日権中納言 十二年閏四月八日逝謚孝顕院殿浄光院葬越前福井浄光院 天正 五年十二月十日従四位下
廿九日左近衛権少将 天正 七年四月七日竹千代君御誕生 長丸君 秀忠公 御母西郷氏 天正 八年正
月五日従四位上同年九月忠吉君生 御母西郷氏松平下野守と称し後尾張清洲城主 慶長十二年三月五日逝謚性高院殿葬
同年十月十日御叙爵 同年月日振姫君生 御母秋山氏 文禄
天正 十一年九月十三日信吉君生 武田氏 八年九月十一日逝謚浄瑞院殿葬
十月十四日正四位下同七日左近衛権中将是年甲信両国御手に属す 天正 十二年二月廿七日参議

従二位 戊子十六年四月廿八日 同年四月十五日小牧山御陣 天正十二年十月四日権中納言 同年十一月廿九日
正三位 同年十二月廿日駿府城へ御移徙 天正十四年五月十四日豊臣関白秀吉公妹 朝日姫 後 南明院殿
御入輿御婚礼 同十八年正月十四日聚楽亭に薨去 孫 南明院殿 葬 東福寺 同年十月御上洛大坂にて秀吉公と
御和睦に候て 天正十五年八月八日従二位権大納言 同年十二月廿八日左近衛大将左馬寮御監
此年東山大仏殿造立 天正十六年四月十四日右大将を御辞 二月駿府の御城修理 同年四月十五日聚楽亭に
行幸の御時寄松祝 みどりたつ松の葉毎に此君の千とせの数をちぎりてぞみる 右ハ家康公の御歌 聚楽
夏日侍行幸聚楽第同詠寄松 行幸記に出づ 此の御歌の
祝和歌とそこの歌を載せ 同年四月廿日の御歌 我君の代の限りもあらじかし ... 大和
まろ哉 是も聚楽行幸記に見えたり
秀忠公の御母堂 西郷局逝去 天正十七年正月朔日 二月駿府を二丸に御移 三月秀吉公淀城築 又同月
西郷局 法名宝台院 ... 駿府城中にて薨去 ... 天正十八
年正月十四日小田原所務にて薨去 同二月至七月小田原征伐豊臣関白と御供 ... 又同月
御上使にて武蔵上野上総下総六ヶ国 ... を江戸内九万石を上洛の賞に賜り ... 日本
陽向殿と米津中泉清洲ちょ木の地一子在城のほか権現の地となせらる 今も清須なり 同年

八月朔日武蔵国江戸城へ御移徙 江戸の御城の事ハ太田道灌持資入道して
城を築くを村上氏 代田宝田安田といふ長禄元年四月八日江戸城経営 城の形城中... 門
石を以て垣とし 堂の高サ十余丈 足岸を ... 十間 清整泉林を ... 門
二十五ありて 門前に大木を以て橋を懸 城門を入て ... 中城 ... 静勝軒を ... 詩 幅を送る
卯 ... 文明八年に到りて京師相国寺 ... 門 ... 静勝軒 ... 詩
等巻を携へ 村庵 ... 横川 ... 持つ ... 寄せ
東都の詩を ... 楼閣 ... 西 ... 官
国土の ... 眼下に蒼海を ... 泊 ... 西湖の柳
あり ... 香月亭といふ 城中に六井を鑿つ ... 早 ... 数百
人を集めて弓手を ... 若し ... 年中 後花園院より武州 ... 数
年ハ ... 隅田川 ... 武蔵 ... 天文 ... 七月 ... 教
害せられ ... 大和
江戸 ... 天正十八年まで ... 江戸城を ... せり
是年御移徙の ... 天正十九
由改 ... 支配 ... 文禄元年 十二月改元 同日忠輝公生 母
年正月 ... 江戸御城 ... 年の初め ... 同年三月 ... 右
山田氏 ... 十年 ... 正二月 ...
高田城 元和二年七月十日 ... 天和二年七月三日 ... 院

座小口出陣兵太閤朝鮮征伐ニ依テ之ヲ再興ス
文祿二年慶長元年ヲ歴テ慶長三年ニ城小口ヲ開テ大安六組ノ宅地ト為ス是ヲ御町ト云
文祿二年慶長元年ヲ歴テ慶長三年ニ城小口ヲ開テ大安六組ノ宅地ト為ス是ヲ御町ト云
始メテ「文祿」二年始メテ主住小橋ヲ架ス是ヲ小橋ト云同年二月廿九日豊臣太閤
吉野花見ノ時此首ノ和歌アリ詠ノ人其ノ名ヲ失ヘリ
誰ノ上ノ花ソトモワカヌ春ノ夜モ月ハオボロニ匂ヒ行ケリ
遠キヲ豊臣秀次小「文祿」二年二月秀吉発大坂ヲ
大祝記利ノ原ヲ経テ小口ニ至ル同日泊ス和泉ノ堺ニ
是ヨリ先九日ノ夜ニ入リ同日泊ス和泉ノ堺ニ
二首ヲ載ス
其ノ祝ヒ
ウラカラモアリ
風吹ヌマノ
言葉一首ヲ利学校ニ要ス蔵書ヲ閲ヘ
三歌ヲモ作リ和韻ヲ
筆行頗ル渠ノ
筆是如キ
十二月禮記正義ヲ清原秀賢小倉ヲ
月日松平代君
慶長三年正月十二日遂ニ松平家ノ

清原秀賢小倉ヲ
松平代君
「文祿」二年仙千代君生ル母ハ太
七日遂ニ
慶長三年正月
九日逝ク同年七月ヨリ利学校ヲ作ル処ノ
小元信ヲ書ヲ蔵ス
秀次ノ同東叡ヲ元信ヲ
京野ノ自殺ヲ元信ヲ
経ヒテ元信ヲ再学校ニ
像ヲ也
地震ノ
石清多八幡ノ
斃去歳
慶安
月余清ノ
玉一統ヲ
西九二

日十三年八月廿四日対馬沖ニ於テ二年八月十九日
到安二年四月七日遊擊敎官ニ進中ニ此年ノ蒙古ノ使者ヲ斬
浦ニ来朝シテ初テ通商ヲ
長崎ニ来泊今年余波ト云又ニ来ル
海ヲ通セリカ唐山陽某院ノ外ニ
細ニ言有ニ依テ礼儀式ニ
関東ヨリ下ラセラレテ云ノ
感ジテ出カケリヲ
ヲ飛掌院ニ編ラ
ラレ指揮ヲ編ラ

月年十月　寺院ニ於テ安ラカニ
我ガ儘ニ
ヘキニ
ヲ採用セラ
ヲ及ビ
ニ編ラレ
日大佐ヨリ

ヲ出ス
名ヲ汲テ
墓ニ
毎月十八日
御足モ
ノ墓ニ
ラレ
ヲ
ニ

ラル
ヲ
毎月十八日
依テ
年
ノ
ニ
ヲ
ニ

史書にみえたし始也同年十月二日江戸へ　還御 御母堂侍従院殿逝去に因てなり　同年十一月廿六日御上洛 十二月廿一日伏見へ

御着 同年十二月出家 道亮一絶後出家 初て伏見城の番を勤む 是を伏見三年番と云年番ハ是より先業也 又年罪系孔後放火一業後余伏見

御　同年に至る迄ハ伏見城の番を勤む 是年江戸御城中に入る 後に遠く年寄仕り御番の当番を務む 是年江戸御城中等々の

候伏見城番六年十月十日以来出家後伏見城の内に移り是を伏見城に置きと云

亭に金沢の文庫を移さる 此書庫迄 当代年頭に六月十四日出仕より学校を松和尚文庫へ系出仕の同族共に中に当年の出仕の奉仕

余此代の附よ金沢の御中に出るありしを　出馬出仕子玄 同八年六月初て立り元の宅に出る 弟藤に杉年

田村安栖に在 御殿三十人の預り伏見小そ八杉九の出勤衆の御勤 内府様

御番の位に御勤ありて御所の路より御従の宇野 かくして出仕の役に十一日条

二日ありしに奉行九年八月廿五日二十歳　同年二月十二日伏見城に於て将軍宣下 征夷大将軍淳和奨学両院別

当宣出仕七十歳氏にと出る

当源氏長者牛車を許さる 随身兵仗を賜る 当代年頭に出仕八年二月 内府公将軍の例なりて将

将の内室に出仕して只役に至る兵仗を賜 六年十二月 内府公御参内の例ありて将軍補任にて征夷大将軍を任ぜらる 是より先室町代に至て補

任して御家より 手中なれ共に関白秀吉天下を治て位を奉る 室町氏代に補任して内府任と成り後に出仕

不可叶抑て将軍家の儀ハ出仕して補任てなく室町の代の是非なく出仕に御在を及ばず関白を御拝

に至りて御所中に出仕にて成敗する所の尚に補任時にも拘政の事ハ御政所より天子の御諸家の位を将軍

御内の方御室町と定り 諸家の法例もあり是より信長秀吉天下を治めて征夷将軍の任に至る 元弘以来 御所の将軍の位を

室町公方御代の後出仕なり 足利義満公大和守にて仕官の御かわり公に年寄の帝の御所に室町代の宅地を

家康公へ御譲 大御所に年中の御所 御政道 御代々の御宅室を

東照院殿と申て家康の御代を持ちまして此の御所を御代に及ぶの出仕にて出仕申して自身と　内府公御一位に上る

中補任出仕の中に子出ても二月十二日伏補任あり出仕の勤役二人ハ出仕の参宮より伏見に出る者の出仕の出仕に

家の出仕に候て伏見の出仕に出る当年より下馬より下り 維武の人将軍の出仕の出仕家 御在京の下

主と近に 若年の役中に上の御橋大納言若橋に御役大納言光豊小川坊城中弁後昌 従三位中弁職官

大弁 中原師生 此中弁の総て中年十二月廿日足利義詮公将軍補任の家内の例とあり其後の所役代に

記 右の御役和来る今の出仕の御家も室町より出仕の出仕 公方様と称して是を

同年六月廿四日に系内出仕伏見 御月十六日 還御 同年四月十七日の伏見の総家の出仕の同十九日に大名の方

羽紙にて出礼始とより出役の出仕を勤む上御 同年八月十八日 数房公 出仕の出仕の大納言出仕に水戸 中納言御出仕国氏十七年十二月

廿二日封常陸水戸城 寛永三年八月十九日従三位権大納言に年出月七日 正三位寛文元年七月廿九日逝 葬常陸瑞龍山 年十二月福 同年九月 赤大寺の宝物の出仕 三十

二箇所附せらる 是れ出仕出仕の上飛砂 史に保 是年世上の諸出仕を許さる 同年十月十六日右大臣の辞し

寛永の出仕を初め 是月江戸へ 還御 同年江戸佐和山城を同国彦根山に移さる 慶長九年正

月十日足利学校宰相松貞親政要臣を勤む 同月廿九日松平の嫡子条松平忠吉公へ遣

之二月東海東山北陸の駅吏に命じて一里塚を築かしむ 同年六月朔日江戸 出発ある

駿海に入湯 同廿九日伏見へ着 同年六月十一日吉田神龍院梵舜の出仕を勤む 同月の入洛

廿二日出系内 同八月十四日江戸へ 還御 今年の御上洛此 右府よりも系社への出仕の剣業を以て神祇の出仕に従ふ 慶長十年正月

御上洛 二月十四日発し城へ入御 同年三月東鑑を開版せらる 兼光の贋剣業記に見えたり 同四月七日征夷大将軍を辞し同十六日台廟将軍宣下あり是より大御所様と称し奉る 同年四月周易を改版せらる 是年二条城に於て儒者林又三郎信勝を召出さる 三条小川の徒者あり

是は大相国家康公の深く仰にて二条の御前にて評論し奉りし者なり 光武は高祖九世の孫なりと後漢の本紀に見えたり 又魂魄の事は史漢の本文に見えず 東坡詩に記したる事の如し 又屈原が楽府にも見えたり 又後世の儒者に此説あり

同年九月十五日伏見御発駕江戸へ還御 慶長十一年三月朔日江戸城田安築 池田輝政福島正則浅野幸長加藤清正黒田長政等に命せられ築城普請を命ぜらる 是月十五日御発駕上洛廿日駿府に 至り御築城の地を見させ給ふ 同年四月七日禁裡仙洞後陽成院へ参内し給ふ 江戸城の石垣を築く 同年九月廿八日伏見城より入御廿八日伏見を発し同七月七日書を改板せらる 同九月廿一日江戸城成る 同月島津家久琉球を征伐せらる 同十一月四日江戸へ還御 慶長十二年正月元日市朝天下太平 九州島津氏琉球を伐つ 陸奥の伊達政宗十八年 十二月十二日逍遥院殿 同月江戸城を台廟へ御譲渡し大名に命せられ駿府城を築かしめらる

郭内に法士の宅地を編ける 同年二月十五日細川幽斎教に応じて室町家式三巻を出し奉る 細川家譜に慶長十二年二月細川幽斎室町家故実の礼儀故実を奉らる 是より先細川家に室町家式三巻を出して奉ると見えたり

法衣又同宗に義智朝鮮の三使を携へ来る 同年七月三日駿府城へ出御同年十月四日御発駕十四日江戸西丸へ入御 同年十二月十二日駿府へ還御 同十二日駿府城炎上是年伝通院殿命院宗巴並海保円を勅して本宗縁円を勅せ 慶長十三年二月十一日駿府城成る 是年林道春を召して書を講せしめ 同年八月比叡山の制法七ヶ条を定めらる 同月本多親能に命じて経義の書籍を刊行せしめ 又史記漢書を講せしむ 同年十月京都五山の僧を召して文章を試み 慶長十四年正月尾張清須に入御 築地を定し 二月島津家久琉球を征し七月琉球

紅毛入貢始

琉球來聘始

中山王尚寧薩摩に來る薩州の使者駿府に到り琉球王を伴て謁せしめんことを請ふ許容あり
琉球國を家久に賜ふ御下章を授らる八月中旬蠻國阿蘭陀人貢物を駿府に献し書を彼國王
に賜ふて毎年往來の商船交易等をすべき旨を命せらる阿蘭陀人の入貢是より始る十二
月薩摩家久使を駿府江戸に献して琉球國を賜ふことを謝す駿府より二州を收宛て尚寧に賜り
水戸を新房君に賜ふ［慶長］十五年二月池田輝政福島正則加藤清正黒田長政以下の諸將に命
して尾州清須の城を名古屋に移し新に城壁を築て義直卿に賜ふ同六月勅使駿府に來
て明年讓位の事を告ぐ八月薩摩家久琉球の中山王を携て駿府に到り謁せしむ是琉球來
聘の始なり同年九月禪宗浄安一説には淨久の僧を命し總持院に於て停學せしめらる是
年僧玄宗吉田宗安又宗倫ら遣物柱状ある由聞召し良法を勅して同年十月廿一日江城へ入御
同廿八日駿府へ還御［慶長］十六年正月廿一日太政大臣に任し菊桐の御紋を賜ふの恩旨ありと
以て廿日に辭退し給ふ同廿二日には先祖新田大炊助義重を贈鎮守府將軍に父
廣忠卿に大納言を贈らる同年三月尾州名古屋城を巡見ありそれより上洛廿三日に參内

三条御本目

同月廿七日後陽成院讓位にちかかり同廿八日豊臣右府秀頼大坂より入洛二条亭へ登營御對顔同年四月廿八日
駿府へ還御八月御自身火炮を試み給ふ同年九月十五日吉田神龍院梵舜及東京寺に勅して同
十九日道春をして建武式目を讀しめ之が講義を論し給ふ是年正月十六日京師に於て三条の家目を定めさせ天下の牧伯に誓書を捧しむ其第一
条に如右大將家以後代々公方之法式可奉仰之と載らる是貞永式目の文に據りし知之に未建武式目及び
延喜式并に辨書等を貞觀政要續日本紀の類まで之を講究ある是二十年の法令頒布せらるゝ所の張本なるべし同
廿日南蠻世界の屏風御覧あり異域王との由緒を御尋ね是異國の由緒を御尋ね給ふ異域の來貢は慶長六年安南東埔寨呂宋
同七年に大泥國十一年に暹羅國十三年に阿蘭陀同十七年に亞馬港新伊西把祢亞同十八年に漢入利亞ホの諸國の書翰を奉り物を捧げて通商を乞ひ共に交易を許されしといふ
茶弁の由緒あり呂宋國の使に茶壺の由來を尋ね給ひ其名を問ひ給へしと云同十月朔日太宰府の搬送
智者來船橋秀賢等伺候群書類從屏風一双を献上二日大宰府の天滿宮西樂院送物として二大般若六十巻を奉
坊是を献して六日西三條御所を巡て内裏舊蹟を叡覧ありて御遊の具を御物として献すへきの旨仰出され
西三船橋と共に宮中を巡て同十六日江戸入御同十一月上旬出世良田に赴き古き跡を御尋ね新田の山の麓
に一寺を建立せし是を大光院と号し義重義貞朝臣の舊跡なり亦廣忠公の御為に三河
の舊寺を建立す是月駿府に還御同十八日三代將軍家光の御誕生あり蓮華院に依て譲位三代將軍小條九

代の明証を考察し上沢保暦間記物語の如き別書
荘厳院保暦間記抄案　沖藻尓於て見写候む為奉
を揮毫せらる　寛政十七年二月
同二月十日紀伊国名草郡荘厳院統日本紀を勅命
中ト称ス湯武放伐の出処あり（此時周王紂山文集に我又退転称ス　紂天のはおおかた至法者紀とおなじ
尽くるあり中古新尓なる二云天下の名言なりと称ひまし
ともに書一元亀　宋版剛本今昌平学問所あり
三方面最後平仮を世らる同六月廿日道春へ曽子貢一貫の字故下問せらる尓湯武の論あり
同七月十八日家宝送物として著民日抄三十一巻を献せ毎日遅存商宴飲後余
を勅を修て法尓要実の為論を問へあり八月二月一
官位業務尓を上汝赤太明人犯安　尓藻尓
尓　湯武放伐思ふ揃しめ十二月十六日後府へ出
提上せめらる　（此山文集又ある手漢尓　大林君掌に
好読本漫汝を労授素後　在業物出ス　寛政十八年二月後剃田中に掃しめ

同二月二日　沖藻尓於て左衛門佐を傳七六日梵燥出仕神名伝授秘密の事悉く受くる尓非
さるも仕出さる　（此ある年教林仕者尓余侍後府時
別禅事ヨリ云々　幕下告曰此非名家重宝山接
漢さりけるの乃至をもってよるて安尓別ふとして
しる林代の教えの彼方を射て漢尓うん人皇紀中
文山出尓世旨　本邦大林君の治世也後余有
武王を法也老同之儒山下徐徴府朝内侍塾林
可勿那ぞ人三世栗月の儀すべき旨ての定を
法度を定められる事第一条汇公家荒敬く学問無依世沙汰を修行と載らる同七月日本の紀
録出字ある一切経の目録抄未経数不字旨二千
巻院東の一切経の目録抄未経数不字旨二千
七十一巻寺院なを求拠あ尓て九月四日に目録経
之抄東注尓才一部経年旧在千紀別尓教義山
司妻帯学力上国上能ある為九之為徒沙経年級
借事免租税之大経年今安堵勝為也才三部経
ち才三部経年旧在租別国城ち安之云十四年旨
唐本才三部ハ月廿五日ハ南於一条院門ニて漢沙納僧上ち才三部経
ち葉本とそ　月廿九日十七日後府へ還御同月廿五日又山僧学問
奉云月後府へ　還御同二月廿五日又山僧学問帰宅　御薬尓於て即席にて社奏右衛門尉

同三月七日叡山の僧徒中渇のよし　上聞に達するの処明後九日出仕あるべく文章を以て申上べき
旨仰出さる歌八為政以徳譬如北辰居其処而衆星共之と云ふを述同九日叡山の僧徒文章を持く
御前に出て仰付聞て其歌に宝樹多花果衆生所遊楽と云歌を作らしむ　叡山僧徒に備ふる為政以徳譬如北辰居其処衆星共
之と云ふを文に出せるが故に八行を以て只今天下静謐なるは北辰の如し上古より年久しくて云々中止を
様理孫出生ゝ故是は而已文法に北辰の動にして衆星如共く其徳を以て天下を治むる徳とは何程なる
事と云ふを評せらると　同廿六日法度を定めらる　同廿七日冷泉中納言為満条府を古今伝授あるべき為
召さる故なりとあり
あり　此後召さる　御前に侍す　太政大臣古今三箇の大事を問せらる為満三箇の秘事の八雲手の稲負鳥
数ある是なり　同三箇の秘事の事にて是後為満の以上の気賀同し為満三箇の秘事の三者を感すと云又此趣に
呼子鳥稲負鳥百千鳥是古今集の三鳥なり呼子鳥八人を云様ともあれど猶とかくいふがよしとさと注せり
歴代の歌人この事を秘して口外にせざる故に余務所に行し事ある歌の検校法性院改遍といへる余の志に
来り見えし八　大相国この伝授の抜魂の事を尋ねと仰せありけ又八余まさに同政遍我家に抜魂
の法あるて伝授せらるるかあり されとも呼子鳥の事ときはあからに知り得らずと魂を呼ふとすにありてかくすみやと
著へけるを即　大相国　同年四月又日群書治要貞観政要続日本紀延喜式　御前より出されて叡山僧に出家
小奏しぬべし　武家の法度となるべきものを出抜きあるに崇伝及ひ僧等に浄土宗の鶏偏者長老撰擇集一巻を献せ
即於　御前読ませらる　円光大師手ゝ讀の撰擇集版本今世に現存するものなり　總持院法華経廿八部の外廿八箇是を献を
御前に於て冷泉今地院に読ませらる　同七日今夜の者を　御前に至て論語為政篇を講せしめらる

同十二日群書治要続日本紀延喜式の抄出　御前に於て今地院及ひ崇伝に　御前に於て読しむ同
廿日　大御所仰て曰公家中の法式外し定めらるべしと云々公家の記録皆当家にあるべきの者を献
実録西三条家に於て得るの者を云上る　先紀に六月廿日の出被に三条家に三代実録序文献に文徳実録
後七月七日仰に于於て武家諸法度十三ヶ条を並に公家諸法度十七ヶ条定められる三条家の三代実録一統の
此に基本する所謂記録の文を拝に上る　御前申人出に於て諸法度十七ヶ条仰出さるに源意に一
とよるに当り得ま其に公家中の法式を御定めて公家に宜あり是より学問を好せられ何に一統の供奉事を用ひられる
出にる所を得ませ附に回紀を援引して常に其備あり　御覧あり得は公家伝を秘して徳く其事を
遂に日本の記録法家の伝統事に悉く乾隆伝写せしむる且遂に　日廿八日安家対あり　御前に出てき
救世の転遷とあるを修経を図るる事へしめる無数の記録索すへし
本朝編目江戸へ遣しすみに江戸に是なきものあり是日秘閣式治部卿去廿日の返書あり来日本紀
本の記録仙洞并九条家等に是あるよし同録来る同九月冷泉中納言為満飛鳥井中納
言雅庸後府へ来り古今集の秘奥源氏三箇の大事を伝授ありて朝廷の出席等を其所に
せあひ古を捜る庫に係て大きなるに依て人事にて是を献せ又此書六経の義に通ずるものを顧
同に隋へなる数御に精しき者八書籍を出て由緒小枝の数に知ることに判し残さるる也
同五月二日仙洞より延喜式を出さる同七日秘閣より記録の目出　御前へ上る此時悉く

諸士出仕の彼宅家自筆の仔細日記唯心ホに又貴めの
自筆の二十六人分但一冊封条　出渡ス御ふ御
判ひの小ふ一人十首の内二首々切御被下の紙ホ但紙小但
遠方の門弟多ク其筆蹟ヲ云々依仍閉ホて再組の封ホ其
封別の例渡ス事ホ候ヘ共先年九年七月十日行相市ニ
紙起ス之ホ被出候ホ
千ホ余ホ之ホ有之ホ
入筆ホ有之候ホ之ホ
ホ候ホ

同日冷泉為満ヲ家ホ自筆の仔細日記唯心ホに又貴めの二十六人分但一冊封条　出渡ス御ふ御
判ひの小ふ一人十首の内二首々切御被下の紙ホ但紙小但
遠方の門弟多ク其筆蹟ヲ云々依仍閉ホて再組の封ホ其
封別の例渡ス事ホ候ヘ共先年九年七月十日行相市ニ
紙起ス之ホ被出候ホ
千ホ余ホ之ホ有之ホ
入筆ホ有之候ホ之ホ
ホ候ホ

同日冷泉為満ヲ家ホ自筆の仔細日記唯心ホに又貴めの二十六人分但一冊封条　出渡ス御ふ御
判ひの小ふ一人十首の内二首々切御被下の紙ホ但紙小但
遠方の門弟多ク其筆蹟ヲ云々依仍閉ホて再組の封ホ其
封別の例渡ス事ホ候ヘ共先年九年七月十日行相市ニ
紙起ス之ホ被出候ホ
千ホ余ホ之ホ有之ホ
入筆ホ有之候ホ之ホ
ホ候ホ

同日冷泉為満ヲ家ホ自筆の仔細日記唯心ホに又貴めの二十六人分但一冊封条　出渡ス御ふ御
判ひの小ふ一人十首の内二首々切御被下の紙ホ但紙小但
遠方の門弟多ク其筆蹟ヲ云々依仍閉ホて再組の封ホ其
封別の例渡ス事ホ候ヘ共先年九年七月十日行相市ニ
紙起ス之ホ被出候ホ
千ホ余ホ之ホ有之ホ
入筆ホ有之候ホ之ホ
ホ候ホ

同日冷泉為満ヲ家ホ自筆の仔細日記唯心ホに又貴めの二十六人分但一冊封条　出渡ス御ふ御
判ひの小ふ一人十首の内二首々切御被下の紙ホ但紙小但
遠方の門弟多ク其筆蹟ヲ云々依仍閉ホて再組の封ホ其
封別の例渡ス事ホ候ヘ共先年九年七月十日行相市ニ
紙起ス之ホ被出候ホ
千ホ余ホ之ホ有之ホ
入筆ホ有之候ホ之ホ
ホ候ホ

つきて仰ぎ願ふ一ヶ寺より能き十人ヶ寺を南禅寺と云ふ名ある由仰出さる 同月廿七日又仰付られ十人寺を連
出家せしめらるゝ一説には林下一説には五山の末寺と云ふ 同月廿八日又仰出さる 今度の五山は各
板金仰付らるゝ次第は追て物見等より 僧林同答申 御定書より 僧林同答申 御定書より
枝葉集来四ヶ寺より仮名書の 御定書より 僧林同答申 御定書より
条々 今度五山院板金仰付らるゝ 連署せる 同二日二条殿より 御定書より
月廿日庁前市正大坂者この度の 御定書より
を能らしむ 御定書より
七冊を献上 御定書より
又今度諸家の記録目字小分七冊 寛政紀元 仁貞類聚 正史数聚 六代格 仁明 光孝
文南光坊 宇多 奉る南光坊院 奏せらるゝ 泥源本書 立即位 光孝

六日仰長老大茶一袋を献ぜる仰曰く書を宝也百数ヶ二百数冊板すべし幸に相宇艸字
見ある由仰出さる 見聞随筆 の後集なり 同七日山崎家蔵第廿一代集目録唯壱冊のみ九日
号蕉栗雅両人参会の宴歌筆古今集逍遥院称名院筆六代集未冷泉家満ち
元亨釈書ありやの尋ね満ちて云古今集は顕昭本宝也と云十日公家完令地院より仏法大師古心往
及風体抄歌の三躰等参観也逍遥院称名院筆伊勢物語二部同源氏物語表紙表
并宝家筆勅撰ホ一巻ら読人国を録ら久十二日山名禅閤 清原宣賢 ヶ玄冷の連ねを
且勅を十九日禅令を奉候旨八条殿文庫より豊原周兼 を以て今出川家ホ借り参らせ
手せらる 今度の編内十一箱 承応 廿二日孔ら井雅庸源氏物語三冊の大事お伝を交ちめの門
年九月七日今日 祝橋大納言清家秀相父秀賢 孔ホ小俣て継目の巻礼として筆二父ら送物
也て云代実録六十巻を献ぜ内十巻不宝ホ云同年十月三日令地院より十七史全六十冊
四文庫へ納む又逆修式辞ホ治安 四年へ逆修 次第ホ実光 百座法
借宅被 仰付参 同廿三日二条城小 御番大坂陣数小俣て 同廿四日日本の記録等ホ

出来物の本四出写あるべき有さ月十日　仙洞より勅旨二代抱六巻和歌より一条院まで集代
記十六巻勅撰国史二寒古語拾遺名法要集神皇正統記本朝書籍目録二巻古今集序仮名序
本朝文粋　清輔朝臣抄出之秀句　清輔朝臣集　清輔朝臣家集　清輔朝臣続古今集入集歌
月十七日　後吉の山陣営中　仙洞より今集群書目録　月廿九日
勅使廣橋大納言為綱　二条大納言実俊　各束帯　月廿日南光坊天海僧正
参内　御対面　御盃三献　御肴三種　御太刀一腰　御馬一疋　御服三領　月廿一日
より南禅寺山僧当寺の諸山の首座　月廿二日　南光坊天海僧正　月廿三日
参内　御対面　御盃三献　御肴三種　御太刀一腰　御馬一疋　御服三領　月廿四日
より古今礼義式法の事遷中する　月廿五日　南光坊天海僧正　月廿六日
勅使　入内月廿六日　今比院　清輔朝臣　清輔朝臣集　清輔朝臣家集　清輔朝臣続古今集入集歌
輝茂家文集　和漢朗詠集　日本紀　日本紀私記　日本紀竟宴和歌　日本紀竟宴和歌序
日記　小野宮年中行事　西宮記　北山抄　江家次第　九条殿遺誡　九条年中行事
公家抽　大納言　中納言　参議　三位　四位　五位　六位　諸大夫　侍　殿上人　地下
参内　内裏式　宮中行事　月廿九日　智恩院八宮大覚寺門跡　一条院慶増大納言　二条大
納言　四辻西園寺前内大臣　月廿日　今日　月廿一日　今日　月廿二日　今日　月廿三日
勢多以下　御出　月廿四日　晴　月廿五日　今日　月廿六日　今日　月廿七日　今日
社　御出　月廿八日　晴　学校　洛陽小学校　月廿九日　今日　月晦日　今日
皆可之消相俊　擇物俊　名草　承果　此冬遠　有文　坂又　倭需　分快　小道春与　後藤三郎　芸亭
摩序　於洛教生徒乃体　幕下　謂郎曰　猶子　小道春自敬居摩序別亜　雅経　附曰物　為院　被行　兄曰
是より後十七年　経て　要求七年　小学初て摩序　月廿一日
て翌年　七月十七日　右学校に通う者　月廿二日　今日　月廿三日　今日　月廿四日　今日
学校　被せられ　名の聴　敬法有力　之　元和　元年　月廿五日　今日　月廿六日　今日
必ずしも年　多くの　数き　多分の　改元　月廿七日　今日　月廿八日　今日　月廿九日　今日
十月より書　之　書き　仰せ　月十日　南禅寺小　於て　泥洹　出学　之　食せられる　月廿一日　今日
洋儒　出学　之　食せられる　月廿二日　今日　月廿三日　今日　月廿四日　今日　月廿五日　今日
北院　出学　之　拠よ　分　於　駿府　之　粮　下さ　月廿六日　今日　月廿七日　今日
後府より　公儀　面よ　知らせ　申ふれ　遣　月廿八日　今日　月廿九日　今日　月晦日　今日
分らく　出勤　此より　不　学の　中ゆえ　南蛮　不　出仕あり　雑洗　数刻　月廿一日　該家　勅答の　書物

披露あらせられ上様の時諸家へ御直筆の上御法会御定めらるへき由にて大樹一流御能筆の事仰せ
出さるる所に去る年二条殿へ小色紙を備らる同廿二日大樹一流御能筆御出来にて小倭て法
見る程ほめ給ふへし出座六七人出すへきなれ共従此日毎日朱墨を以て不二庵へ大樹一流文字を書一冊を
備へ出来せし是を以て春より後に諸家補写の事同年四月二日叡山へ御登山あらせらる事
和文粋 ニヨリ西近 十三冊来る記録の写本の書物三枚宗祇より参来 御所へ上京同月大坂再
家の様を見るに依て今迄下して大坂再征の事起る同十八日名護屋御発駕同十八日二条城に
入御同廿二日 右廟御登営 御対顔同年五月藤堂山御陣営に 御滞同十一日御発駕
去る廿九日御合戦の後帰る同じ記録を献上同晦日 大御所二条の御所に御動座同八日叡山
出御宗祇の御筆を二条御所 先御同七日大坂落城同八日豊臣秀頼母子自尽同九日諸将
出城御祝儀として同十八日御参内同年六月四日叡山へ本朝文粋を返さる同晦日 大御所
御感にて 出御して御本書を取出し大樹一流を御改め十部を摺させ 御院の後文字鮮明御作白
一部宛に一冊を押て法帖にて附せらると是日二条御殿にて御殿寄合にて金地院崇伝に

御筆を尊び検校頼をして取寄せ書出て同百三十部余同壬六月八日後摩山にて大樹一流を落し九日
金地院本朝文粋真跡を取寄して 御院の後の備の本は甲州身延山久遠寺より取寄せ
仍て先日叡山流に注仰付今写字清書に出す同一巻香をの処を見る家持に放て探出し
御院に備ふ依て今に補写すへき由仰出さるる此一巻出来書持の由にて蔵書御蔵をと 此本足に
本朝文粋身延十三冊一帖闕自二至十迄身一巻不足にて見え先記壬六月九日の条にて本朝文粋は永禄十四冊表
紙和総目録下出来別二条の様へ持参御寺にて其書を取出て上京の足本と今写と二部日々へ上京一の巻不足身延の本も
不足にて[illegible]今度写し二部にて全部なり 此時叡山へ[illegible]今日二條に 同十八日南都法隆寺より阿弥陀院流抱正して
唯識論并注疏に中井大和守金地院を以て 御院に備ふ阿弥陀院名香の附かて之此
書は先師兵部卿多聞院より借りする処に同十七日冷泉中納言入比叡の合一冊を献ぜし同
廿二日本朝文粋一部献上 巻を以て 禁裏に差上らる同廿三日院参せし政宗に宝冠寺勧成の
女房等の古今集二部を持参して 御院に備ふ 同宗より入に旅て之を上達するよし楽意
去年御上京ありて政宗の稽古の懇志のへきと注進し却らる同廿四日 将軍家金地院を
召して武家の御法度条々の御注進の由内院仰渡さる同廿五日東寺宝厳院果宝に寺

美大師の筆蹟を持参して同く 御縁人を經て金地院崇伝を召る 同廿七日 將軍家二条に
渡御 給人楽 楽及公家 院諸大名出仕 同年七月朔日 公家諸大名二条城に登営参賀
此往各々 同廿二日 傳長老法度の草案 御前に捧く 御覧ありて 將軍へ言上これの為
御出ある 同日 大御所南殿に出御あり 源氏物語并公家 院 御法度 仰出さ
らる 同日 群臣二条 御 并冷泉父子烏丸等 同七日 武家諸法度十三ヶ条を頒布せらる
第一条に文武弓馬の道を専らたしなむへしと載らる 同八日 今日冷泉為満参上 仍て源氏
物語 夷入の 子を 同 處 宮家 眉 筆の 夷入 示 持の 御 揚名 の 秘注釈の上
御 定 て 是を 錯す と云 同十七日 禁中并公家諸法度十七ヶ条之内第一条に 天子諸藝能の
事 第一御学問也 不学則不明古道 而能致太平者未之有也 貞観政要明文也 寛平
遺誡 雖不窮経史 可誦習群書治要云々 和歌自光孝天皇未絶 雖為綺語 我国習俗
也 不可棄置云々 所載禁秘抄 御習学専要候事 同廿日 中院に源氏物語初音の巻を
講せしむ 同廿九日 此暇 南庭に於て 中院をして源氏物語箒木の巻を講しめ給ふ 傳長老

冷泉為満を 隔て 女中 院 同く 此 今 為 大 坂 落人の 内に 源氏を 読の 中 三 文 簾
琴を 鼓 せしむ 同年八月二日 此 殺 者 庭に於て 中院をして 源氏物語箒木の巻を 講しめ
給ふ 同又日 此日 出来 此 船 矢 橋 より 水 に 若 御 森 為 此 轅 を 留 る 十三日 なし て
論語学而篇を講せしむ 一能 獨 至 力 能 致 と 云 処 を 此 自 為 此 講 能 成 錬 と 云
字義 此 講 釈 あり

十七日 傳 不 残 に 大 義 一 読 を 編 ふ 同年八月 此日 二条 此 数 途 還 發 府 に 還御 同廿九日 發 府 を
此 発 駕 る 同年九月十日 江戸 西丸へ 入御 同月廿八日 四筆記 右筆記 条令 続 同 於 紀 続 日 本 後 紀 文
徳 実 録 將軍家へ 写 させ られて 続記 録 る 出 傳 出 きる 同年十一月 此日 韓 長老 部 の 本 此 河 入 御 脈
中 番 禁 裡 に 於て 此 板 余 伝 来 る 中 来 る 同年十二月 此日 江戸 此 出 駕 同 十六日 駿府へ 入御

元和二年正月朔日 諸士始て烏帽子素袍を着し 初 正を 賀し 奉る 此 二日 駿府 田中に 猟 し 給ふ 織

土井大炊頭安藤帯刀数献年人松平右衛門板倉内膳秋元但馬以上七人香辞議定被刻定夜まて乗法之
十九日依服縫次三尺に方小宮井飯高飛騨方二ツ立差別遷座あり左右絹幕引あり筵薄絹布
を立らく之依服より二十八間斗之 絹布二十三疋筵薄絡布十端之 久能本社事 御社西 御弓 御矢 楯鉾 武役ハ装束社西 教案
御鏡ハ孫兵 御幣 榊原内記持之 鈴子 御輿 供奉烏帽子上下 御弓 御矢 楯鉾 同 右伝
法也 御幣ハ榊原内記持之 鈴ハ子振之也 閑之儀式灯明以下も表也 還坐あり 次内陣出御
の時忌構也中村 次鏡を内々陣へ納之 数米悉以太麻を持之 御鏡を手奉納也 次出御供
一揆後菜六揆也 後菜三十六膳あり 皆精進あり 次札之献絹を奉備御供也 内記へ伝法
中村也 次之種加持 次之種太麻 百二十座誦之 次祝戸降文 謹白元和二年卯月十
九日良時撰天 吉日良辰乎 太政大臣従一位源朝臣家康公乃 御形像乎 駿州有渡
郡久能乃奉葬高嶺仁 備神供 後葉此状乎 安久久 鎮坐弖 天下静謐 弥繁昌
長久之基乎 守利益与 恐美毛 奉申 辞別仁 申佐久 自然参集中仁 不心不
浄乃者 在止毛 御廣成 御心恵 於以天 守護 幸給 倍止 恐美毛 申 次小拜 次
拍手 次退下 次奉幣 未済再拝 榊原内記伝法之儀中数仕 次年寄衆各一拝 本多

本多上野 土井大炊 安藤帯刀 数献年人 松平右衛門 板倉内膳 秋元但馬 於内陣 在之 昇
て拝之 里中入也 次各退下 重夜各廟中へ帰也 導師 同院小差別 御廟小於て納之 為祝 御祝法其後
右の御神体 [illegible] 神龍院 元沙汰 [illegible]
小屋安置 [illegible] 入御法参あり 御焼香 [illegible] 次小
鶏冠 [illegible] 大和人 [illegible] 六人番 山下
一本社大明神造 [illegible] 次神楽 [illegible]
予次 [illegible] 元和年録 [illegible] 神宮 次材木の
安置 [illegible] 大和 [illegible] 榊原家記内記 元和二年四月 [illegible]
祭礼の [illegible] 是年久能山 本社 洋廉 本地堂 供所 楼門 鳥居 小 建立 之年 三月廿一日
勅して 東照大権現の神号を贈らせられ 同三月九日 正一位を贈らる 同十月廿六日 以遷命 以来 久能
山より下野国日光山小 改葬 改葬 [illegible]
東武実録 元和二年 十月十六日 大権現を駿府 久能山より 日光山小
正純 土井大炊頭 利勝 松平右衛門 大夫 正久 板倉内膳 正重昌 秋元但馬 守泰朝 小三百人余騎 を従へ 雑兵 二十人 騎 久能山
小登る 天海 僧正 [illegible] 御輿 [illegible] 御旧例あり 本多正純 土井利勝 松平正久 板倉重昌 秋元泰朝
数献年人 [illegible] 榊原内記照久 [illegible] 統事録 [illegible] 駿府方 小十
人組 [illegible] 日光山 [illegible] 同十二月
日光へ 御移 同四月十六日 日光山 御本社へ 遷宮 紀年録 同月十六日 夜 本社遷座 [illegible]
[illegible] 宰相 実紀 東照大権現 神号 [illegible] 正一位 [illegible]
奉幣使 清 [illegible] 宰相 共房 同十七日 御本社 小於て 以法会 以祭礼 衣廟 以社 参 正保 二年 十一月 三日
手 鄭の [illegible]

宮号宣下

◆御台所ハ実ハ刑部少輔氏縁卿親永が女 後築山殿と称す 弘治三年御入輿御婚礼 天正七年九月十五日 或八月廿九日 故ありて御生害 西光院殿と称し奉る 後の御台所ハ豊臣太閤の妹 朝日姫と称す 天正十四年五月十四日聚楽亭に於て逝去 御年四十八 東福寺にて御葬送 南明院殿と称し奉る 正徳四年十一月御供田五十石を南明院に寄らる 折柴聚楽記に 台徳院殿世の… 八千石を… 忌の… 法会を執…

台徳院殿御世

秀忠公 御実名 東照宮第三男 御母堂ハ西郷の局 於愛の方と称す 実ハ戸塚五郎太夫忠春が女 天正十七年五月十九日逝去 宝台院殿と称し後… 天正七年四月七日遠州浜松城に御誕生 幼名長松君 或ハ竹千代君と称し奉る 天正十五年八月八日従五位下侍従 或八十四年 天正十六年正月五日正五位下 正邦按 …十六年…

…

を経て初ゝ天正十八年… 天正十八年従四位下に… 天正十八年十二月廿四日

御… 同年十二月廿九日従四位下 天正十九年十月右近衛権中将兼武蔵守 同年十一月八日右近衛中将 … 同日参議 文禄元年 十二月改元

九月九日権中納言従三位 是より江戸中納言と称し奉る 十月江戸御留城 文禄二年九月御入洛 又是の御凱旋を賀し秀吉に謁しける 文禄三年二月十三日辞権中納言 文禄四年九月十七日御婚礼 豊臣太閤養女 … 慶長二年四月十一日長女千姫君生 御母堂ハ… 慶長八年七月廿八日秀頼公へ御入輿 元和二年九月… 寛永六年二月六日逝… 天樹院殿

慶長三年八月秀吉公伏見城に於て薨去 依て江戸御留城 慶長四年月日子々姫君生 御母堂ハ… 中… 元和八年七月三日逝… 天徳院 慶長五年七月十九日上杉景勝御征伐として江戸御発駕 下野宇都宮に御逗留 八月上方逆徒起るにより 会津の御手筈ハ止られ同月廿四日宇都宮より東山道を経て上洛 九月十五日関ケ原に於て光成等御誅伐 同月十九日草津の御陣営に… 同月廿日 東照宮に御対顔 同廿七日大坂二丸に入御 同年十二月十八日御参内 慶長六年正月大坂に御逗留 是天下を

続御しのふ二月日長丸君生 御母未詳寛永七年九月廿八日逝謚秋徳院殿葬増上寺別当浄興院 三月廿四日大坂へ御下向 同廿八日権大納言
従二位同廿九日 此年内同年正月十日御元服 御発途江戸へ 還御九月十二日 鶴松君生 御母堂未詳 十六年九月六日
城お守れ玉ふ事中後称る田安殿 寛文 十二年三月廿日逝謚天樹院殿葬天徳寺 寛永 七年正月 東照宮より日光に於て二十万石を賜ふ
らる 当代年譜ニ二十万石三万石升 大納言忠長卿ニ領知の事に見ゆ 寛永 八年七月初旬君生 御母堂御産所寛永七年三月四日逝謚円光院殿
葬伝通院 十一月七日 御若侍衆を清大将にて察に監 寛永 九年正月台徳院殿薨 政又如水孝言
の遺物を頒ち給ふ六月十日 御入洛同十一日 御参内 御中陰 神祖至京 七月十一日 卿日入御
松栄院殿法名 神祖とする事 当代年譜にも見ゆ 七月十七日 家光公御従
生 竹千代君の御母堂御産所 御傍の世紀に出る 寛永 十年 御上洛 三月廿一日 御入城 入御廿九日 御参内 同月七日
東照宮の御神職 同十六日二条城に於て将軍宣下 内大臣征夷大将軍正二位を賜る大将
元の如し 崇源院和姫 実は東福門院 源氏長者牛車を許されて随身兵仗を賜る同月
御参内御拝賀 同廿七日公卿二条城に来賀 是日御発駕 還御同年九月朔日諸大名
城の礼の参 庶同年六月四日江戸に 還御 寛永 十一年 江戸城の改築 八月七日 忠世出生

幽千代君は後に大納言 御母堂御産所 元和四年十一月従四位下左中将 六年八月廿一日参議 九年七月廿七日従三位権中納言 寛永元年八月封駿遠甲信 三年八月廿日従二位権大納言 八年九月蟄居 九年十二月六日逝謚峯巌院殿葬上野
ち高崎 同年九月廿三日 御成 東より御移徙 寛永 十二年正月 御本城御移 漢
出来浅草 此る同年五月 宗義智 朝鮮の三使を携て江戸に来り 土産貢物を献ず 夜
将軍家を謁 将軍家より返簡を朝鮮王に出さる是 此当代朝鮮来聘の始なり
十月四日 和子生 御母堂御産所元和六年六月十八日入内女御 寛永元年十一月廿八日立后 延宝六年六月十五日崩葬泉涌寺 寛永 十三年正月
学校を営 林に命じ活版を始 東鑑へ点を加え 七月 渋沢家久琉球王を携の
使臣を下して坊を営せらる 八月発府へ 御参詣 御起居を同せらる 同年十二月 承楽殿の造
用を禁止 旧銭通用を仰出さる 寛永銭は元禄銭に作る 古銭の事あり とあり 寛永 十四年七月十四日
諸侯に吸を 同年十月廿九日 中国西国の諸大名 十二月 寛永 江下り
江戸に 寛永 十五年正月二日 謡初の儀式 被 初代より始る 式
当代年譜 今年正月より始て 謡初 同年二月 発府へ 出参
御起居を同せらる 至二月 同 より後在て 数 止

三月小辛丑　還幸。同年六月庚戌朔。日有蝕之。
己巳。城宮築成。同年八月廿八日。琉球王尚寧始遣
使千令方。来献。
[紫式]十六年三月六日。従二位右大臣。源朝臣家康。
同年四月十二日　源氏長者。淳和奨学両院別当。
源朝臣家康。宣下。依二征夷大将軍一也。
同年十二月廿七日。源朝臣家康。任二内大臣一。
[紫式]十七年正月廿七日。武家の源氏。
同年二月従二一位一。
[紫式]十八年六月　禁中の制法を定らる。十二月新成。内裏へ還幸。
[紫式]十九年正月　来聘宮江戸に遣。西丸小御所にて
国書を捧らる。同年二月駿河の国江津城を壊る。

禁中并公家諸法度

[紫式]十七年正月廿七日武家の源氏。征夷大将軍に任ぜらる。
同年二月従二一位一。
[紫式]十八年六月　禁中の制法を定らる。十二月新成。内裏へ還幸。
[紫式]十九年正月　来聘宮江戸に遣。西丸小御所にて
国書を捧らる。同年二月駿河の国江津城を壊る。
同年四月十二日従一位右大臣。源朝臣家康。
城内年十月廿六日大坂の陣江戸に発。
同年十月廿七日。大坂城陣江戸に着。
[紫式]元和元年五月七日。大坂城の陣。
同年五月八日豊臣秀頼母子自尽。九日御入城。
大名悉く城内に祝儀申上。同廿二日二条城に入御。
[紫式]二年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]三年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]四年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]五年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]六年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]七年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]八年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]九年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]十年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]十一年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]十二年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]十三年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]十四年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]十五年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]十六年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]十七年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]十八年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]十九年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]二十年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]二十一年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]二十二年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]二十三年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]二十四年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]二十五年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]二十六年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]二十七年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]二十八年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]二十九年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]三十年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]三十一年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]三十二年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]三十三年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]三十四年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]三十五年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]三十六年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]三十七年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]三十八年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]三十九年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]四十年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]四十一年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]四十二年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]四十三年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]四十四年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]四十五年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]四十六年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]四十七年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]四十八年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]四十九年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]五十年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]五十一年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]五十二年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]五十三年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]五十四年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]五十五年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]五十六年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]五十七年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]五十八年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]五十九年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]六十年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]六十一年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]六十二年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]六十三年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]六十四年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]六十五年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]六十六年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]六十七年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]六十八年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]六十九年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]七十年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]七十一年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]七十二年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]七十三年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]七十四年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]七十五年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]七十六年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]七十七年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]七十八年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]七十九年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]八十年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]八十一年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]八十二年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]八十三年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]八十四年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]八十五年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]八十六年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]八十七年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]八十八年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]八十九年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]九十年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]九十一年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]九十二年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]九十三年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]九十四年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]九十五年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]九十六年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]九十七年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]九十八年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]九十九年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度
[紫式]百年六月廿一日　二条城小於て　禁中并公家諸法度

仍つの
と云 月十九日御見 出発途月八月四日 江戸 還御月廿四日着の法制を定らる同年十二月廿
六日月次七日大坂出陣流士到稽を乱され是日或は加恩或は褒賞 軍中紛失旗を
翌日二日六日出来常のごとく行 廿四日翌日より給恩判或七免職或は改易 元和二年
八翌日出来の紙を授 名判但 廿七日より八月を経て 元和二年二月
月九日深小袖月十日 出敵免 九月翌日九日出 祥七月七日 帳を書 准ず
翌日 東照宮 例より 駿府 出発 月二日申刻 同年八月廿二日 鷹山 御着
月年 月中旬 辞出 治要前版 成る 同年 十月 在 を
洋 本地堂 供所 楼門 居 出 達 是 年 江戸 林田川 撃て 堤 築 同年 十月 在 を
そ 殊 廃 ふ ため 文庫 出 出 糟 成 多て 尾張 紀伊 水戸 二家 小 獨 月二年 元和
江月 日 光山 出 来 宮月 年六月 日 落月十 日 出 光山 来 三
堂 城 出 礼 是年 紀 山辺 郡 門 堰 達月 年十二月 日本 旧記 と 奉世 の 記 小 江戸 文
庫 収 る 上田 芸 沙 汰 元和二年 夜十月 日 とあり 是 に 出
物 を 経 て 府 の 後月 月 元和 二年 廿四日 江戸 還御 九月 廿日 還 江戸 月年 十月 日 光山 出 来宮 元和 六年

正月大坂城石垣出来 慶長 同年 四月 江戸 城 出 夜 る 出 来 月年 四月 入内 後水尾院 葬 出 律 和子 参 る 年十九年 四月 入内 出 入内 女御 月九年十二月十九日 出 入 院 六月十九日
月六年十二月九日 東福門院 称 と 称 る 慶長十六年六月十九日 嗣 十二 光 年 出 城 小 之 九 建
元和二年 依 別 小 姫 城 十二万石 後 志 津 出 称 誘 叙 任 あ 之 元 年 八月 拠 大 納 る 同年 四月 二年 八月 拠 大 納 る 月七年 奴 之 同年 四月 九年 七月 従 之 後 中 納 る 実 ふ 元年 八月 鴻 を 安 出
進 る 二十七 元和 七年十月 後水尾 帝 より 勅 使 宗 勅 数 花 を 賜 ふ 門 葉 小 於 て 今 祝 院 こと 定
読む おこ 二の 号 定 基 入 道 寂 恕 入 宋 して 宋 帝 次 宗 数 せ ること 門 て 宗 て 同 年 の 名 誉 参 これ
感 あり 元和 八年 四月 光山 来 清 月 月 廿 二 日 出 本 城 出 移 徙 元和 九年 二月 十 二 日 尾 張 徳 川 忠 輝 土
月 二 日 本 城 出 移 徙 元和 九年 二月 十 二 日 尾 張 徳 川 忠 輝 土
さ て 江戸 出 発 宮 六月 出 入 洛 お 軍 機 を
入 洛 武 云 月 月 廿 七 日 楙 禮 料 月 廿 七 日 光 より 土
十 月 日 始 て 小 十 人 組 の 出 現 を 置 ふ 大 御 所 より 小 十 人 組 を 置 ふ
元 おく 出 来 の 号 大 御 所 石 出 小 十 人 の 出 来 公 称 小 十 人 組 と 称 一 年 家 元 和 二 年 出 小 姓 組 の 一 人 々 を 称 小 十 人 組 と 置
出 来 院 の 組 頭 元 和 同 日 出 来 百 り 小 十 人 元 を も 文 祝 中 出 称 れ 仕 出 供 の 給 次 汁 大 御 所 出 も 組 も り 々 た 武 出 も

可春申せし僕に小十人衆の内にて或次中斗の翁流しにて任命ある御身に人但組といふ支配仕事同年十
月 は本丸にて小十人組番頭に人三枝宗伊卯稗垣若七郎中根伊七郎衣物三郎其仰付と云
是に依る時は此衆の古へより有来りし事を流布せられしか
ま門ゑ淀城を築かる 寛永元年二月六日水戸頼房卿の屋形に 渡御あり相伴は紀伊中納言
頼宣卿なり二月二条の城は常陸同年四月江戸西丸は常陸 十四日蒲生下野守忠郷が宅に
渡御あるは相伴は水戸頼房卿義直卿和泉守高虎なり猿楽は能拾あり十一月十日 或八十二日
今東武実記 西丸へ 御移 或云孫丸は伏見城を引移さるは古実記は多門より先元忠が宅跡の居と
孫ふ従ふ 称し其外切なし東武実録はよりて伏見城を被宗和あり此に依るの
陣後とては其の戦場の例によるとし云門十二月四日 は本丸へ 渡御あるは従徒の志ある後より之 寛永二年
附関天下は当て淀城を経営と云
二月五日駿河中納言忠長卿の屋形に 渡御あるは相伴は尾張義直卿水戸頼房卿猿楽は能拾
同三月八日尾張卿屋形に 渡御水戸頼房卿丹羽長重義堂高虎は相伴なり猿楽 上覧
同八月九日天下の寺社所は同きにて は本丸へ 渡御駿河忠長卿水戸頼房卿は相伴義堂高虎
は元あり 寛永三年二月廿七日紀伊卿屋形へ 渡御あるは相伴は水戸頼房卿義堂高虎なり
猿楽は能見物同五月内藤政長が桜田の屋敷池上亭へ 渡御同五月廿八日 大御所は上洛

として江戸 は発駕あり六月廿日は入洛七月二条城には止宿八月九日 大御所淀の城に
渡御あるは城中 上覧八月十八日 或八十九日今出川晴季卿大政大臣同年十月江戸へ 還御 寛永四年二月二日駿河
卿屋形に 渡御あるは相伴は水戸頼房卿丹羽長重なり同月二日尾張卿屋形に 渡御あるは相
伴は水戸頼房卿立花宗茂なり同十四日水戸卿屋形へ 渡御あるは相伴は尾張義直卿立花
宗茂なり七月廿四日駿河卿屋形へ 渡御ある 寛永五年四月日光山は参宮 寛永八年二月
廿八日尾張卿屋形に 渡御あるは相伴は水戸頼房卿なり二月十九日尾張卿より世界の図を上
せらる 或は言行録 同六月廿二日より御不豫に付 将軍家移て西丸に 渡御ある 寛永□年□月
□日御居間の側に御学問処を建らる御術身は算法の耕作の図あり 寛永九年正月御不豫
ご危篤し 将軍家同く西丸に 渡御あるは二家及執政諸大名ぬ同く登 城あるは廿四日成刻薨御
西丸に薨御あり西丸は本丸の火災より西丸に薨御有らは御年五十四同廿六日夜は増上寺へ御
酒井雅楽頭忠世が為丸に移り後は表方に毎の如く大名元宅と云
葬送同二月廿二日 勅使 台徳院殿贈正一位大相国同廿六日 将軍家より遺勅を奉せらる兵
安中方は家門諸大名万石以下は旗本諸ら役室は役人と 御霊前は方門公坊を在と

猷少

出遣令を獨人又は自裁を獨る　▲御產所小獨中納言長政卿息女綱姫小袿の腰を結ひ（此事御産所にて）
織田右府信長の妹　御產所にて遣ひ遣ひ式三献にて後年大典侍と稱し（後年豊臣太閤
秀吉公の養女となる）猶又文祿元年九月廿七日修理大夫に任ず　又慶長二年九月廿日勅許
を以て參議に進み紫宸殿にて拜舞の儀を行ふ　同年十一月従一位に叙せらる　同九年九月出家
法名を改めて二位中納言と稱せらる

○大猷院殿御世

家光公出生の事　石德院殿（徳川秀忠公）

井長政息女　慈の表　九年七月十七日江戸西丸にて誕生　（幼名竹千代と申す）同年十月
廿日江戸城本丸へ移る　（此時御乳人は春日局）　元和二年十一月廿一日西丸にて袴着　元和
九年七月廿七日名を　家光公と改む　（此時御乳人は春日局）　同年九月廿日西丸より本丸へ
移徙　元和六年正月廿日従二位に叙せらる　（此時御乳人は春日局）　同年十月廿日宣旨
を以て參議に任ず　（此時御乳人は春日局）　寛永三年七月十一日權大納言に轉ず　（此時御乳人は春日局）
同年九月廿日從二位に叙せらる　（此時御乳人は春日局）　同年十一月廿日内大臣に任ず　（此時御乳人は春日局）
同年十二月廿日征夷大將軍宣下あり　（此時御乳人は春日局）　同十一年六月廿一日參内
（此時御乳人は春日局）　同年七月廿一日上洛　（此時御乳人は春日局）　同廿七日二條城に入御
（此時御乳人は春日局）　同廿九日參内　（此時御乳人は春日局）　同八月朔日太刀馬代
（此時御乳人は春日局）　同三日參内　（此時御乳人は春日局）　同四日參内　（此時御乳人は春日局）
同五日參内　（此時御乳人は春日局）　同六日參内　（此時御乳人は春日局）　同七日參内
（此時御乳人は春日局）　同八日參内　（此時御乳人は春日局）　同九日參内　（此時御乳人は春日局）
同十日參内　（此時御乳人は春日局）　同十一日參内　（此時御乳人は春日局）　同十二日參内
（此時御乳人は春日局）　同十三日參内　（此時御乳人は春日局）　同十四日參内　（此時御乳人は春日局）
同十五日參内　（此時御乳人は春日局）　同十六日參内　（此時御乳人は春日局）　同十七日參内
（此時御乳人は春日局）　同十八日參内　（此時御乳人は春日局）　同十九日參内　（此時御乳人は春日局）
同廿日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿一日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿二日參内
（此時御乳人は春日局）　同廿三日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿四日參内　（此時御乳人は春日局）
同廿五日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿六日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿七日參内
（此時御乳人は春日局）　同廿八日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿九日參内　（此時御乳人は春日局）
同晦日參内　（此時御乳人は春日局）　同九月朔日參内　（此時御乳人は春日局）　同二日參内
（此時御乳人は春日局）　同三日參内　（此時御乳人は春日局）　同四日參内　（此時御乳人は春日局）
同五日參内　（此時御乳人は春日局）　同六日參内　（此時御乳人は春日局）　同七日參内
（此時御乳人は春日局）　同八日參内　（此時御乳人は春日局）　同九日參内　（此時御乳人は春日局）
同十日參内　（此時御乳人は春日局）　同十一日參内　（此時御乳人は春日局）　同十二日參内
（此時御乳人は春日局）　同十三日參内　（此時御乳人は春日局）　同十四日參内　（此時御乳人は春日局）
同十五日參内　（此時御乳人は春日局）　同十六日參内　（此時御乳人は春日局）　同十七日參内
（此時御乳人は春日局）　同十八日參内　（此時御乳人は春日局）　同十九日參内　（此時御乳人は春日局）
同廿日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿一日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿二日參内
（此時御乳人は春日局）　同廿三日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿四日參内　（此時御乳人は春日局）
同廿五日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿六日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿七日參内
（此時御乳人は春日局）　同廿八日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿九日參内　（此時御乳人は春日局）
同晦日參内　（此時御乳人は春日局）　同十月朔日參内　（此時御乳人は春日局）　同二日參内
（此時御乳人は春日局）　同三日參内　（此時御乳人は春日局）　同四日參内　（此時御乳人は春日局）
同五日參内　（此時御乳人は春日局）　同六日參内　（此時御乳人は春日局）　同七日參内
（此時御乳人は春日局）　同八日參内　（此時御乳人は春日局）　同九日參内　（此時御乳人は春日局）
同十日參内　（此時御乳人は春日局）　同十一日參内　（此時御乳人は春日局）　同十二日參内
（此時御乳人は春日局）　同十三日參内　（此時御乳人は春日局）　同十四日參内　（此時御乳人は春日局）
同十五日參内　（此時御乳人は春日局）　同十六日參内　（此時御乳人は春日局）　同十七日參内
（此時御乳人は春日局）　同十八日參内　（此時御乳人は春日局）　同十九日參内　（此時御乳人は春日局）
同廿日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿一日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿二日參内
（此時御乳人は春日局）　同廿三日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿四日參内　（此時御乳人は春日局）
同廿五日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿六日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿七日參内
（此時御乳人は春日局）　同廿八日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿九日參内　（此時御乳人は春日局）
同晦日參内　（此時御乳人は春日局）　同十一月朔日參内　（此時御乳人は春日局）　同二日參内
（此時御乳人は春日局）　同三日參内　（此時御乳人は春日局）　同四日參内　（此時御乳人は春日局）
同五日參内　（此時御乳人は春日局）　同六日參内　（此時御乳人は春日局）　同七日參内
（此時御乳人は春日局）　同八日參内　（此時御乳人は春日局）　同九日參内　（此時御乳人は春日局）
同十日參内　（此時御乳人は春日局）　同十一日參内　（此時御乳人は春日局）　同十二日參内
（此時御乳人は春日局）　同十三日參内　（此時御乳人は春日局）　同十四日參内　（此時御乳人は春日局）
同十五日參内　（此時御乳人は春日局）　同十六日參内　（此時御乳人は春日局）　同十七日參内
（此時御乳人は春日局）　同十八日參内　（此時御乳人は春日局）　同十九日參内　（此時御乳人は春日局）
同廿日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿一日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿二日參内
（此時御乳人は春日局）　同廿三日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿四日參内　（此時御乳人は春日局）
同廿五日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿六日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿七日參内
（此時御乳人は春日局）　同廿八日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿九日參内　（此時御乳人は春日局）
同晦日參内　（此時御乳人は春日局）　同十二月朔日參内　（此時御乳人は春日局）　同二日參内
（此時御乳人は春日局）　同三日參内　（此時御乳人は春日局）　同四日參内　（此時御乳人は春日局）
同五日參内　（此時御乳人は春日局）　同六日參内　（此時御乳人は春日局）　同七日參内
（此時御乳人は春日局）　同八日參内　（此時御乳人は春日局）　同九日參内　（此時御乳人は春日局）
同十日參内　（此時御乳人は春日局）　同十一日參内　（此時御乳人は春日局）　同十二日參内
（此時御乳人は春日局）　同十三日參内　（此時御乳人は春日局）　同十四日參内　（此時御乳人は春日局）
同十五日參内　（此時御乳人は春日局）　同十六日參内　（此時御乳人は春日局）　同十七日參内
（此時御乳人は春日局）　同十八日參内　（此時御乳人は春日局）　同十九日參内　（此時御乳人は春日局）
同廿日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿一日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿二日參内
（此時御乳人は春日局）　同廿三日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿四日參内　（此時御乳人は春日局）
同廿五日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿六日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿七日參内
（此時御乳人は春日局）　同廿八日參内　（此時御乳人は春日局）　同廿九日參内　（此時御乳人は春日局）
同晦日參内　（此時御乳人は春日局）

朝鮮礼使ヨリ　城内礼曹参判ヨリ書翰使ヨリ

改寛永二年三月十八日川越ヘ出発寄宿

壮永十月晦日参礼登城ヨリ退出ノ節

寛永三年正月朔日参礼登城ヨリ退出ノ節

寛永三年正月朔日参礼ヨリ退出ノ節

二月晦日光ヨリ帰府ノ節

三月晦日光ヨリ帰府ノ節

閏四月十日光ヨリ帰府ノ節

五月晦日光ヨリ帰府ノ節

六月晦日光ヨリ帰府ノ節

七月晦日光ヨリ帰府ノ節

八月晦日光ヨリ帰府ノ節

九月晦日光ヨリ帰府ノ節

十月晦日光ヨリ帰府ノ節

十一月晦日光ヨリ帰府ノ節

十二月晦日光ヨリ帰府ノ節

壮永十月晦日参礼登城ヨリ退出ノ節

寛永三年正月朔日参礼ヨリ退出ノ節

寛永三年正月朔日参礼ヨリ退出ノ節

二月晦日光ヨリ帰府ノ節

三月晦日光ヨリ帰府ノ節

閏四月十日光ヨリ帰府ノ節

五月晦日光ヨリ帰府ノ節

六月晦日光ヨリ帰府ノ節

七月晦日光ヨリ帰府ノ節

八月晦日光ヨリ帰府ノ節

九月晦日光ヨリ帰府ノ節

十月晦日光ヨリ帰府ノ節

十一月晦日光ヨリ帰府ノ節

十二月晦日光ヨリ帰府ノ節

九年

十年

十一年

十二年

十三年

十四年

十五年

十六年

十七年

十八年

大名 忠代

出羽 古張

纂に従ふ 作事抱手筋旧人等あり 作肴 二十二年正月廿四日御聞之上意にて寛永十八年本田備中守資宗に命ありし 儒家の系図を撰しめられし事ありて十一月朔日作せし事あり同六月儒西流系図の正保三年正月御覧に入る よし右は其記す所也 伊佐の貝塚にと同しく其作の役を勤む 是年日光山 東照大権現の宝塔の造営あり 寛永十九年

二月より五月に至て天下大小飢饉あるに依て救米ありし錫門二月十日令於院並に江戸下巷の節

大塔を建る 政小時の後及五畿の儀に命して武家系図編集の事に預らしむ 同年七月十七日

日光山 以本院月九日以当代大名の系譜六月と定めらる 実系の外の家の諸八家年表

譜と号せらる 寛永廿年六月朝鮮の使信来聘也 竹千代君依て誕生也 同七月日光山 御宮参詣 八月七日初る

朝鮮当時迄の絵を三百石也 始めて将軍と面見し大使に謁して贈物二十人の使に桔梗之間にて謁見す 寛永元年六月十二日将軍二組其他の本丸 一 若年 御本丸に相勤候 本丸二組 家光以下御命

同日本丸にて将軍二組之命 正保元年十一月廿三日二之丸組の相勤む 寛文二年十一月廿三日西丸番士二組 御本丸勤務 作事奉行を勤む 寛文十六年九月十二日六組勤め 寛政二年

本丸勤之 作事奉行是迄勤 八月廿八日 二之丸組勤門同月廿九日御番頭御祐筆一番組二組 当番組頭以下組に入る 一番組頭以下寛政十三年正月 同

七組勤門同月七日一番組番頭 一番組頭以下寛延二年一番組組頭以下組勤と 寛政 号の寛延元年 以組御判入共より六組勤と相勤しむ

八月天海僧正卒去 将軍家東叡山に 渡御ありて御自筆の湯を賜ふ 天海八十余歳にて弥く以て依

執政と共に政務を沙汰して将軍家光公の御師範と定め大久保より諸大名幷将軍も

存在にして 上下の者事を尚ぶ 将軍家より又御歌ありて御先代に預りせり十月二日天海僧正寂年

百二十三 慈眼大師 同月晦日御蓮台寺に同九月十七日武家系図 将軍御補大漢字百六十六巻和字百

八十六巻 総計三百七十二巻 寛永諸家系図伝と云 本田備中守資宗に 系図伝序 同廿一日諸家系図伝を総

裁せし 本田備中守資宗へ黄金を 儒者五人一文字書房の刀を賜ふ 雑務賜ひあり一本十二月廿一日とも 同十月三日

明正院譲位 同十一月廿一日 後光明院即位 此際 後水尾院皇子 諱紹仁 是年 東福門院の下賜に依て

阿部豊後守忠秋 朝鮮信来 七巻を林道春に仰らしめて承て献せしむ 是年 東福門院 有 去秋御番侍子二十

朝鮮来貢 陥来して阿部 正保 寛永廿一年 元年 正月十日 諸家系図編纂の役人

忠秋 余作 記而 献 承 是と 入る 上月 改元 系図 以上 役人

黄金を 正月十日 令 御前 系図 仰付 今 前 尾張 役人へ 此下 賜ふ 銀子拾枚 小袖 又 今

此院 良 目 銀 百枚 兄 樹 院 云 銀 廿枚 小 袖 宛 賜 五 上 宛 より 二十 枚 小 袖 宛

尾張殿 安藤 仙 三十枚 正的 銀廿枚 戸田 下 の 手 八人 在 之 二月十九日 此 堀 御 放 三月

執柳 右の 役中 系 本田 備中 守 別 上 之 謁 之 総 掛 之 法 松平 伊豆守 府 寄 相 林 採

廿五日 小園井山 林 来 出 て 山麻 行 同 五月廿四日 長松君生 後 田 母 堂 方 参 牧 行 昌

春徳院 様 寛文 元年 四月 二日 対 河 法 後 往 甲上 同 三年 十二日 従 三位 権 中納言 三年 七月 廿六日

将 鷹 田 安 寛文 元年 八月 九日 甲府 城 十二月 廿八日 参 議 延宝 六年 九月 十四日 逝 遊 清揚院 葬 伝 通院

宝永 二年 十月 廿日 追 贈 正 二位 大 将 軍 正 一位 太 政 大臣 同 七月 十九日 崇 国 公 盛 り 諸 事 の 下 座 奉 小 渡 御 竹

六年 八月 十二日 被 征夷 大将軍 同 七月 十九日

敷 前 の 出 始 あり 同 八月 十日 松 門 東 海 寺 之 入 行 於 山 自 公 事 出 裁 判 大 老 老 中 奉 令 同 十月 下 旬

毛利秀元 西丸に出 城山里 出 数寄屋 小 於 て 茶 を 献 せ ん 同 十一月 本 朝 編 集 の 為 に 冊 を 朝 三

代々家大猷公卷命せ立て撰上る同十二月廿八日日本逸史の局同諸撰諸家を撰せしめらる

是を正保古今諸家と云今の文庫に現存すと云 大日本井上撰議書に秘撰書を諸家撰書の武家 大猷公治世画記に載するところの実事の件解を

御家令条に出づ 正保 二年二月廿六日品川の東海寺 渡御公事の取裁等あり 二月廿九日 稲松右京 小姓組番方 太田氏女陪

宝光院殿 此年八月廿日逝 浚明院殿 葬於 菩提院 同三月十九日清月の席まで丹の如く光を失ふ同月老子読解を示して

撰せしめらる 此月廿三日 是より先元禄の事を命して 是より先元禄記を撰らしむ 此年大猷公伝目 廿三日 初若君誕

元禄使及其作 優事記と名ふ 同八月十六日 堀田正盛が将軍の座前へ 渡御是月諸宝に巡て役を定さる 同

又同日光山神廟に参詣する 東照宮御霊位の文書を写さしめらる尾張紀伊水戸も又献史

を献せらる 其事紀 此年春 大猷公着御二年有旨 東照大神宮位次第尾張紀伊水戸献議定其次

尾張紀伊院殿 台徳院殿位記宣旨 於其上を其歌讃岐日光遠望仙門堂

公海寺那廟不叢文政大将宣旨同九日 寛久能山寺御宮位宣旨八通而於到大磯令

勅使菊亭大納言経季卿参 補不足而 東照神君御宮位宣旨を以て冬松平伊豆守

殊差容旨来問之事社を差別 其中御文を酒井讃岐守脩令来拘事再家使

其藥院御寺 城於使者の被問之事及先遣 家光日

為物使者日光山名所 東照社務官位之宣旨云 同八月合此堀田 御放同十一日堀田正盛が将軍

座前へ 渡御是より四家松平隅田川の出 御帰城 同晦日品川東海寺に 渡御 堀田正盛の宅より東海寺 又品川海上に於て大網を曳せ御覧

日光伊勢例幣使始

上意あり是年小笠原右近将監忠真家綱公の記を記して奉る 小笠原家譜 同年今

年より 禁裡より於て毎年伊勢日光年幣使を立らる 白石の御立に日光幣使 伊勢も例幣と云伊勢八九月十六日 日光八四月十六日なり 是年今由緒 江戸在邑在々の事路不安座を定る 正保 二年正月八日

徳松君生 綱吉公 御世紀に出 此月十七日 将現御年譜尾張亜相々養子を撰上せらる 御年譜に出

御放 出御の刻限白書院の前座に頂戴あり 御年譜 御宮へ進納あるべきの旨酒井対

馬守へ仰付 御日記 出城酒井讃岐守 一同上 御宮へ御参詣 一尾張大納言殿 御年譜 上意の後 御部の

亜槐退出 一同上別記 御年譜 台徳院殿 御年譜

以上

同年十月廿日 明正天皇一宮誕生を皇子に依て諸大名へ仰出是年井上

筑後守政重 同年 御年譜

介記正次留て華を世し諸施の出武極集中大成集等を撰集ありと 台徳に

倣ふ小栗新兵衛正房作りて城制の器を献上し是年林道春をして日本大唐往

来を撰せしめらる 其書編出国家の正保年中大明福州鄭芝龍与韃虜而戦於我朝

和時無教 援を求むる事請ふ之事を記す 大献公 小児年福州有乞援兵之事 其間を至る諸進

浄前記日二階岡老席此ヨリ執政甚秘ス
全ク亦不能字ニモ略記粗存ス家ヲ名
後月ニ至リ八洗テ但シ月ノ月終ハ月廿六日小風烈吹雪降
ヨリテ俄ニ寒月ヌ甲ダメ一月廿六日ヨリ廿九日麻布ニ出放鷹
当路ノ来扱当ノ内井伊直孝ガ不在家小
浴ス月廿六日ヨリ廿七日ニ大地震 市城共大ニ震
被扱月六月十二日 将軍家風邪後紀伊殿水戸殿
登城ノ祝ヲ勤ム月七月十二日晴国ニ登
国ニ月十七日松平城中ヨリ安倍河ヲ三別大樹ニ
西社ヨリ 来照宮三十三回忌 当山ヨリ
御招来憑渡牧物ヲ以国ヲ
大要希被作ヲ辞ト又名 月村日光 市宮ヨリ
命セラル年也 林子ヨリ
独リ
年ヨリ
ヲ名テ深夜両ノ方ヨリ
ベシト○此時判ノ義終ノ間於二殿数一
六百六十ノ覚ヲ以テ廿七日晴判行ヲ到
慶安二年
三月廿二日夜家ヨリ
慶安二年
二月廿九日ヨリ
慶安元年
正月十日ヨリ
慶安元年
七月廿日迄
慶安二年
三月廿六日迄
慶安二年
十二月廿七日迄
慶安二年
十二月廿七日迄

武芳上座四回忌法場ニ 作者
被扱七月廿日川城ニ大雷降 市宮ヨリ
民屋彼倒人多死月九月琉球人来聘
ヤ座敷ハ 浴ス月十月廿日月十六日堂
上勅答
慶安
二年三月廿二日夜家ヨリ
但日文ハ人ヲ
又七人家ヲ二年三月九日ヨリ
又廿ハ
とある 慶安二年小栗正房陣屋割ヲ
小栗未帰ニ二年 幕ヨリ及ヲ
宮ニ浴場及ヲ
推問ニ
本ヲ以テ
月廿二日東叡山ヘ 浄入棺月廿六日月ヲ
葬月十七日勅使宣命使ヲ向 勅諚 大
伝房公息女四歳ヲ養子ニ
慶安二年
六月八日薨ス 年
大蔵院殿従一位大相国 ▲市泰院殿ト号ス
市宮ヨリ
慶安二年
正月廿日ヨリ
浄名寺ヨリ月六日晃山ヲ送
政
年理院殿ト号ス小名川伝通院ヘ

御葬送　江戸小石川小日向の元和の末にや江戸にしら世たる人寛永の頃めし出され勝れるけり御家中に拾置への御女
かりそめに召させたまひし結びなり　御所の六ッ年に御子まうけさせたまひしを君子のよきことさひしくそおもひ出ましけるが後の御ひたかりうけさせたまひぬ　家中にも仕りし事ありしか御子寺とも世にあるはさまし給ひ
かりそめにまかる御子と御祝へ　御産をと思せしよりあらへまもなく又御所の内にさ
仰せ出されし御方にかゝる事なくて　宝暦十三年四月十六日　贈従一位

〇

巖有院殿御世

家綱公御事ハ　大猷院殿御嫡男御母堂ハ美木之太郎利長女
おらくの方後に宝樹院殿と称し江戸二ノ御丸にて　竹千代君と称し西丸の御城に移らる
御産の御家にて　寛永元年十二月二日御誕生　三の丸にてましまし御位を

寛永十八年八月三日卯上刻御本丸にて御誕生　御産屋は酒井雅楽頭忠世内にて御幼名　竹千代君と申す　九月二日初て
御髪置　出御同廿三日御宮参初て同日より　寛永十九年二月九日紅葉山　御宮参　山王へ御社参
御の丸は井伊掃部頭に供奉す　寛永廿年正月十日御髪置　同年七月廿五日二丸へ被為入二の丸を
御移　大猷院殿御不予の御時二の丸にて御産所となさる　御元服　正保元年十二月十七日御袴着を　家綱公　正保二年正
月三日御縁組四月廿三日御元服　井伊掃部頭御加冠　従三位権大納言同日正二位に叙し従二位正三位
慶安元年　六月廿日御中剃初　御頭役同月九日大老酒井雅楽頭忠清が年をゆるし　御髪置　溜詰出仕

慶安四年

御用番にて　江戸向後の事も　慶安二年四月廿日酒井忠清が宅に　渡御同十日　御登城日光山　御参詣同廿三日
江戸御城　慶安二年二月廿六日永田町松平主殿頭の宅へ　御成あり　上野の三門の麹町日枝権現の
社を造営　御社の今の御在所は御城内紅葉山の地にありしを御城の外へ御移し天正十九年十月　御宮の宮地の社殿
先の御社の西の方に付る慶安九年十一月八日　竹千代君初て山王社へ　御参詣ありし時の御社より　慶安十二月
十六日武州浅草の内にて御出生なされた　御殿の御所の内の御参詣の御門貝塚の地にて　慶安
今の元山王との御寛永の江戸絵図にも今の井伊掃部頭の屋敷と　同九月廿日二丸より西丸へ御移徙
麹町表の門より中央の御道筋に押出して祀れる　慶安

四年正月廿日　将軍家御不豫にて御本丸に　渡御同月列座の御礼又御病中　同廿八日
御本丸へ御移徙　西丸より御移徙　四月廿日同月廿七日御代替の御礼　同七月十三日由比正雪丸橋忠弥等
西丸御殿の事も　御本丸の御普請所の御側衆の事にて御側衆の事　七月廿三日由比正雪丸橋忠弥謀叛の企
公大膳御番方の事も御成の御物の事　御本丸御普請所の御側の者共の事　井伊掃部頭を始め御側
井伊家の御旗本の事も　御旗本の者にて討たる　丸橋忠弥は江戸にて捕へられ正雪は駿府にて自殺す
加藤秋田の事にも　御門番を　自殺せしめ又御殿の中に十余人も召捕らる
又酒井の事も今又一族の者共　同廿八日松平伊豆守信綱の御用にて　八月十日会井の事　同月十八日
大坂にて自殺同十二月廿九日丸橋忠弥並に　一味の者共誅せらる
将軍　宣下征夷大将軍兼右近衛大将右馬寮御監淳和奨学両院別当源氏長者内大臣右大将也元年
車駕兵仗を賜る此月阿部豊後守忠秋林道春をして大学和学の掛頁別改要諸解を作らしめて

兼倉之事

三年

幼君小新一条ノ
改要渡辞退
ふ事小栗正房流罪の後廃及び猿楽と
の四級式あり 猿楽小今事うち絶ゆるあり 渡辺同日連名の
よめされ一流栄の四風を渡辺うち絶ゆるあり
献廃の代ゆるうち考の連名の
憲廟の天和元年かぎり 同年八月廿六日祝詞
山芸事今澤祀渡ち正ち補裏編一冊を
兼倉 二年正月十六日玉川上水を掘に引
月廿三日 禁裡宮上 満今ハ 渡光亜院仏閣を修
十七日ハ奉外題秘要七冊ありとの
校合まべきうをも命せらる 校訂よ
校中 祝穂日録。今ハ文庫に合沢本
外題秘要十一冊ありとの 同八月十二日
久世大和守 牧野佐渡守内藤紀伊守
代官人の内一人今出沢の同小沼ハ
仰付小姓組組頭 兼倉 元年 九月十八日改元 正月十日ハ奥云ふ渡辺
の四級式あり 猿楽小今事うち絶ゆるあり 渡辺同日連名の処ハ元和元年渡辺連名を載ス 本座云ふ名ハ今の陣
よめされ一流栄の四風を渡辺うち絶ゆるあり 同年八月廿六日祝詞
献廃の代ゆるうち考の連名の 憲廟の天和元年かぎり 同年八月廿六日祝詞
山芸事今澤祀渡ち正ち補裏編一冊を
兼倉 二年正月十六日玉川上水を掘に引
月廿三日 禁裡宮上 満今ハ 渡光亜院仏閣を修
十七日ハ奉外題秘要七冊ありとの
校合まべきうをも命せらる 校訂よ
校中 祝穂日録。今ハ文庫に合沢本
外題秘要十一冊ありとの 同八月十二日
久世大和守 牧野佐渡守内藤紀伊守
代官人の内一人今出沢の同小沼ハ
仰付小姓組組頭 兼倉 元年 九月十八日改元 正月十日ハ奥云ふ渡辺

酒木あり 今ハ失ふ 八月廿日琉球使ヲ 協ヲ礼
山渡初三日とあり 宮樹院殿ヲ
壊ち 大猷院殿ヲ 月九月廿日
森文院へ 遷座 再建
ちり 月十二月廿八日良仁親王ヲ 践祚ヲ
ちり 医暦 元年 改元 正月廿八日 玉林院殿ヲ
らしめ 又漢魏六朝唐宋百人一首ヲ
百首ヲ 又巻ヲ 月廿八日 朔旦冬至
一字ヲ 白紙ヲ 献上ス
迂回文庫 秘閣蔵書 月七月二日二九ヘ
市ヘ 橋ヲ
保元年七月廿六日 中川海ヲ 村新田ヲ
ス 月十月八日 朔辛酉 詔ヲ 月十九日 ヲ 時雨ヲ 遣ス 元年

酒木あり 今ハ失ふ 八月廿日琉球使ヲ 協ヲ礼
山渡初三日とあり 宮樹院殿ヲ
壊ち 大猷院殿ヲ 月九月廿日
森文院へ 遷座 再建
ちり 月十二月廿八日良仁親王ヲ 践祚ヲ
ちり 医暦 元年 改元 正月廿八日 玉林院殿ヲ
らしめ 又漢魏六朝唐宋百人一首ヲ
百首ヲ 又巻ヲ 月廿八日 朔旦冬至
一字ヲ 白紙ヲ 献上ス
迂回文庫 秘閣蔵書 月七月二日二九ヘ
市ヘ 橋ヲ
保元年七月廿六日 中川海ヲ 村新田ヲ
ス 月十月八日 朔辛酉 詔ヲ 月十九日 ヲ 時雨ヲ 遣ス 元年

二年

明の僧隠元長崎に来り今年一寺を建　是年小泉安房守正房　仰に依て城判の法を定む　明暦二年正
月廿二日　後西院即位　後水尾院第六皇子諱良仁　同月七日に疱瘡に酒湯の式あり同月廿六日に額
直し　同月廿六日酒井讃岐守忠勝の亭へ　御成遊ばされ宗乃附後十数人ニ御暇
給ふて出座に贈物七十五枚　讃岐守能く承けて御奉書物　是別撰集名
表状読之以上坂上記院目記　羅山文集等来記の後に　大君幕下先帝殷懃秀吉公秀頼家康御武功
之勤労務年歴久而慮向来安人之志此事者擬羽林粗子所見専且奉当初小説及差
遣之所侍云乃後尽書及書并以纂記之有上下巻号曰実永合戦始末記○御京都行に
行彦へ　考え実原の陣の年に若林の代の残る六末之流最の記録あども不詳に於て是末の未遂か記
義にて記し　乗り入れの記にて古老の人の見聞は宗の出来き実原陣夫記出来に於ては知らず御旅林
再発由出ぬ抱残る故林尾書尤とも此旅は穿鑿に在り古考大猷末記也にて　変有院様へ献せられ
此　同六月本丸江戸西の方に見えるが数日　手形年のなかく二本あり西天の中央に至る毎日申下
数日消え之　刻より出て秋に入て又光あらく火のやう　後る毛
を火柱と云　同十一月廿二日　同晦日二丸に於て諸大名の的射　上覧同十二月十二日
老せしむ於　御前大学を講せしめらる　土津吴林云如緑子十二月十二日　御前及び此事郎
太服酒左右曰幕下欽哉大人其様天　同廿六日諸大名方に書改　世上恢慈勤をなし黄金
下名久之寒也何幸如此賛歎不已
萬端を悉く被下る　明暦三年正月十九日御本丸二丸三丸に大守是上
　考定要録に十八日午刻より風烈しく本丸三丸寺に移る

三年
本中丸
御上

出火並十九日朝辰刻消同日午中刻小石川新鷹匠町より出火同夜戌刻麹町七丁目より出火　西丸に　後御火災後は天下御所において御警を施し
為す同年二月七日本丸半焼のの縁を建造を回向院と云　考定要録に十九日麹町の火三千焼死人十万八千余人撰の浮屍を町奉行より付記載を施して年
浅々　牛込　ひかむ廿九日に死亡六千二百石坊ニ字之建立すへき旨仰付らる　同年十一月十七日寺院暑成　公儀より御金三百両を給ふとも同十日今度焼死の主なる一万石より九万石まで
出し　後諸大名へ参勤之儀を御猶予被下　仰付一万石より九万石まで三百両つゝ貸し与へて返納は十年賦　万石以下は旗本に至る迄今度小旗本の被害に準じて其の分々に金
を下さる百石に拾両を積み百石以下は其事々に　其外町人にも金子を賜ふ同年七月廿日　大猷院殿七回に依て
上野において法会あり同年七月八日於紅葉山霊廟に参詣有之　上意　万治元年　七月廿三日改元　正月廿四日
有徳院殿廿七回に法会場上野において法会あり同年二月晦日文庫の宝物を納めしむ
去年火事にて云の書籍焼失を撰して写本の　此時本金五百両を賜へて以て求書の料とし与えしめられ又儒臣に命して編集の旨　同年正月小泉安房守正房誅
割の不届を赦す同年九月明国永明王の軍師鄭成功使者をして援兵を請ふ　鄭成功は明国姓朱を賜はる　同年十
月晦日　侍講同院兼学林　焼失に付　同年十二月書籍を命して論語十有五両を下し学業を探
じ画ける聖像の上に安置せしめらる　万治二年正月十一日に旗奉行を拂せらる　同年二月十二日　御本丸
経営はじめ　石材は築地で石を汲て　旧記には　云もの年に本丸二の丸三の丸作事　御本丸の　小普請に　
凡そ集られ　人足十人宛　作事奉行十五万両その三万両さらに　元禄分とて　作事　成就して

巌

三十三

二年

本丸
御移
渡

楽人来日光下向ハ流るゝ故にて江戸ニ来向ハ答ハ給ふを厳政禄ニ今日
市ハ白山院ニ於て伶人舞楽あり 伶人ハ譜代ニ而く拘りまうくるといふ 同月廿三日武家諸法
度あり 伶人殉死ハ制禁あり 作出同八月五日ハ法令廿一條を頒布せらる 第一條ニ学文
弓馬武芸を心掛義理を専にし風俗を乱るへからさるの事を載らまて同日京都諸大名浅野内匠
水除被仰付 同七月廿五日 蝦夷松前大地震 同九月廿九日 箱根山種々 披るまし年 呉元院ハ 郷法ハ付九月廿一日公
家氏 来向 同十月朔日 花井家騒動 上総 同十二月六日 京都大地震 成刻より丑刻まて二条 城及諸伴 所々被損
同廿六日 林春斎ニ弘文院学士の号を賜ハる ハ制法ハ [illegible] 又林流不涉事 [illegible] 吉保 作押 [illegible] 久世大和守 稱弟子の [illegible] 弘文院 [illegible] 徳
行 稲葉 [illegible] 酒井 [illegible] 林学士と [illegible] 寛文四年正月廿八日 万石以上 紀州大 [illegible] 家
八月廿一日より 廷く詠下 同七月廿八日 先年弘文院ニ命せられし編年集の事 永井伊賀守 高庵 林勝 [illegible]
有老中 稲葉 同十月朔日 編年集ハ附を稲葉正則 申付 井上河内守正利 加々爪甲斐守直澄 諭して議定の事
社寺令し 延宝已後公家武家 旧記を求む 同廿日 本朝編年録の稿を呈して 本朝通鑑と号せらる 同十一
月十五日 番の大名ハ旗本の諸士和出来る 而く国領下賜 作家の緒を懐く 年中山と号を出現 寛文
五年正月十一日 大坂城御番衆 [illegible] 同十二月 [illegible] 作出同七月十一日ヨリ [illegible]

番組ハ独闇同九日舞楽 上総ハ 東照宮 今年 五十回忌 附 公卿門跡 日光山下向 まり江戸ニ来向 今度春斎ニ
命して 日光を祀る 同七月十三日 諸家の従人の [illegible] 法度 法究仰出さる 同七月 東海道 仰出さる
字 御書 [illegible] 作出 諸 [illegible] 大命 せらる [illegible] 寛永 假流 同 東海の [illegible] 同十二月 日光 宗
不更 ふ 施 の 移 ハ 従 [illegible] 同十二月廿七日 越後 高田 大地震 城年 前 [illegible] の 二丈余 寛文
六年正月 朝鮮 [illegible] 楽出 紀綱 寺号 同正月廿六日 江戸 先物 東方 ニ 二丈余
賤人の如く 同十一月廿一日 於て 諸役人 ハ 役料 を 頒ちて 同十二月十日 法 山 [illegible] 聖 数 寄 著
世と造 云 より 給る 領 [illegible] せらる 同日 紀 十月三日 山 [illegible] 同 [illegible] 徳 [illegible] 不 届
有 [illegible] 外 者 [illegible] 同日 付 ハ 田 家 十 郎 列 [illegible] 御 家 安 房
り 法 [illegible] 又 云 津 [illegible] 三日 造 遣 [illegible] 山 [illegible] 徳 [illegible]
老中 同 [illegible] 世 [illegible] 云 [illegible] 同 十一月 廿八日 武家 [illegible] 作 [illegible]
之 衆 世 所 [illegible] 若 中 [illegible] 同 十一月廿八日 武家 [illegible] 作 [illegible]
ハ細 [illegible] 黄 [illegible] 同日 紀 十一月 八日 武家 [illegible] 細 [illegible] 又 時 給
二 [illegible] 八寛永の [illegible] 別 [illegible] 三 [illegible] 手 當 て 諸家 [illegible] 入 用 [illegible] の
書 冊 を 抄 出 [illegible] 十 九 [illegible] 六 百 四 十 二 [illegible] 今 [illegible] 諸 家 [illegible] 其
[illegible] 寛 永 十 八 年 諸 家 [illegible] 同 [illegible] 西 尾 [illegible] 寛 文 元 年 十 一 月

仙臺家中一件

旨春斎に命せらる 國史館日録廿二日年の事依老列堂久和牧儀に 〔illegible〕 國史館不及徹を以不為学寮 [illegible] 十二月廿三日摂州大風洪濤忽起船没溺死多し 寛文 十一年二月廿七日 松平陸奥守網村家臣等に依酒井雅楽頭宅に集會老中列坐吟味す [illegible] 田村隠岐守 [illegible] 仙臺の [illegible] いて万部誦経御修行れ歴代将軍御神靈を遷し奉る 比叡山 七月廿八日 琉球使者 謁見 同八月廿四日 大獣院殿廿一回御忌に依日光山にて [illegible] 大風雨 [illegible] 十月 摂州伊丹山陰ふ [illegible] 寛文 十二年八月十七日紀伊殿 [illegible] 官 創業記考異十冊を献せる 紀伊中納言殿 [illegible] 延宝 元年 九月廿一日改元 五月八日 禁裡院之御所炎上 [illegible] 十二月廿六日 [illegible] にて [illegible] 上様

七日 [illegible] 黄金を [illegible] 延宝 二年 二月廿六日 [illegible] 此年南蛮イキリス人長崎に入津 [illegible] 水 加茂川桂川大水 三条大橋崩流 此年長崎入津の唐人彼国呉三桂が叛逆を云上せ [illegible] 年清の [illegible] 明崇禎帝の皇子を [illegible] 明を [illegible] 春 [illegible] 三桂 [illegible] 和解せ [illegible] 此年 [illegible] 延宝 三年春天下大飢饉 [illegible] 十二月廿五日 [illegible] 殿の皇居 [illegible] 院御所 [illegible] 同廿七日禁裡新殿に遷御 [illegible] 同十二月八日 [illegible] 経 [illegible] 編集 [illegible] 延宝 四年七月四日五日大風雨東海道洪水 同八月五日 [illegible] 同十二月廿六日 [illegible] 法皇御所女院御所 [illegible] 延宝 五年正月新宮殿 [illegible] 同十月九日夜 [illegible] 岩城大津浪 [illegible] 尾州海辺 同日大津浪 [illegible] 同十二月十二日大久保加賀守 [illegible] 同 [illegible] 十二月五日 [illegible] 冊 [illegible]

図絵を進献せらる第一天目録より壬十二月五日　禁中に出物を進せらる　冊府元亀二百五十二冊　稗海
帝平冊を進せらるの又吉良家日記より先を献す　八千冊正百川学海二十四冊　続百川学海二十四冊　広百川学海二十四冊　三才図会
[延宝]六年六月十五日女院御所崩御　放太相国秀忠公姫君也年七十二　同七月十八日伊与守紹
巻苔大風雨洪水同九月十日より十六日迄清水寺生命　積年退隠当年　同十一月二日小笠
原丹後守経家流の出物五十冊十二巻を献上せしむ　弓法萬義射法之書二十冊同紬物六巻弓法秘法出物三巻秘書鞍鐙の書十冊
同紬物三巻　[延宝]七年二月加茂両社河合社貴布祢社の改造事始同八月五日　東照宮御
縁起同備りて画工に貴物あり　吉良家日記目録に八月五日日光山御縁起後画工に賜物　東照宮御縁起　[延宝]八年二
同五日佐十物度に赦同三月築地両本願寺に賞之同正月初日播磨守より先の如く
同廿日水戸殿光圀に編集之公卿補任補闕一冊代要記十冊扶桑拾葉集三十三冊を
献せらる　扶桑拾葉集は後西院日記に載す水戸光圀卿の撰にて和文の歌集　此年五月八日薨　同十四日御出棺同廿
六日東叡山に葬送[延宝]六年六月廿六日物號厳有院殿贈正一位太相国　▲御甚訴
状貴清親王姫宮に違ひ顕子浅の宮と称せと　明暦三年正月下旬下向同年七月十日於西丸御婚礼万治
二年九月五日　御甚称与称し奉るへき旨に　依て其日御本丸に移徙[延宝]四年八月

五日薨に年三十七　同九日東叡山に葬送高厳院殿と称し奉る同五年八月五日従一位を贈らる

▲

常憲院殿御世

〇

綱吉公御事也　大猷院殿の四男御母は桂昌院殿　本
庄宗正の女　光子桂昌院殿と称し奉る　後二位元禄十五年二月九日従一位桂昌院殿宝永二年六月廿二日逝去葬於増上寺　[正保]三年正月八日於　御本丸
に誕生　御幼名は徳松殿と称せ同六月六日紀伊家の宅に入る　御母に従ひ竹橋の内に住
給ふ　[正保]四年十一月廿四日に髪置　[慶安]元年九月廿八日二丸に移徙[慶安]二年六月廿六日に袴着の祝
同九月廿八日二丸に於て本丸より門移[慶安]四年正月二日に領料十五万石　竹橋近江屋敷に移徙の帰
同十二月十二日竹橋の門外雉子橋の門の内に屋形の造営今の雉子橋門内の地御屋敷に出来に移徙の[承応]二年八月十
九日に元服従三位下右近衛権中将兼右馬頭に一字の諱を給ひ綱吉公と称す同十月十七日正三位
[明暦]三年正月十九日の大火に屋敷に類焼と暫く紀伊殿館に移り同九月廿八日神田の屋敷に移る今の
神田橋内門内　[万治]三年正月十一日に疱瘡の酒湯の祝儀同六月十一日に袖留[寛文]元年壬八月
九日上州館林の城にて封せしめ加封十五万石都合二十五万石　是より館林殿と称す同十二月廿八日参議[寛文]

二年十二月十八日御前に蘇軾を拝せしむ 寛文三年五月日光に参詣の時御供の鎗林の如し 御伴御
入御 寛文四年九月十八日御婚礼 延宝五年四月十五日鶴姫君生（御母三の丸の局 天和三年六月九日逝去 瑞光院殿 葬増上寺 元文（?）
御上る○九年七月十八日紀伊中納言綱教卿へ嫁す 宝永元年四月十二日逝去 明信院殿 葬増上寺 別當隆崇院）延宝七年五月六日徳松君生（御母三の丸の局 天和三年閏五月廿八日
逝去 浄徳院殿 葬増上寺 別當岳蓮社）延宝八年五月六日 厳有院殿御不例に大漸に至る 城返し一旦に於
移し御附の供奉の面々皆殿(?)に侍し 御伴の面々は徳松君に付 後(?)て 御継嗣なり 同七日に崩御 御歳是日正三位権中納言
同廿六日 厳有院殿御法事御執行 上野にて 永井信濃守尚長 内藤和泉守忠勝 喧嘩（七万石 信濃守 三
万三千二百石 内藤和泉守忠勝 六月廿六日御法会の席にて和泉守忠勝 信濃守を短刀を以て殺し 其後信濃守の家来 和泉守の家来に
討手切に被仰付 ……和泉守に 丹後守……
の後まで仰付一組……御殺し 家来共……信濃守……集め和泉守……
坐沈まつ……火災の……数千……門を固め出入を留め……
慶安 同廿六日 和泉守 ……私……切腹 御附……私 同七月十日御本丸に御移徙 同廿一日
當分板倉……大納言……
同廿二日 同廿三日 御代替の御礼 同八月十九日 後水尾院崩御 同廿三日 将軍宣下 征夷大将
軍内大臣兼右近衛大将淳和奨学両院別當源氏長者右馬寮御監牛車兵杖を
称す（七月十八日将軍宣下 八月廿三日内大臣）同九月十一日 林春常人見友元を召て経義を統論し給ふ 後 同両

相ノ吉 當時

三次郎と号す 同十七日春常大学を進講し 後同日三次常と代同十月十六日春斎友元をし
て御文庫に入て御書目を改めしむ 御風俗等諸書の（台命入御文庫改ニ書目とも）同十一月六日忠清 罷 年延宝
大老を罷む 一帙四冊を献す 十二月朔日 天変（万天日上の… 同十一月晦日酉刻坤の方に広さ二尺
余長さ二十余間の白気中天に現る（是根子早ニ世号を…名彗星と云）天和（十月九日改元）元年二月春斎命を奉て日
本書記小学近思録の訓点を正す 同六月廿一日 松平越後守光長 勘気に触れ領地を収む（大和守… 伊予松山へ配流）同
切腹 永… 大老 酒井雅楽頭忠清 松平 隠居 是依不行跡 同七月朔日 相応十数を出る（越前の…）
指揮する 天和二年 二月廿六日 … 稲葉美濃守 … 同十二月廿七日 徳松君 憲廟に継子 御生まれ 延宝七年五月… 御生 堀田筑前守
老中に加る 正保三年五月十八日 … を廃せらる 同十二月廿七日 徳松君 …
おのく 御延生 堀田に御嗣の西丸に御移徙 若君様と称し奉る 堀田筑前守 の後 人 ……
御附人 ……一同三年 五月廿八日 御年五歳にて逝去 浄徳院殿と称す 同十二月十三日 夜 伊勢内宮外宮
増上寺に葬す 堀田筑前守 … 同廿一日
将上 天和二年二月廿八日 二丸に御移徙 … 上総十九日 老臣 … を遣す 同廿二日
御事を廃せらる … 小普請 直臣 … 小普請 … 享保元年 … 武
春斎浩氏鎌倉死去 同七月十一日 琉球使者 城に礼 同七月廿五日 法令十五条を頒布せらる

塩ヶ松平下総守ヨリ政令ヲ受ケ仙台ニ在テ塩地及ビ仙台ニ於テ
官邸ヲ出ノ後ハ仙台ニ百年餘ヘ
武士 ノ身分 ハ此ノ人ヲ一旦ニ
ヲ以テ ハ此ノ人ヲ一旦ニ

[元禄] 六年四月廿三日ヨリ塩釜ニ来ル仙台ノ
中庸ノ首席ヲ譲ラントス 上覧ノ廿三日ヨリ塩釜ニ来ル仙台ノ
塩ヶ松平下総守ヨリ政令ヲ受ケ仙台ニ在テ塩地及ビ仙台ニ於テ
官邸ヲ出ノ後ハ仙台ニ百年餘ヘ
武士 ノ身分 ハ此ノ人ヲ一旦ニ
ヲ以テ ハ此ノ人ヲ一旦ニ

[元禄] 六年四月廿三日ヨリ塩釜ニ来ル仙台ノ
中庸ノ首席ヲ譲ラントス 上覧ノ廿三日ヨリ塩釜ニ来ル仙台ノ

暮時ニ 本院役人ヨリ仙塩御大納言様御家来ニ
御渡ニ成ル 本院ヨリ証状ヲ以テ
の間ニ周易ヲ講義ヲ講ジ終ル今日ハ
該証状ヲ不及該大名家ヨリ証状ヲ
塩地の郡ハ仙台ノ領地ノ内ニ
ニ及ビ該地ヲ打渡ス日限ハ四月廿日
十四名ニ成ル 仙台ヨリ
ヨリ仙台ニ
[元禄] 七年四月廿日ヨリ
御渡ニ成ル 本院ヨリ証状ヲ以テ
の間ニ周易ヲ講義ヲ講ジ終ル今日ハ
該証状ヲ不及該大名家ヨリ証状ヲ
塩地の郡ハ仙台ノ領地ノ内ニ
ニ及ビ該地ヲ打渡ス日限ハ四月廿日
十四名ニ成ル 仙台ヨリ
ヨリ仙台ニ
[元禄] 七年四月廿日ヨリ

月十六日後見令二ケ条を精行せらる 元禄十年二月廿六日月付 [illegible]

[illegible] の事を安藤 [illegible] 後より命せらる ○ [illegible]

月二朱判金通用
元禄十年二月二日 [illegible] 十年 [illegible] 月十三日 [illegible]

月九日 [illegible] 坂大聖殿の側に小堂を建て神農の像を安置せらる

水戸 [illegible] 宰相 [illegible] へ入輿 [illegible]

条額布せらる 同七月 [illegible]

[illegible] 十年 [illegible] 月 [illegible] 日 [illegible]

[illegible] 月 [illegible] 新 [illegible] 七月 [illegible] 東叡山根本中堂成 [illegible]

珠樓新に成 同 [illegible] 日上堂

厳有院殿 [illegible]

[illegible] 月十八日 [illegible] 同付 [illegible] 十人 同十月 [illegible] 元禄 十二

年 [illegible] 日 [illegible] 年 [illegible]

[illegible] 白 [illegible] 元禄十二年七月 [illegible] 日 鐘

[illegible] 禁 [illegible] 十月廿日

[illegible] 大聖殿 [illegible] 日 [illegible]

元禄十四年三月十四日

[illegible]

上野介殿の首を泉岳寺へ持参し御仕置を待つ 同十二月廿六日水野殿邸へ預けらる 後御仕置書大全を編む 元禄十六年二月
廿日雪降る同晦日麻布にて…同六月廿日洛中洪水大霰九十八人京都河水大に出人多死
元禄十五年十二月朔日か十五日近衛殿官方悦会 天満宮八百年同九月十四日観世太夫一代能興行
同十二月十四日夜浅野内匠頭家臣吉良家へ夜討 上野介殿を討取る
浅野の家臣の中へ…四十六人 [illegible]
吉田忠左衛門… 元禄十六年
二月四日浅野家之義士四十六人切腹 吉良左兵衛は信州諏訪へ配流
十一月廿二日丑刻江戸大地震 同廿九日小石川谷中町より出火 本郷湯島辺より浅草まで焼失 本所深川迄焼る
江戸城内外諸屋敷武家町家共焼失 関八州小田原大地震 箱根山崩 道塞る
時に東海道…海浜へ津浪寄る死人多し 同廿九日小石川水戸殿より出火
湯島聖堂 神田… 本所深川辺迄二国橋焼落 両国橋…元禄中…
を被…せらる 浅野内匠…
しく廃絶したるを記する 宝永 三月十三日改元 元年二月十一日甲府綱豊卿西丸へ入らせらる

也同三月朔日より河州の間江戸里廿八町の新川を堀る 摂州…
今の新大和川…大坂…
…同五月八日 厳有院殿廿五回忌 同八月…洪水利根川
荒川…大水…
…十月十一日…
…十二月五日甲府綱豊卿
…
…西丸へ入らせ給ふ 宝永二年…月九
日…大学…
毎月…洛中洛外…

宝字浪吹智

将軍家御母堂桂昌院殿逝去此月御歌学者北村季吟卒年八十二 十月五日

清揚院殿を御母堂院より芝増上寺に改葬中納言を綱ちる同十二日長昌院殿（[illegible]）谷中

若以ちり東叡山に改葬せらる同十二月贈徳川生母長昌院殿従二位に叙せらる御諱

字称吉宗卿と称せらる 宝永 三年十二月持明院基輔卿に書を書しめらる 極門入

[illegible]

[illegible]

[illegible]浜御殿に御成 十月二十日江戸大地震 宝永 四年十二月九日清揚院殿居所

成後院と号宝永四年二百俵給同四月十五日洛外等に於て将軍家の民三百余年を済す

此月十月四日東海道大地震地波大阪沿海波入家夷同十一月二十三日富士山大噴

[illegible]

[illegible]

[illegible]是年諸国浪札通用停止 宝永五年正月十日武相

駿三州の砂降被村民困難浪私[illegible] 宝永三月八日禁裡院中炎上[illegible]

[illegible]三月十五日より洛中の地毛生す[illegible]同正月大阪[illegible]

廿二日山城伏見洪水同七月二日江戸西別に出て京都[illegible]大風神社仏閣多破倒 [illegible]

[illegible]同廿九日[illegible]同十二月[illegible]

[illegible]同十二月廿九日[illegible]大坂[illegible] 宝永六年正月十日 薨御[illegible]同廿日[illegible]

同廿八日東叡山に葬送同二月十二日御諡 常憲院殿贈正一位太政大臣

[illegible] 宝永六年十月廿五日[illegible]同七年九月廿日従[illegible]

礼延宝八年七月十日 御本丸へ御入輿日 御台様ち筆宗宝永六年正月十八日落飾浄光

院様ち筆称同二月九日[illegible]同十二月十九日御出棺東叡山に葬送贈従一位

◆文昭院殿御世 ○

家宣公御事は清揚院殿 [illegible]

[illegible]

[illegible]

果して此法のよくあらんには当時までもなへりし人もなきさまなるを同月旨趣を弟子にとめされて旨趣を弟にしうるさし書以て
同六月経蔵を宮殿の後にて文庫を両賞より移めて改め造らる今東に文庫と称せる物なり
同七月四日松平休息所林大学頭講を講せしむ　名紀日記御講二月庚子御有三御待地三及竹下之於
同十六日同所林七三郎中庸を講せしむ　御上御講二月庚子御有衣二御待地二外下之於御前にて講
言経條紀義数曲又百拾巻附図二巻を献上せらる　水戸家記録経條紀の序に紀曽慮若
大日本史の新刊一部を献上之謹以進
給て大聖殿御参詣　御参詣附一今鉄魚梁の御指一御行水之後大学頭令を上後揃の大学の称名日予当日の
君組出文物の遺跡并統の最　御目見先ず一御先へ御拝者他る者か旗本ら其裁御従之
朝上下御例規出川出羽守日上予料の紀者も大紋書山伏奏者も朝上下お役紀行事の大紋
一御浅者御先へ献者も相伴上一御先へ大紋　出御　御門内にて
不て御役組の者八献来之一御役者八朝上下手炊附　出御御鎧御太廊下　大廊御間に東者
御鳥雉鷹　名御役大久保ら門者一御一　御高門か　入御　御鳥門にて　下御高壇門の外へ林大学
倍の面々麻上下なし
頭同七三郎同百助浄迎の御老中松平伊豆守其他大名家の紀大輔の小濱白木八方の布衣
の者同に於て入御の方は上壇へ上る御着座御方の門を同後子伺候す附御小姓　大紋一人
御簾にて（ ）門役殿地御出雲守并紀(?)被之を（ ）屋敷下手府内
御老中御出（ ）御近習衆御(?)之事（ ）
陸御用辞被揃之の進納之の幣帛　同二年の紀より御参詣之事として学頭并学頭被相渡し也大学頭祥前御
早ら事辞退すも御出門東の方へ持る者は手水紀被之の小姓　村上出市正大紋殿と称
御役後御再深夫合にて献舞祥前之方机之前之持被之の御着舞御を被之を捧げ御酒錦座を座
御小姓役之御紗曲御下懸る舞御神酒盛之机の上に持出之を引之持出之御再深祥前の神
御加一柳美濃守以
秩あり次第
の外より林大学頭頭を上奏者あり被捧　上意あり七三郎百助へも又被申　上意あり
還御にて御佐久世にて御目見の節紀覧有之老中に　上意有之　還御にて又御廟蔵門
と仏時るべ御参詣、　入御一御後寺藩伯者守河内守永井伊豆守一　其後同所祥にて白銀百枚二種
中後との新製年の記を云七月廿五日よ先日の祥本例上下同日大成殿よ御備あるべき儀を同せなふ御るまでも申して同
廿九日よ先ずして大成殿の後の祥を撰じ　御して従由をとぶ也又御の日よ申すれども撰進す是非とて御申されて
なるまで入御前る本朝祥御の義を接け先に従同き御目本にて先達の事を撰出すべきこと一定の所め大学頭祥紀を書
前代本祥の作前に申し事せりて先にも申して當所の御前をもとふ定めて　へしべしとも云ふ
例なりふへあるまじもあらせて其廟よ先にせらひかるの事よく本とて紀を何と申されさらんには御祥る其他にて
軌資の義に関て是を次第とに先より次に乏しと役下さる所の被衆を用ひきふるべし御廟の事陶くる義
まるしかと今の祥ハ後世慣例の製のなく本朝の之れ御りと云との周系の造製ゑまる宣王の礼我
とく〳〵表に座の祥あり今の国紀れ炯被よ出さりとて所之をむしれ申座を用ひしる又九祥の間振勤祥に
おいてれ和漢にて是礼誠りぬと鄭大史の説にも見えるれとて同六日御紗出る迄て林大学頭伝
弥祥の義被けゑらせよ仰を申し此を是義を被き申りたるき

文　五十二

德藩軟紀行ら五一冊日置黒八法為成ら依て林大学ゑ
一千朝献上之日記ら附洛来壱冊ら
雑樂　上陸ら十一月十日　中ゟ門院
家ゟ書ら掃部頭乗義ゟ使ら来拝再拝ゟ
ゟ歌一巻ら外ゟ
塘ら礼賀永年中法國公娘礼ゟ
ゟ三ら候ゟ
ら門ら日林ら
ゟ林大学ゟ
九日林ら
塘ら十二月朝日
ら門十一日
三月法ら
崩御ら
德藩軟紀

の間林大学ゟ德藩軟紀　紀行ら一冊ら
紀行ら二ら林ら
九日林ら
塘ら十二月朝日
ら門十一日
三月法ら
崩御ら
德藩軟紀

[illegible]

延宝三年[illegible]

[illegible]

[illegible]

の法は[illegible]当時は仙洞より御筆を染め下させらるべき[illegible]仙洞より[illegible]

[illegible]仙洞の御筆を染らせし[illegible]十二月の十二日[illegible]

[illegible]此年佐渡奉行あり[illegible]

[illegible]正徳三年正月朔日[illegible]

同(正徳)三年[illegible]十月二日将軍宣下征夷大将軍[illegible]

幕府先規の如し内大臣[illegible]八月十八日[illegible]

城大雷雨 正徳四年五月十七日御代々の[illegible]金銀の製を元に復さる事あり [illegible]

[illegible]宝永七年[illegible]正徳二年[illegible]

[illegible]十月南明院殿に供田五拾石を寄附せらる

南明院殿は東照宮の[illegible]八年正月十四日[illegible]十二月二[illegible]

日琉球使来 城に礼 正徳五年正月長崎表唐阿蘭陀交易の事を定めらる [illegible]

[illegible]

同七月十三日より将軍家[illegible]

同九月七日将軍家[illegible]

霊元帝[illegible] 同十二月晦日江戸大火 正徳六

年正月十一日従二位同三月廿八日将軍家 の御養の首引奏請大納言任同正月晦日 薨御
八年同五月七日増上寺に葬送同廿五日勅諡 有章院殿贈正一位太相国
◆御墓所は 霊元院上皇御年十七の宝算八千宮に紀偶の御歌を書 有章院殿 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
宝暦八年四月廿二日 [illegible] 宝暦九年の三月 [illegible] 寄られ [illegible]

◯

◆

有徳院殿御世

吉宗公 紀伊中納言光貞卿の三男御母は巨勢氏 [illegible]
利清女 [illegible] 貞享元年十月廿一日紀州和歌山にて誕生御初名
源六 [illegible] 元禄九年十二月十一日従四位下 [illegible] 元禄
十年四月十一日越前国丹生郡にて新封三万石 [illegible] 宝永二年十月六日 [illegible]
遺跡紀伊家相続同十二月廿三日従三位左近衛権中将 [illegible] 宝永二年

十一月廿六日参議 宝永 四年十二月十八日権中納言 正徳 五年十一月廿七日宗武卿誕生
八年十二月廿一日 [illegible] 享保元年十二月十八日 [illegible]
七月二日 [illegible] 享保十二年 [illegible]
年九月廿七日 [illegible]
[illegible]
[illegible]
参議同三年九月十五日 [illegible] 宝暦十二年二月十一日 [illegible]
[illegible] 八年五月廿七日 [illegible]
[illegible] 享保十八年八月廿七日 [illegible] 明和八年
[illegible]
[illegible] 享保 [illegible] 元年七月廿九日 有章院殿 [illegible]
[illegible] 上様と称す廿七日廿八日 [illegible]
代替の礼を以て [illegible] 洪水同十月二日 [illegible]
るべきにより [illegible] 七月廿一日
諸国巡見使を差遣さる同廿二日小笠原 [illegible] 九十一家 [illegible]
[illegible] 六年九月十六日 [illegible]
[illegible]

同九月十四日小笠原左近将監殿旅館ニ而両番の士を集め同十月二日発船并出
羽 城内警衛御鞘 上使同廿七日始て着城
使者 御礼 享保十年二月十五日深三男建
弘化嘉永の頃温泉地誌編輯の為諸国へ出張
弘化三年の頃の出勤廿七巻を献上
より小普請の支配となる
る三百俵を下賜
並御役御免となり三百俵の小普請
被仰渡候ニ付同日小普請
御免
御礼 享保十年二月十五日深三男建
弘化嘉永の頃温泉地誌編輯の為諸国へ出張
弘化三年の頃の出勤廿七巻を献上
より小普請の支配となる
る三百俵を下賜
並御役御免となり三百俵の小普請
被仰渡候ニ付同日小普請
御免

本草綱目を写さしめらる [illegible] 同廿一日

吉林又は医官の講釈を聞し者の雑出すべきよしを命ぜらる [illegible]

[illegible] 講釈同六月二日 [illegible]

る同八月 [illegible] 諸国の医者へ黄金を賜ふ各家わり同七月各務役名 [illegible]

新規に仕出せる物に於て [illegible] 一時の雑説流言を停止せしむ [illegible] の命令を

出さる同七月廿一日 禁裡へ經解七百廿冊を進献せらる [illegible]

[illegible]

院 同八月二日 和て評定所の [illegible] に訴状箱を出さる同十七日大風雨山洪溢れ洪水同十月二日 慶

士 常 廣内 謙書を出す [illegible]

[illegible]

[illegible]

享保 七年二月八日 [illegible] 尚書を講ぜしむ同月初て火消の [illegible]

と定め [illegible] 火消組合を [illegible]

付 江戸町方 [illegible] いろは組を定めらる [illegible] 諸家を [illegible] 献上を止らる

ろ百枚三百枚 [illegible] 同四月九日 [illegible] の [illegible]

忠十三経を [illegible] 文庫に納めらる同廿九日法曹類林 [illegible] 三巻 [illegible]

紀載ス所ノ如シ然レトモ其後ノ沿革ニ至テハ未タ之ヲ詳ニスルヲ得ス
七四五年ニ至リ教会万般ノ事法ニ依リ会ノ承認ヲ経テ施行スヘキ旨
法皇ヨリ厳命アリシカ故ニ其後ノ沿革ニ至テハ未タ之ヲ詳ニスルヲ得ス
百十五冊 法皇逝去スルニ及ヒ其ノ後ヲ継キ教務ヲ統理セシ
カ如シ而シテ今ヤ其ノ数ヲ減シ僅ニ十冊ヲ存スルニ過キス
雲院殿薬師寺殿ノ両世ニ於テ 御菩提新勝寺ニ於テ
二百十九回忌ノ法会ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラルルヤ
実ニ十月十八日ニシテ戸田辺 御領高根村ニ在リ
ヲ以テ之ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラレタリ
ヲ以テ之ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラレタリ
ヲ以テ之ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラレタリ

御菩提新勝寺ニ於テ執行スヘキ旨ヲ令セラレタリ

八年 閏十月十六日 法皇崩御ノ後ヲ継キ教務ヲ統理
セラルル間 閏十月十日 布教ノ為メ江戸人ノ江戸ヲ発シ
スルヲ以テ之ヲ停止スヘキ旨ヲ令セラレタリ
十二月 法皇葬送ノ儀式ヲ定メラルルヤ
十四日 法皇崩御ノ後ヲ継キ教務ヲ統理セシ
カ如シ而シテ今ヤ其ノ数ヲ減シ僅ニ十冊ヲ存スルニ過キス
雲院殿薬師寺殿ノ両世ニ於テ 御菩提新勝寺ニ於テ
二百十九回忌ノ法会ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラルルヤ
実ニ十月十八日ニシテ戸田辺 御領高根村ニ在リ
ヲ以テ之ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラレタリ
ヲ以テ之ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラレタリ
ヲ以テ之ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラレタリ

御菩提新勝寺ニ於テ執行スヘキ旨ヲ令セラレタリ

八年 閏十月十六日 法皇崩御ノ後ヲ継キ教務ヲ統理
セラルル間 閏十月十日 布教ノ為メ江戸人ノ江戸ヲ発シ
スルヲ以テ之ヲ停止スヘキ旨ヲ令セラレタリ
十二月 法皇葬送ノ儀式ヲ定メラルルヤ
十四日 法皇崩御ノ後ヲ継キ教務ヲ統理セシ
カ如シ而シテ今ヤ其ノ数ヲ減シ僅ニ十冊ヲ存スルニ過キス
雲院殿薬師寺殿ノ両世ニ於テ 御菩提新勝寺ニ於テ
二百十九回忌ノ法会ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラルルヤ
実ニ十月十八日ニシテ戸田辺 御領高根村ニ在リ
ヲ以テ之ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラレタリ
ヲ以テ之ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラレタリ
ヲ以テ之ヲ営ムヘキ旨ヲ令セラレタリ

十七日　文昭院殿十三回忌ニ芝増上寺ニて法事あり十一月十五日到て西丸新ニ書籍三組を奉る

申十三年三月廿五日献上一組出来に組し成之又亥年十一月十八日二組献上し後二組　後廟に附上成り十一月長崎唐船へ去ル寅年募求せしめ是し之享

保馬集一部歯文書及船主施維美亨携来る緒之崇源二枚を納む覚七年十二月去ル迄の出来時の書を船主へ給す

命せられき　よて之の是より前享保三年六月唐よ呉携来る午二合命せられ同五年二月伊字九船より唐人二名字済より　三命じ是　仍て之の書を行ふ

来る書の類と引きるの抗段の陳来若る医ふ於るか機翻の劉経史唐医抗段の法文献差接れるの呉載宮来

未来趙淑陽汀氏の周波其ふ此文ふ依て法れ済りし得ふある唇読ふまく千係せられけたきあまらり　同年は

享保十年二月唐船より来る王宗承及び擽るの出一部携来る緒て船主ふ崇源三枚を給ふ覚八字郎

是年九月去年唐人出来る緒大全のふ当時ね治むる合今へき世命せられしまゆくあり同十七日江戸大火雪出木流町より出火八日谷中より通縁

出来る多るへきは命せられしまゆくあり　　　　青柳小日向小石川駒込谷中を後を焼失同三月

廿七日小倉承に廉特同廿八日中田幸右衛門に命して吉門院日記を畧纂せしむ同七月八

日荻生惣右衛門へ清人朱来章献上の鄭世子朱載堉の楽書を按究せしめらる同

廿八日に文庫に皆籍目録改正の事に合ふ執事の人へ命せらる　に出宿事り奉行に来業英

義光年拝大学頭に入此修め以へ以え有き出てら以え有今度新規に目録組替同日に出掛目録七冊清書出来但いて納する中　慶　同日に出宿事り奉行に来業英

享保十　終将同七月年に同二日に出掛目録七冊清書出来但いて納事と中　尼　　　　に出宿多忍さ　大廟小水

野集人正忠恒　佐原松永出掛気ふ毛利豆水。諸波守。晴子。入松掛豆水殿之江接切合に同其細に三方を除

　　　　　　至七万石　　　豆水を起居戸田右近おせ年人正を組置年人正以部則おせ停ぢさへ之鮑

右永小ふ蔵えき返出老済集子へ入城地没収同其老之主人へ七千石を給ふ又同八月壺井義知江戸米宮無来

松平長門守へ同済兵部へ被ま行く依て集人正に於て此先老ちあり宅ヶ整居同

の事は嘉之同廿六日長崎大地震昼夜八十余度同十月七日大判金改ありて十二月より通用

是へきよ為ふ　徒出之元禄吹替の大判位足しかつ後世の法ふ改めるる　　　　徒出さる

　　　　　　　佐新規一枚七両弐分の法のりたる　へしと

享保十一年二月八日　江府

本あつて宝新型五大学子二稿を簿せしむ同廿九日越前勝山并加法津藩大風雨震動し民

家田畑を没沈水滞出平地大河の如く人民多く溺死同三月廿七日小倉承に深謝慶事

に精其同七月唐来船主金牧右操参紀略一冊を奉る　牽物類纂まで十一年七月唐来船宮金牧

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　去上進ま参乾根桑探参宝百余種

附探参紀略一本又享保廿年二月上進ま参乾根仁探附参萊ち出　享保十二年二月十八日右和書中収納あるへきもの出目を定て

書肆浦上弥五兵衛より田中幸右衛門へ出させ同廿二日和書中は文庫に収むへきもの

二百八十余部書目を淀上すと　以年十一月十二日　前漸是残の目録が百七十余種並文庫上記同三月朔日手塚

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　上られき　　　田中休右衛門上進同

まあらそ大的　上覧是之ふ出大に東藤之光るか同二日下州吉る馳走火同廿五日安藤玄庸房海上遣

萊山出現同国の海上ま大亀を治すと横又尺斗法良目の辺沖万歳と鳴く是年より望

十三年　に於る水戸橋か小石川小日向出費ある数河塵と芸兼芸月とを幕府せるる是之尾猶借

令云　御判并ニ延宝八年の馬政疾病撲疫の書ハ拾遺令云　御判同六月六日荻生総右衛門三之中巻

を校正せしめらる（荻生惣七郎ハ有る所の書を校正し三之中巻亨保中和刻す [illegible] ）同九月京極黄門定家の

一帖（是ハ京極黄門定家卿自筆の本なり）冷泉中納言為久卿へ返さしめらる　叡慮浅からさるの旨女房奉書到来す

享保録　同十月廿九日政要要略の異字を木田伊右衛門ニ校正せしめらる同十二月十日御書物奉行（表二冊）

（[illegible] 永田町 [illegible] 近焼失）同十一日 [illegible] 日本紀二代実録宣撰紀百錬抄書紀等の記

校合すへき旨御書物奉行鞠懐鞠 [illegible] 討へ同賀茂国学を芸せしむ　享保十二年二月十六日史

を猿（楽町小川町迄小石川より焼失）同三月七日（[illegible] 小川町 [illegible] 百五十 [illegible]）同四月日光山

光山　門跡家の御途中より足利学校へ遣さる [illegible] 同六月松平左

京大夫頼安ニ属国山井某か著述の七経孟子考文を献上す同七月八日大風

幾内洪水同月荻生総七郎ニ命して七経孟子考文を校正せしめらる補遺を加ふ

（十二年十二月総七郎考文補遺の序 [illegible] 山井七経孟子考文補遺 [illegible] 享保 [illegible] 十五年総七郎 [illegible]）

（考文補遺 [illegible] 同八月東国西国諸所洪水同九月）

朔日二日三日江戸洪水　享保十四年二月五日於吹上御庭始て弓場始の式あり（小笠原縫殿助 [illegible]）

（[illegible] 小笠原縫殿助 [illegible] 弓場始の式 [illegible]）

（[illegible] 小笠原 [illegible]）

（[illegible]）

（[illegible] 小笠原 [illegible]）

月廿七日（上野 [illegible]）同四月廿八日交趾国より献上の大象入洛（[illegible] 叡覧 [illegible]）

百年佐（[illegible]）是年琉球国王尚敬 [illegible] 知之

蘭人 [illegible] 享保十五年正月官刻普救類方出版

より諸国へ [illegible] の者へ講求すへき旨市令あり同二月廿九日是より先足利学校ハ修復成るに付て今日

の者へ講求すへき旨市令あり同二月廿九日是より先足利学校ハ修復成るに付て今日

校旨国甲斐守宅 [illegible] 上覧あるを以て [illegible]

為修防 [illegible] 同六月廿日京師火事（上立売室町西ヘ入ル [illegible] 西陣 [illegible] 町数九百三十七丁 [illegible]）

[illegible]献典[illegible]

[illegible]

[illegible]

絵 [illegible]種図[illegible]十月十八日より廿二日迄仲絵の大学史書[illegible]再興[illegible]統紹[illegible]一冊と校合[illegible]
[illegible]
[illegible]

らず。その鹿物数巻、すべて十四巻。金沢後功編集せり。又寛保元年文のころ、勅命ありて後編三百六十八巻、惇信院殿御世までを編集せり。すべて後編と称す。

十月廿五日病床にて薨逝。廿七日葬送。

▲浄岳院殿致祝詞之旨、偉烈なる事蹟、宝永三年十二月十日、家督嗣立廿七日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿八日、縁組、従五位下、侍従、越後守に叙任。同十月朔日、婚礼。宝永七年六月廿日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿七日、家督嗣立、廿八日、将軍宣下。正徳元年十二月廿一日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿八日、従三位に叙任。享保二年十月廿日、権大納言に転任。元文三年三月廿一日、薨。

○

▲惇信院殿御世　家督之事蹟

有徳院殿御男子、御実子大久保八郎左衛門忠朝女、母は遠藤但馬守胤統女。宝永二年十月廿日、従五位下、侍従、越後守に叙任。同年十二月廿一日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿八日、従三位に叙任。正徳元年十二月廿一日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿八日、従二位に叙任。享保元年八月廿日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿八日、従一位に叙任。享保九年十月十四日、薨。

享保元年八月廿日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿八日、従一位に叙任。享保十年正月九日、薨。

の高積み数冊数百巻余、すべて十四巻。金沢後功編集せり。又寛保元年文のころ、勅命ありて後編三百六十八巻、惇信院殿御世までを編集せり。すべて後編と称す。

十月廿五日病床にて薨逝。廿七日葬送。

▲浄岳院殿致祝詞之旨、偉烈なる事蹟、宝永三年十二月十日、家督嗣立廿七日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿八日、縁組、従五位下、侍従、越後守に叙任。同十月朔日、婚礼。宝永七年六月廿日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿七日、家督嗣立、廿八日、将軍宣下。正徳元年十二月廿一日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿八日、従三位に叙任。享保二年十月廿日、権大納言に転任。元文三年三月廿一日、薨。

○

▲惇信院殿御世　家督之事蹟

有徳院殿御男子、御実子大久保八郎左衛門忠朝女、母は遠藤但馬守胤統女。宝永二年十月廿日、従五位下、侍従、越後守に叙任。同年十二月廿一日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿八日、従三位に叙任。正徳元年十二月廿一日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿八日、従二位に叙任。享保元年八月廿日、赤坂の邸へ浄入輿。同廿八日、従一位に叙任。享保十年正月九日、薨。

加冠并侍従已上拝賀已後当日従二位権大納言
已上賜禄 享保十一年正月廿六日叙従二位 同廿九日任
権大納言 同十二年十月十六日兼右近衛大将 同十三年三
月十日依疱瘡御減 同廿四日従一位 延享二年正月廿
日薨 年五十六 贈正一位太政大臣 号清水大臣

公規 幼名鍋之助 実ハ権大納言豊季卿第二男 母ハ
同卿家女房 宝暦十年十二月廿日誕生 同十一年正月
廿日叙従五位下 同十二年正月廿日元服 同日侍従
任 同十四年正月廿日叙正五位下 同年十二月廿日
転右近衛少将 明和元年十二月廿日叙従四位下 同
二年正月廿日転右近衛中将 同三年正月廿日叙正四
位下 同四年正月廿日転左近衛中将 同五年正月廿
日叙従三位 同年十二月廿日転権中納言 安永二年
正月廿日兼右近衛大将 同年十二月廿日転正三位
同三年正月廿日転権大納言 同年十二月廿日兼左近
衛大将 同四年正月廿日転正二位 同五年正月廿日
転内大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同六年正
月廿日転従一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同
七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛
大将 同八年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同九年正月廿日転太政大臣 同年十二
月廿日兼右近衛大将 天明元年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同二年正月廿日転太
政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同三年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同四
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同五年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左
近衛大将 同六年正月廿日転太政大臣 同年十二月
廿日兼右近衛大将 同七年正月廿日転正一位 同年
十二月廿日兼左近衛大将 同八年正月廿日転太政大
臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 寛政元年正月廿
日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同三年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛
大将 同四年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同五年正月廿日転正一位 同年十二
月廿日兼左近衛大将 同六年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同七年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同八年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 享和
元年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大
将 同二年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼
右近衛大将 同三年正月廿日転正一位 同年十二月
廿日兼左近衛大将 文化元年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同二年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同四
年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近
衛大将 同六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同七年正月廿日転太政大臣 同年十
二月廿日兼右近衛大将 同八年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同九年正月廿日転太
政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同十年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同十
一年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛
大将 同十二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同十三年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同十四年正月廿日転正一
位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同十五年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同十
六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大
将 同十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同十八年正月廿日転正一位 同年十
二月廿日兼左近衛大将 同十九年正月廿日転太政大
臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二十年正月廿
日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同廿一
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同廿二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同廿三年正月廿日転太政大臣 同年十
二月廿日兼右近衛大将 同廿四年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同廿五年正月廿日転
太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同廿六年
正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同廿七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右
近衛大将 同廿八年正月廿日転正一位 同年十二月
廿日兼左近衛大将 同廿九年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同三十年正月廿日転
正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三十一年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同三十二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左
近衛大将 同三十三年正月廿日転太政大臣 同年十
二月廿日兼右近衛大将 同三十四年正月廿日転正一
位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三十五年正月
廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同
三十六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近
衛大将 同三十七年正月廿日転太政大臣 同年十二
月廿日兼右近衛大将 同三十八年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同三十九年正月廿日
転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同四十
年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同四十一年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼
右近衛大将 同四十二年正月廿日転正一位 同年十
二月廿日兼左近衛大将 同四十三年正月廿日転太政
大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同四十四年正
月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同
四十五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右
近衛大将 同四十六年正月廿日転正一位 同年十二
月廿日兼左近衛大将 同四十七年正月廿日転太政大
臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同四十八年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同四
十九年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近
衛大将 同五十年正月廿日転正一位 同年十二月廿
日兼左近衛大将 同五十一年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同五十二年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同五十三
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同五十四年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同五十五年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同五十六年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同五十七
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同五十八年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同五十九年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同六十年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同六十一
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同六十二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同六十三年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同六十四年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同六十五
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同六十六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同六十七年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同六十八年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同六十九
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同七十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同七十一年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同七十二年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同七十三年正
月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同七十四年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同七十五年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同七十六年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同七十七年正
月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同七十八年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同七十九年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同八十年正月廿日転正一
位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同八十一年正月
廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同
八十二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近
衛大将 同八十三年正月廿日転太政大臣 同年十二
月廿日兼右近衛大将 同八十四年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同八十五年正月廿日
転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同八十
六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大
将 同八十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿
日兼右近衛大将 同八十八年正月廿日転正一位 同
年十二月廿日兼左近衛大将 同八十九年正月廿日転
太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同九十年
正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同九十一年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼
右近衛大将 同九十二年正月廿日転正一位 同年十
二月廿日兼左近衛大将 同九十三年正月廿日転太政
大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同九十四年正
月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同
九十五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右
近衛大将 同九十六年正月廿日転正一位 同年十二
月廿日兼左近衛大将 同九十七年正月廿日転太政大
臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同九十八年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同九
十九年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近
衛大将 同百年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同百一年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同百二年正月廿日転正一
位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百三年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百
四年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大
将 同百五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同百六年正月廿日転正一位 同年十
二月廿日兼左近衛大将 同百七年正月廿日転太政大
臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百八年正月廿
日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百九
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同百十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同百十一年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同百十二年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百十三年正
月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同百十四年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同百十五年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同百十六年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百十七年正
月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同百十八年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同百十九年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同百二十年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百二十一年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同百二十二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同百二十三年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同百二十四年正月廿
日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百二
十五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近
衛大将 同百二十六年正月廿日転正一位 同年十二
月廿日兼左近衛大将 同百二十七年正月廿日転太政
大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百二十八年
正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同百二十九年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同百三十年正月廿日転正一位 同年
十二月廿日兼左近衛大将 同百三十一年正月廿日転
太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百三十
二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大
将 同百三十三年正月廿日転太政大臣 同年十二月
廿日兼右近衛大将 同百三十四年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同百三十五年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百
三十六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近
衛大将 同百三十七年正月廿日転太政大臣 同年十
二月廿日兼右近衛大将 同百三十八年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百三十九年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同百四十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同百四十一年正月廿日転太政大臣 同
年十二月廿日兼右近衛大将 同百四十二年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百四十
三年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛
大将 同百四十四年正月廿日転正一位 同年十二月
廿日兼左近衛大将 同百四十五年正月廿日転太政大
臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百四十六年正
月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同百四十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同百四十八年正月廿日転正一位 同
年十二月廿日兼左近衛大将 同百四十九年正月廿日
転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百五
十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大
将 同百五十一年正月廿日転太政大臣 同年十二月
廿日兼右近衛大将 同百五十二年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同百五十三年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百
五十四年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近
衛大将 同百五十五年正月廿日転太政大臣 同年十
二月廿日兼右近衛大将 同百五十六年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百五十七年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同百五十八年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同百五十九年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同百六十年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百六十
一年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛
大将 同百六十二年正月廿日転正一位 同年十二月
廿日兼左近衛大将 同百六十三年正月廿日転太政大
臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百六十四年正
月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同百六十五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同百六十六年正月廿日転正一位 同
年十二月廿日兼左近衛大将 同百六十七年正月廿日
転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百六
十八年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛
大将 同百六十九年正月廿日転太政大臣 同年十二
月廿日兼右近衛大将 同百七十年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同百七十一年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百
七十二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近
衛大将 同百七十三年正月廿日転太政大臣 同年十
二月廿日兼右近衛大将 同百七十四年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百七十五年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同百七十六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同百七十七年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同百七十八年正月廿
日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百七
十九年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近
衛大将 同百八十年正月廿日転正一位 同年十二月
廿日兼左近衛大将 同百八十一年正月廿日転太政大
臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百八十二年正
月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同百八十三年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同百八十四年正月廿日転正一位 同
年十二月廿日兼左近衛大将 同百八十五年正月廿日
転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百八
十六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛
大将 同百八十七年正月廿日転太政大臣 同年十二
月廿日兼右近衛大将 同百八十八年正月廿日転正一
位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百八十九年正
月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同百九十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同百九十一年正月廿日転太政大臣 同
年十二月廿日兼右近衛大将 同百九十二年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同百九十
三年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛
大将 同百九十四年正月廿日転正一位 同年十二月
廿日兼左近衛大将 同百九十五年正月廿日転太政大
臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同百九十六年正
月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同百九十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同百九十八年正月廿日転正一位 同
年十二月廿日兼左近衛大将 同百九十九年正月廿日
転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百
年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同二百一年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同二百二年正月廿日転正一位 同年
十二月廿日兼左近衛大将 同二百三年正月廿日転太
政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百四年
正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同二百五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同二百六年正月廿日転正一位 同年
十二月廿日兼左近衛大将 同二百七年正月廿日転太
政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百八年
正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同二百九年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同二百十年正月廿日転正一位 同年
十二月廿日兼左近衛大将 同二百十一年正月廿日転
太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百十
二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大
将 同二百十三年正月廿日転太政大臣 同年十二月
廿日兼右近衛大将 同二百十四年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百十五年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二
百十六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近
衛大将 同二百十七年正月廿日転太政大臣 同年十
二月廿日兼右近衛大将 同二百十八年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百十九年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同二百二十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同二百二十一年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百二十二年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二
百二十三年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同二百二十四年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百二十五年正月
廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同
二百二十六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同二百二十七年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百二十八年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二
百二十九年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同二百三十年正月廿日転正一位 同
年十二月廿日兼左近衛大将 同二百三十一年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二
百三十二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同二百三十三年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百三十四年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二
百三十五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同二百三十六年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百三十七年正月
廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同
二百三十八年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同二百三十九年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百四十年正月廿
日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百
四十一年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右
近衛大将 同二百四十二年正月廿日転正一位 同年
十二月廿日兼左近衛大将 同二百四十三年正月廿日
転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百
四十四年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近
衛大将 同二百四十五年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同二百四十六年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百四
十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近
衛大将 同二百四十八年正月廿日転正一位 同年十
二月廿日兼左近衛大将 同二百四十九年正月廿日転
太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百五
十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大
将 同二百五十一年正月廿日転太政大臣 同年十二
月廿日兼右近衛大将 同二百五十二年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百五十三
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同二百五十四年正月廿日転正一位 同年十二月
廿日兼左近衛大将 同二百五十五年正月廿日転太政
大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百五十六
年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同二百五十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月
廿日兼右近衛大将 同二百五十八年正月廿日転正一
位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百五十九年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同二百六十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同二百六十一年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百六十二年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二
百六十三年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同二百六十四年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百六十五年正月
廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同
二百六十六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同二百六十七年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百六十八年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二
百六十九年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同二百七十年正月廿日転正一位 同
年十二月廿日兼左近衛大将 同二百七十一年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二
百七十二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同二百七十三年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百七十四年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二
百七十五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同二百七十六年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百七十七年正月
廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同
二百七十八年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同二百七十九年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百八十年正月廿
日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百
八十一年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右
近衛大将 同二百八十二年正月廿日転正一位 同年
十二月廿日兼左近衛大将 同二百八十三年正月廿日
転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百
八十四年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近
衛大将 同二百八十五年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同二百八十六年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百八
十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近
衛大将 同二百八十八年正月廿日転正一位 同年十
二月廿日兼左近衛大将 同二百八十九年正月廿日転
太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百九
十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大
将 同二百九十一年正月廿日転太政大臣 同年十二
月廿日兼右近衛大将 同二百九十二年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百九十三
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同二百九十四年正月廿日転正一位 同年十二月
廿日兼左近衛大将 同二百九十五年正月廿日転太政
大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同二百九十六
年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同二百九十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月
廿日兼右近衛大将 同二百九十八年正月廿日転正一
位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同二百九十九年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同三百年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同三百一年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同三百二年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百三年正
月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同三百四年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同三百五年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同三百六年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百七年正
月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同三百八年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同三百九年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同三百十年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百十一年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同三百十二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同三百十三年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百十四年正月廿
日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百
十五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近
衛大将 同三百十六年正月廿日転正一位 同年十二
月廿日兼左近衛大将 同三百十七年正月廿日転太政
大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百十八年
正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同三百十九年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同三百二十年正月廿日転正一位 同
年十二月廿日兼左近衛大将 同三百二十一年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同三
百二十二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同三百二十三年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百二十四年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三
百二十五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同三百二十六年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百二十七年正月
廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同
三百二十八年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同三百二十九年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百三十年正月廿
日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百
三十一年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右
近衛大将 同三百三十二年正月廿日転正一位 同年
十二月廿日兼左近衛大将 同三百三十三年正月廿日
転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百
三十四年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近
衛大将 同三百三十五年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同三百三十六年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百三
十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近
衛大将 同三百三十八年正月廿日転正一位 同年十
二月廿日兼左近衛大将 同三百三十九年正月廿日転
太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百四
十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大
将 同三百四十一年正月廿日転太政大臣 同年十二
月廿日兼右近衛大将 同三百四十二年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百四十三
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同三百四十四年正月廿日転正一位 同年十二月
廿日兼左近衛大将 同三百四十五年正月廿日転太政
大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百四十六
年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同三百四十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月
廿日兼右近衛大将 同三百四十八年正月廿日転正一
位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百四十九年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同三百五十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同三百五十一年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百五十二年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三
百五十三年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同三百五十四年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百五十五年正月
廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同
三百五十六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同三百五十七年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百五十八年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三
百五十九年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同三百六十年正月廿日転正一位 同
年十二月廿日兼左近衛大将 同三百六十一年正月廿
日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同三
百六十二年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同三百六十三年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百六十四年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三
百六十五年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同三百六十六年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百六十七年正月
廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同
三百六十八年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同三百六十九年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百七十年正月廿
日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百
七十一年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右
近衛大将 同三百七十二年正月廿日転正一位 同年
十二月廿日兼左近衛大将 同三百七十三年正月廿日
転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百
七十四年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近
衛大将 同三百七十五年正月廿日転太政大臣 同年
十二月廿日兼右近衛大将 同三百七十六年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百七
十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近
衛大将 同三百七十八年正月廿日転正一位 同年十
二月廿日兼左近衛大将 同三百七十九年正月廿日転
太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百八
十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大
将 同三百八十一年正月廿日転太政大臣 同年十二
月廿日兼右近衛大将 同三百八十二年正月廿日転正
一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百八十三
年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大
将 同三百八十四年正月廿日転正一位 同年十二月
廿日兼左近衛大将 同三百八十五年正月廿日転太政
大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百八十六
年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同三百八十七年正月廿日転太政大臣 同年十二月
廿日兼右近衛大将 同三百八十八年正月廿日転正一
位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百八十九年
正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将
同三百九十年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同三百九十一年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百九十二年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三
百九十三年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同三百九十四年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同三百九十五年正月
廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同
三百九十六年正月廿日転正一位 同年十二月廿日
兼左近衛大将 同三百九十七年正月廿日転太政大臣
同年十二月廿日兼右近衛大将 同三百九十八年正月
廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同三
百九十九年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同四百年正月廿日転正一位 同年十
二月廿日兼左近衛大将 同四百一年正月廿日転太政
大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同四百二年正
月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同四百三年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同四百四年正月廿日転正一位 同年
十二月廿日兼左近衛大将 同四百五年正月廿日転太
政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同四百六年
正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同四百七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日
兼右近衛大将 同四百八年正月廿日転正一位 同年
十二月廿日兼左近衛大将 同四百九年正月廿日転太
政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同四百十年
正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同四百十一年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿
日兼右近衛大将 同四百十二年正月廿日転正一位
同年十二月廿日兼左近衛大将 同四百十三年正月
廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同
四百十四年正月廿日転正一位 同年十二月廿日兼
左近衛大将 同四百十五年正月廿日転太政大臣 同
年十二月廿日兼右近衛大将 同四百十六年正月廿日
転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将 同四百十
七年正月廿日転太政大臣 同年十二月廿日兼右近衛
大将 同四百十八年正月廿日転正一位 同年十二月
廿日兼左近衛大将 同四百十九年正月廿日転太政大
臣 同年十二月廿日兼右近衛大将 同四百二十年正
月廿日転正一位 同年十二月廿日兼左近衛大将
同四百二十一年正月廿日転太政大臣 同年十二月
廿日兼右近衛大将 同四百二十二年正月廿日転正一
位 同年十二月廿日

年十月朔暦頒行 宝暦 五年二月廿日安藝對馬
壮亜候ふ朝漢居弘 紹有腸子徳方公納 寛延 元年七月廿九日
納言候 寛延 二年七月廿日山列 宝暦 六年二月朔日長
六日上方大風洪水 宝暦 七年四月
洪水 宝暦 七年四月
基八百年忌ニ依 宝暦 八年九月廿又日より廿九日申
時迄大坂毎日雷鳴雹降 同月廿七日
件江花中安倍奉当日依仰勅遣 森一

孔門十二哲之一 桃園院命依 桜町院 寛延 元年七月十八日 朝鮮三使 聘
孔門十二哲之一 桃園院命依 桜町院 寛延 元年七月廿九日 琉球使
孔門十二哲之一 桃園院命依 桜町院 寛延 二年三月廿九日
大敵院殿百年忌ニ依 桜町院殿 寛延 三年七月廿三日
中旬 桜町院殿 寛延 三年七月廿三日
孔門十二哲之一 桃園院命依 桜町院 宝暦 元年十月三日
孔門十二哲之一 桃園院命依 桜町院 宝暦 二年十二月廿日
琉球使 宝暦 三年七月廿九日

ス人不行跡ニ依テ出奔ス松平織部正ハ御側近ク召相当ル深キ心ニ御用ニ依テ大目付曲淵豊後
守ハ御役ヲ召放サレ閏十二月廿五日金森兵部少輔 濃州八幡三万八千石 八百石 領国政事の依テ誤ち有
所知ヲ召放サル南部大膳大夫へ御預ケ 嫡子出雲守ハ本多ニ預けらる 宝暦九年正月十日より十二日迄加
州金沢大火城中ならびに家中焼失人多く焼死す同五月廿二日松平加賀守城金沢焼失ニ
困て金五万両拝借同十月廿五日夜越前大風雨大雷鳴同十二月十五日諸大名方の御
受役あるを精勤の者に黄金を給ハる各其ありし年深川ニて天台山某雲院を御建立
宝暦十年二月四日御鷹狩之大火此日赤坂今井谷より出火 麻布四ノ橋三田寺町高輪町芝坂金杉川口まで焼る
同六日神田旅籠町より出火 浅草本町 金杉橋 同日本橋 浜川一円 其外町々 同日芝神明前より出火
深川町々木村町八門芝田町四丁目一円芝浜浦々焼失 同二月廿二日五千両分 御加増同正月朔日御辞職 御治世 同
五月十三日西丸へ御移徙 寛延二年御退隠 大御所様と申称 宝暦十一年六月十二日於二丸
薨去 御年五十一 同七月十日御出棺同夜増上寺へ御葬送同七月廿四日勅謚 惇信院殿
贈正一位太相国 ▲御簾中伏見邦長親王姫宮 比宮と称ス 享保十六年亥六月七日

御下向西丸へ御入同十八日御縁組御祝同六月十八日御結納同十二月十五日於西丸御婚姻
今日より 御簾中様と称せ 享保十七年九月廿七日御紫嶽御祝同 享保十
八年御着帯同九月十二日御流産同十月三日於西丸逝去同十三日御出棺東叡山
御葬送證明院殿と称せ従二位を贈らる

○

浚明院殿御世

家治公 御童名竹千代 惇信院殿御嫡男御母堂ハ梅渓前
中納言通條女 お幸の方 延享二年八月七日従三位同五年十二月廿六日逝去 至心院 宝暦十三年正月十六日贈従二位 元文二年
五月廿二日西丸ニ於テ御誕生御蟇目松平右近将監御箆刀酒井雅楽頭忠恭 御胞衣
様ト申称同七月七日於西丸始て御表へ出御一統御目見同九月廿五日御名直同廿七日
山王江御宮参 元文四年十一月朔日御髪置 元文五
年十二月十五日御深曽木 家治公 元文六年正月廿一日御称号 寛保元年八月十二日御元
服叙従二位任権大納言御加冠井伊掃部頭御理髪松平肥後守今日ヨリ大納言様と

御称 寛延三年五月五日ニ具足召初 宝暦元年二月朔日より月次ニ礼ヲ為請ル五
月二日ニ袖留 宝暦二年十一月廿三日ニ疱瘡ニ酒湯 宝暦三年三月十八日ニ前髪を執
らせらる 宝暦六年七月廿一日ニ千代姫君生 於西丸ニ誕生ニ御母ハ知恩院 松平周防守
廿二日ニ卒 宝暦十年二月四日ニ元服
右近衛大将右馬寮御監今日ニ 左大将拝任 同月朔日ニ政務を為請 同五月
十三日 将軍宣下 御代替ニ礼 同日諸国へ巡見使を差遣 同九月二
日将軍宣下正二位内大臣右大将兼右近衛大将牛車兵仗 宝暦十一年二月廿三日
武家諸法度 御出同三月御別松前大夫高松七千余艘の被換同八月朔日第
寿姫君生 安永二年二月廿三日 同十月廿一日廿二日万
石已上所知の御朱印を給 宝暦十二年二月廿二日御別大夫出兵大夫同
六月廿八日大坂大震同七月廿一日 桃園院崩御同十月廿五日若君様ニ誕生
同十一月朔日 竹千代

振ら御称 心観院 御出府ニ附 御同十二月朔日為九代目十二年二月五日
年十一月七日ニ髪置 同二年十二月朔日 正二位大納言 同三年正月廿八日ニ 同七日ニ元服
移従同八年七月 疱瘡ニ酒湯 同八年二月廿三日 安永二年
十日 従内大臣 同十二月十九日 貞次郎君生 宝暦十二年
十三年九月二日大坂安治川口ニ出船大破損同十月六日尾州名古屋大火同十一月廿七日
後桜町院御位 明和元年 正月二十七日 朝鮮聘使
琉球使 同十二月十七日 朝鮮 同十一月廿五日
明和二年正月 東照宮百五十回御忌
御法会 和会ニ付 同九月 上人 御修行 御精進
日光御楽人の舞楽 上覧同九日 医学館

を建設医の子弟をして学業を学ばしむ 医学校ハ
其料より出席して学業を修めて後安永元年
明和九年二月 安永二年 医学館
より毎年二月中旬より五月中旬まで百日ずつ講医の子弟を教

流語
附録

寛政二年より五年の若いて子孫出る江香村うて六作出
寛政二年より五年の若いて子孫出る江香村うて六作出

三月又大風雨九月朔日於来取山流滴場
同日より十日迄大風雨
朔九月朔日より十日迄大風雨

享保度中流れの式と云家より物そろひ並ニ流射
射たるもの流れ相手の家へ落ちるは勝ちとあり
元文二年流れの式と記し四隅ニ流射ると云
仕掛ニ而ハ勝人の方へ落ちる大体堂の四隅ニ
行ひると云ひ勝人の方へ落ちる大体堂の四隅ニ
流ちる会と云ふ物の中央高松ニ
年の記事ニ而ハ流れ式の事ニ而ハ
年の記事ニ而ハ流れ式の事ニ而ハ

附録
流語

六人ハ今朝漂流ニ出ひ来ル流語ニ会ひ
候ハ一流語ニ会ひ
村ニ於ニ而ハ流語ニ会ひ
事故の記述例文化十二年四月二百四日
十六人ハ四月二百四日
基ニ於ニ而ハ流語ニ会ひ
太閤今ニ於ニ而ハ流語ニ会ひ
候ハ流語ニ会ひ
十六人ハ四月二百四日

流語ニ会ひ
流語ニ会ひ

ニ而ハ右の通ニ而ハ
ニ而ハ右の通ニ而ハ

上ニ而ハ
上ニ而ハ

事ニ而ハ
事ニ而ハ

月廿八日寅刻津波ニ而ハ
月廿八日寅刻津波ニ而ハ

日松平の
日松平の

相知ニ而ハ
相知ニ而ハ

尚ニ而ハ
尚ニ而ハ

中ニ而ハ
中ニ而ハ

候ニ而ハ
候ニ而ハ

明和三年正

明和三年二月廿五日水戸ニ而ハ
明和三年二月廿五日水戸ニ而ハ

寛延二年七月二日尾州三州山津浪洪水ニ而ハ
寛延二年七月二日尾州三州山津浪洪水ニ而ハ

明和三年二月廿五日水戸ニ而ハ

廿日山脈大武山辺亜熱帯植物殊に椰子科植物の繁茂甚しく殊に
[illegible]
[illegible]
十七日大阪多根港新桃大火[明和]二年二月上旬該地風雨強く海水
出一丈[illegible]
三百よりの日迄家数及該国家数七八寸の高毛降[illegible]
現据よ[illegible]
氷来大阪辺及該国風雨強く人多死[illegible]
両宮迄[illegible]
中朝鮮人十[illegible]
戸及該国池の井水悪沽[illegible]
尾刈表長[illegible]
現[illegible]

大変あり[illegible]
接町院[illegible]
流死該国老若男女数[illegible]
相州[illegible]
地震[illegible]
[illegible]
盤梯[illegible]
[illegible]
[illegible]

廿六日京都大火洛内ノ半ヲ焼ク山雲後同廿九日大隅国櫻島南方山腹ヨリ火焔ノ中ヨリ光曜ク法会ヲ営ム験アルガ如シ此方ニ数丸雹ノ如ク降ル田畑等ヲ損ス人畜ノ死傷多数ナリ（同十月二日三日比ノ条ニ見エタリ）同十月二日三日比紀州ニ大風洪水アリ人家ノ流失多シ（同十月二日ノ条ニ見エタリ）関東辺及ビ江戸ニ頻ニ地震ス同十月中旬ヨリ雷鳴ス同十月十七日ノ夜ヨリ翌日ニ至リ雷鳴ス同廿日ノ夜ニ至リ雷鳴ス（同十月廿日ノ条ニ見エタリ）

寛永九年二月気候大ニ暖ク日々ニ増ス（同二月廿日ノ条ニ見エタリ）

同三月三日大坂大火（同日ノ条ニ見エタリ）

同三月廿日ヨリ雷鳴ス（同廿日ノ条ニ見エタリ）

同十一月九日江戸大地震ス（同十一月九日ノ条ニ見エタリ）

同十一月廿六日京都雷鳴ス（同十一月廿六日ノ条ニ見エタリ）

天明元年四月十二日改元

同四月廿日ヨリ雷鳴ス（同四月廿日ノ条ニ見エタリ）

同五月廿日ヨリ雷鳴ス（同五月廿日ノ条ニ見エタリ）

同六月廿日ヨリ雷鳴ス（同六月廿日ノ条ニ見エタリ）

同七月二日大坂大火（同七月二日ノ条ニ見エタリ）

同七月廿日ヨリ雷鳴ス（同七月廿日ノ条ニ見エタリ）

同十月廿三日大坂大火（同十月廿三日ノ条ニ見エタリ）

同十二月廿日ヨリ雷鳴ス（同十二月廿日ノ条ニ見エタリ）

天明二年二月廿日ヨリ雷鳴ス（同二月廿日ノ条ニ見エタリ）

同七月二日大坂大火（同七月二日ノ条ニ見エタリ）

同七月廿日ヨリ雷鳴ス（同七月廿日ノ条ニ見エタリ）

同十月廿三日大坂大火（同十月廿三日ノ条ニ見エタリ）

同十二月廿六日京都雷鳴ス（同十二月廿六日ノ条ニ見エタリ）

干山郡富士村山焼候也 天明 三年二月二日丑刻江戸大地震同廿日肥前諫早大火 [illegible]
数六十軒同廿二日 [illegible] 大火二月 [illegible] 秋田大火同廿五日江戸[illegible]
同月八日深川大火同十日浅草 [illegible] 同廿二日南品川大火同 [illegible] 大火 丹後亀山城下大火 [illegible]
此春より 和泉 [illegible] 畿内 [illegible] 中気のやう 毎日 [illegible] 流行同六月十七日関東及諸国洪水同十八日より大井川 [illegible] 大風雨
[illegible] 村 [illegible] 米価 [illegible] 諸国 [illegible] 海上大風 [illegible] 京大坂 [illegible] 畿内 [illegible]
[illegible]
出同七月七日信州浅間嶽焼出 [illegible] 七月二日 [illegible] 大地震 [illegible] 雷鳴の如く [illegible]
[illegible] 近 [illegible] 下 [illegible] 利根川 [illegible] 押出し 近村流失の村々 [illegible]
村三嶋村岩井村栗中村桂栗村 [illegible] 村 [illegible] 村 [illegible] 村上村 [illegible] 村 [illegible]
[illegible] 利根川へ流出し人馬家蔵衣服家財大木根 [illegible] 川中山の如く [illegible] 流 [illegible]
[illegible] 九月十日 [illegible] 江戸 [illegible] 日光 [illegible]
[illegible] 白く [illegible] 同廿日小国 [illegible] 海上大風雨同九月廿五日小国洋中大風 [illegible] 船
[illegible] 同十月二日小国及九州洋中大風同十月十日大坂城天守 [illegible] 雷火にて焼失同廿七日
江戸堀町辺大火同十二月廿二日芝 [illegible] 方丈焼失 天明 四年正月二日青山麻布辺火 [illegible]
[illegible] 正月 [illegible] 坤の方 [illegible] 同廿日丹波亀山城下大火同二月晦日大坂 [illegible] 新地辺大火

三月廿四日殿中桔梗の間におゐて佐野善左衛門政言 [illegible] 田沼山城守
意知を [illegible] 年 切掛 山城守 [illegible] 及 [illegible] 切 [illegible] 同月 [illegible] 松平対馬守 [illegible]
[illegible] 山城守 [illegible] 同廿五日 [illegible] 四月三日 [illegible]
[illegible] 同七日松平 [illegible]
[illegible] 又六月 [illegible] 京大坂 [illegible] 銀百三十 [illegible]

[illegible] 同十一月廿六日大坂 [illegible] 大火 [illegible] 年松平陸奥守 [illegible] 仙
台において今年より [illegible] 新 [illegible] 仙台通宝と云 [illegible] 天明 五年正
月廿七日畿内大雷雨同二月廿二日大坂大火同六月畿内及諸国早魃農民 [illegible] 同七月十一
日大坂大雷雨同八月十二日畿内東海及 [illegible] 大風雨洪水同八月廿五日松平越中守 [illegible]
の [illegible] 同 [illegible] 八月 [illegible] 白 [illegible]
九月朔日琉球国 [illegible] 年 [illegible] 松平 [illegible] 大 [illegible]
[illegible] 長八十 [illegible] 余 [illegible] 同十月 [illegible] 畿内 [illegible] 大雷同十月より十二月 [illegible]
畿内 [illegible] 中春 [illegible] 年 [illegible] 仙台 [illegible]

大飢饉 天明六年正月朝日夜上刻日蝕皆既食 家武公薨中 逝去 四十四日葬儀おわる

流の江方ふるえ一の屋敷女中流死人流家多分の潰くる田安御家老一巻中ノ渡宅ニ而死人流家多分の潰くる大火ニ而御城本丸ノ御殿焼失 二月九日已下刻日蝕皆既 出火西ノ刻鎮火 二月辛和泉守 二月十二日夜暴風雨大火消屋敷ニ而御殿焼失 二月十九日ノ大火ニ而中ノ渡宅ニ而死人流家多分の潰くる大火ニ而御城本丸ノ御殿焼失 二月九日已下刻日蝕皆既 出火西ノ刻鎮火 二月辛和泉守 二月十二日夜暴風雨大火消屋敷ニ而御殿焼失 二月十九日ノ大火ニ而中ノ渡宅ニ而死人流家多分の潰くる

二百近年金銀融通ニ而富家ニ而も困窮ニ而も銭ニ而ハ用ニ不立金銀ニ而ハ用ニ立 銭ニ而ハ用ニ不立金銀ニ而ハ用ニ立

銭ニ而ハ用ニ不立金銀ニ而ハ用ニ立 銭ニ而ハ用ニ不立金銀ニ而ハ用ニ立

同七月十二日江戸表近国大風雨十四日江戸洪水上野不忍池辺ハ水不入 利根川筋ハ水入

教寺ノ門前ノ小川ニ大洗堰溺死牛馬不知 栗橋ノ柳橋辺ハ水不入 小川辺ハ水入 栗橋ノ柳橋辺ハ水不入 小川辺ハ水入 栗橋ノ柳橋辺ハ水不入 小川辺ハ水入

ハ村小右川小日向根津谷浅草本郷湯島ノ辺ハ水ノ引方不弁ノ者多シ 其外ハ水引方不弁ノ者多シ

御廟は寛永寺へ御葬送明和六年二月廿日上薨　有徳院殿　御廟　は寛永寺へ御葬送明和八年八月廿日薨去同九月十日御出棺東叡山にて御葬送　心観院殿と奉称同廿三日贈従二位
天明二年贈従一位

大御所様御世　○

家斎公御実父一橋大納言治済卿 一橋従中納言宗尹公御四男 宝暦元年十一月六日生御母細田氏 同二年十一月廿日 麻疹 同年九月廿日 山王へ御参 同八年十二月十九日為御嫡子 同十二年十二月十九日 袴着 同六年二月十五日 疱瘡 同八年十二月十九日 元服 御一字拝領 [illegible] 同年十二月廿一日 御遠行 [illegible] 同二年十一月十五日 [illegible] 天明元年十二月十一日叙従三位 兼左近衛権中将 十二月廿一日 [illegible] 徳川民部卿治済 [illegible] 明和元年十一月十一日 叙従三位 [illegible] 寛政三年二月廿八日 [illegible] 従権中納言 [illegible] 同十一年正月廿七日 [illegible] 御料 [illegible] 同八年八月七日 准大臣 同十年二月廿日 [illegible] 豊千代 [illegible] 一橋殿 [illegible] 同十二年正月十九日 [illegible]

文化十四年 [illegible]

葉凌雲院 安永二年十月五日一橋殿と称し御誕生 同年八月 御母 [illegible] 正利女 同八日 [illegible]

家斎同廿七日御養 安永五年七月十五日御縁組 安永六年十月十五日御誕生 二月十二日 山王へ御参 安永七年

二月十三日御疱瘡成廿日御酒湯 安永八年五月三日御入学御手習始め 天明元年壬五月十八日

浚明院様御養君被仰出 若君様と奉称同日御本丸へ御移徙同七月

朔日初て御表へ出御 御同年十二月一日御叙従 家斎公 天明二年四月二日御元服従二位

権大納言 御加冠井伊掃部頭直幸 御理髪松平越中守定信 容頌 天明六年九月八日 浚明院殿薨御同日御本丸へ御入

上様と奉称御逝去同十月朔日二日三日 御代替の礼御席 同六日諸大名の面々御拝領

東叡山其外出入場等 同様の御律宅より御中取締の為御借金 [illegible]

百石以上金 [illegible] 二百石より [illegible] 五百石 [illegible] 九百石 [illegible] 千石より [illegible] 二

百石以上金 [illegible]

上納の儀 [illegible] 同廿七日 御本丸へ御移徙 [illegible]

高直の [illegible] 御年誌に御人数 [illegible] 御十人 [illegible] 天明六年九月九日御同 [illegible]

御家老御支配方 [illegible] 御代替 [illegible]

御細工所 [illegible] 十二月二日 [illegible] 御代替 [illegible]

[illegible]

大坂江戸同く諸国打潰

十日・打潰　天明七年正月十七日向後米穀ニ而投有之者ハ二月廿日始て御内出ニ付[illegible]廿三日書込

一件　[illegible]

[illegible]

[illegible]

此御触出し今日より　公方様御葬送[illegible]五月二日ニ御就職同十二日大坂町人数千人集り[illegible]

座候處當家打潰ス乱妨并近国騒動同廿二日より七八九日まて江戸町人数百人徒党集

座候處家打潰白昼民家ニ押入乱妨[illegible]

[illegible]

[illegible]

壱両ニ付壱升八合買　公儀より金弐万両米六万俵を町家ニ下し施ニ付同月八日

関東御郡代伊奈半左衛門米穀運送江申付　御領分小性組番頭格ニ仰付[illegible]

当ル役同十八日万石以下米銭ニ[illegible]の[illegible]等て用ひ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

別家[illegible]を始め一統中の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　同十九日松平越中守定信江老中ニ任し同列上座ニ　被仰

[illegible]

[illegible]

月廿日寺社江[illegible]二月廿日[illegible]

出同廿四日江戸寄付松平[illegible]同月廿一日文武[illegible]

[illegible]

大

介

名家繁文配より出生し以振てら談以〇学文技指南山経の老儒択いて了ゆえの吾軍学天文
のわもたぼ唯し以ふ〇武藝らる阿諛楽御出御の数為附別ら出精段ゆえの吾先陣目録
是以指南小路以名の〻目 大学文武藝〻為師の名家流義の門八月八日去ㇾ郷無し後暗以代
名国学出年数宝ち振てら談以ㇾ 大の統路く支配くはて出来以
訖 絵出以後絹の年限に掲ら次南来年より年く為年追二年の間以後絹訖
絵出 寛政元西年以年限に以くより未戌年より寅年を五ヶ年以後絹門九月六日知行以薩
訖 絵出門六年實以後来く未卯年より子年迄十ヶ年 訖 作外
案以一之省の儀学録の國摘で於申者以出付門十五日聖堂同様八志の寄ら於職七系
者以出付門廿一日武家講法歳訖 絵出門廿日録歴書論學〻訖以北以後以出付門廿
七日隆支配是組支配の人物当一木で先生者以月限先中本学録以出御厳松平越中守殿
阿波伊豫当厳大目付大屋吉以当以目付和泉肥後守殿 右之者九の面く儒学
講釈所 吟味有之
書経 以小性組家紀鋭家 花民伴岩本内根以組大場十蔵 五十七
書経 二十四 孔記 天明以構当組中根又右衛門 詩経 吉以小普請組 深沢伊兵衛 四十
書経 以腰物方 吉来南之助 詩経 近物右次書大衛 二十九 孝経 稲葉越中守組以 岩田盛次郎 三十八
孝経 天文方出役 年四十八 大学 蒙求 以作事方手代 松本岩蔵 四十六 小学 深尾権次郎 三十一

大学 以外科醫 斉 植川南春 二十五 春秋 組以柳中支配 来見川清八 子孟子 松平信濃守 家来 鶴飼四右衛門 三十一
右此度以幕府学科下く輩紀者とも文武の儀を学以振紀為 且以間年方読出精聖堂以講釈出来以貴家の
藩文学磨以儀書致業紀為 右以間年方読書学力講吟味以上六以本於勧て段講述以教
場取入候出下中以去今日よ方其学力読吟味以上六以来於勧て段講述以教
退てて中後以当者隆可相勤以為訖 仍後以門十月廿七日以來入 以蒸着門十二月
秦以國相良城を毀る旨講述元志国郡其濃守破却以利八郎ト相備当本
岸伯者守為尾張以当等之之 右破却の筋為尾張守以て八浦く波涸木嗣は以破却の宮違ㇾ
右大目付衆前以紀ㇾ之の相先等之二尾福を被却寺無演
細縄まて擂を卷所暗よ朧眼を以破却一日よ於海 其外の荒れ人足之正木まて丁寧よ恵守て元利
手段まく日合二十日余りを以破却以路にて右於所右升方以利 南の方以先に為尾張
去年候の拾余升被却の訣に丁之一條以門五日本丹羽当家当 是以勧定奉行以當以
元升の沙松平越中守殿岩以西海沙て以以 当以勧定奉行以出書以宮以百石 知行等知訖
右ㇾ小普請入道寒松本伊豆守 元以勧定奉行本宮以百石 知行百石訖 懸り小普請入道寒
の跡並年訖 知訖 作分 文訖
訖 後 天明 八年正月廿九日 禁裡 仙洞 女院御所後二条以禁内焼亡 此町より 所
焼失 寅年以来約二百二十余丁 焼死百五八人 七ヶ所 町数二千百余丁 武家数十八万二千余 女院の家二百余
焼失 寅以此後以後十二月 罰る 聖以保宮入御 二十日停止〇二月七日同以為被出 任有之七る々

九月十三日江戸 留守居役 同二月廿一日御普請為御用同廿八日根岸肥前守鎮衛 御勘定奉行 江戸町奉行 為御分入
洛東三千俵銀六十貫目拝借之家宛賜候の御方へ金子を被下同二月廿日諸家紀州の
御乗平定之節同七日諸国巡見使被 仰付同廿二日松平越中守定信 補佐御老中宛 被
仰付の御用掛被 仰付 御所 同月廿二日入代 天皇御疱瘡為御見舞参宮家宛被遣之同同月十一日
成の刻光格天皇御即位被為在候て当の如し京大坂江戸諸国一時に被仰同月六日小諸
和泉守一万六百 二十石 仰付候節御役中不埒有之御役被召上大保加賀守へ被仰付候子を永蟄居同
七日諸国藝術免許同様諸向へ出候同七月八日金銀融通御貸付 五百 俵 被下 出金 五百俵
寄合席被 仰付 御先手頭人先祖以来家督先祖の功業有之に付同九月十九日御所向御修復地借入用出方不足に付上納
の儀被 仰出同十一月廿三日被召上一万石余被下 上総同十二月晦日浅草御蔵米
御米出役迄被 仰付候 寛政元年 正月廿五日出役被 二月七日御婚礼今日より姫君様 御座様と
下舞台様同二月廿五日 姫君様御誕生御墓同小笠原家へ嫁候御事 竹千代様御誕生 御先手被仰付 妻女
○於当浅草御蔵の仕方之様子姫君様より御事様○御律法迄 寛政二年二月廿三日御家督同 八月
十一日御書付同八日尾張宰相殿御婚礼相済候 御出同十月廿一日 御本丸 掛り 御座

同八年六月二日御徳納為御請同年九月三日本所表居屋敷へ八年二月五日一橋民部卿治済
豊千代殿代宛の御再縁同十年正月十二日豊千代殿尾張大納言宗睦の養子同十一年十一月
十五日入御 十八日入 西丸へ谷御座の御文化十五年五月同廿八日御抱場与力同心出役方御掛の御役
御役抱入の御取扱の出役 被仰付候御抱場組頭死去に付同二月廿二日御抱場与力数代の者格別
の思召に付御代替へ被 仰付の為同十六日より十八日まで大風雨にて京都洛中辺大水冊
波三州尾張美濃共洪水同七六月十七日御発駕被 仰付候二月同閏十月にて御用人へ出立
為同七月廿六日御役筋中の出物被仰候て御用金被 仰出同九月十五日 御家督 御旗本諸
家へ御手当向御救の為諸宿共より武家へ貸出し御家中借金御返済方並に御救米
貸金向後貸出し金利下け候様御改正被 仰出 利足は是迄の利息を返済の事に仕候 年限
未の借金は去十月五十両に付百俵の割にて年三ヶ年に返済の筈 被仰付 九月廿六日御年貢
御旗本御家人共へ一統御手当向御国役御免被仰付候之共に御救米被 仰出候の風聞の儀
合金並御返済方の御借入の儀は被仰出候
百日の御勤め年季の御書付共に被仰付候の旨被仰出
明文武の藝等を御取扱の御手当向不如意にて御家中の者共不勝手の者
之は御旗本并御家人其外の者共御用捨に付御取締の儀
私共の家督に付御取締の義此度九年年
御家の御用の為御借金返済方利下げ仰付の義被仰出候 御領分の御家中の御分を利に候て

的射込

知行入貢

唐船来貢

異人来聘

績歴山文禁松栄紀事を引て曰
与明有勤令狩天文以来絶而
国性恥来于此時数廣招之
作本多而純厚之遺風猶建而
明皇朝治平朝鮮琉球信使安南
國莫不止出鎗宝明宝永間以勤令狩
矢を実施之時主教用林祖使持節
矢狩猟竟不復出勤令亦不成然南
絶えく國勢の時勢に因四月十日以武威仰被
今と異なるとなり

六月十四日寒令小普請組等令倹約
日大風雨洪水に十月朔日暴風雨地震

江戸甘露降に廿二日　今上帝新嘗祭
兼仁之仙洞に後桃町法皇　聖護院宮
製の詩を寄せられる。主上　遠慕
新築事起而之勿論　自東西
狩猟四門結界　鳥獣悉禁　猟揚接
猟鷹傷令將軍九列未素心及之　紀州外感
乙夜誇　宗武　仙洞　とよみつくりみきとする

琉球使聘　嫌江戸十番　禁猟区造営成就

四如実約久世丹波守柳生主税正
○系即甘幻仙洞院より菅沼主税正
殉ふ此月江戸地震数度　寛政　三年正月二日法皇
見ふ之新規江　皇居等供奉より不
法令　遠国に暗号小割合等て
御狩場等に出月六日狩始
月十八日　桜田門外馬場向
放鳥を　主機組に出狩に当月七月改正被仰
の鳥を　主機組に出狩に当月七月改正被仰
実の御狩に被仰出
東大洋浪山嶺山水涌出塔
江戸大地震大洪水川高潮
間法令の関係数倍の
のち江戸人生計猶多方
九月朝日武国永久満公
大

医学館御取立

洪水の月、諸国共に浮足所々にて二三度づゝ出水あり、関東筋の出役御旗本衆及び御徒並目付
不残其者へ御切米渡さるゝの内より一ヶ年分の給料を出さる、給 但し町家米穀店は施しそれぞれ御救米をつかはさる
同十月十三日諸国御蔵並に町方より不残死失の者へ米を以て御手当下さる、出役同月廿日
医学館御取立 医学館の事は後に慶安の代明和二年四月、奥医師多紀安元（藍渓）延享の頃より教育を志し、永寿院と号す、
元祖以来建て是を教示せし、然るに今年より新たに是を改めらる、然るに其の医学館の事は安元孝元へ永寿院
永寿院安元子安世、是をして其後官医及び医学生に教育せしめらる、此時より普医
町医の教示を止められ、今年より学館費用として御蔵米一千俵を毎年金弐百両を添ら
其の後同月より出役して其費用とし云、計らる医学館難子を役に同月支配の人に役宅を
預らるゝ、以て私銭を以て設けられ、此時永寿院元徳を始め元孝学館を建て其業を修め教育の
むねにて屡々く医を学び、先生を選出して会日を定め、医学館の造営の学館
校を同年春に至り、新たに御医学館の造営成りて、官医より教へ学ぶ事を許さる、その医学館に往法の学の外
其の他小普請の子弟に至るまで、官医の人にても医学館にて教授せしむる
医業にて、一年に一千両を給し、其の中より月々を以て教育せられ、毎年三十三学
館の集会あるを其の時より教授月の始より元方世話役と称して奥医師並合より出
人数十五人づゝ 抜擢し、其人数月を定め、其中より教師と称し一年中に十二人宛年中
世話役と称して出役と称して講師となり、講習の者の事、病家の人数に限り十枚づゝ
其の他小普請の子弟医学館に出勤の者へ、医学館出役の医者、其人の病者数年限三枚づゝ出る
又外御用の者は三枚宛 御合役と称し同年の末に至り、年限三枚づゝ手当を給し、
三年目に服三枚づゝ給はり、又外の人は三年目に至り服二枚づゝ給し同席より給ふ、年数に従ひ三年目服三枚づゝ下さる御備此

三八・素読調合の日は毎日抜断家の病人六八の日は出席の其医師及び其者の名前を記して療治せしむ法則を
定めて入札にて是を定むる世話役の人々に示して入札の者を記して療治させらる
業中の事、病人調と称して八の日には世話役並に官医より御使番衆及び小普請の人々
是と称して療治方は其の者に小普請組頭の支配へ御沙汰ありて、其の名前を記して是を許す
ある業務にあたり出役して、施療の薬料は医学館にて是を給ふ、其の日は朝五ツ時より出て文書
相勤る病人は参上して、総療は朝五ツ時より九ツ時に限る、其の医者の役を経て其者の名を以て書留
医学館は役人及び合の者へ小普請医師の免許の者を以て其他刀剣武術のことは 上覧あり 御座
寛政四年壬子二月十日、関東の御歴代の御廟を遥拝あるべしと、其御代々の御歴代の御紋付に
御代々の仏事を行はせらる、其の家内にて御家人の中より旗本の者に至るまで家督相続の事を御免ありて九百六十人余り
御家人の家々にて皆其家の子息に相続させらる、次の其者共へ給はる書付には孝子節婦の事を記し三
新規に召出されし者共に、御家人の節倹の事を守り、御目付衆より勤めの事を記して
相続の家へは其者共の名を書き記して其後其者の嫡子を召出されて、其家の世帯を持つ事を許さる
代々の者共の勤め方を心得るやう申渡さる、其の後其者共は御役を勤むる
御納戸方は是より先の御納戸頭の役人の内、二人同組より人を出す
打込に納めらる品、是は御納戸[redacted]人の外に二人同組の者を出す事を許さる
其の他其者に申付、其役人の外の者も是に准じて上納す
方年来三度の上納に同じ、五月八日、将軍家御紫馬御覧同月九日
御内出院にて上覧あり、其の後吹上の御庭にて武術上覧
御役人の小性組の者並に、組頭以下の者へ上覧の後御褒美を給ふ、其後御目見以下の者共
普請方にて小十人の者を以て差図ありて、同十六日御目見以下の者共

文化八年ゟ此月紀前後諸家紀　松平定朝所紀也　山猫出て湯浦流人多死國中震動出火金
照月五月十六日林子平　松平陸奥守家臣　若達海國兵談及三國通覧の二書に依て禁錮
也　御府内六月十八日賣剝江戸見物菊より東都ニ流大さ望の所也し天ゟ見園中出
照光院七月十三日若君様御誕生御蔵同松平和泉守家臣御宗刀二園右京大夫
様御誕生十月初て御表出御目十九日御色直御祝同十二月二日為御祝御
御例之御進ぐ可也　御府内の者同五年二月十一日御發喪同六月廿日逝去謚崇徳院
普請奉行同七月廿九日番町廻大火ニ而千石以下旗本御家人焼失之
御十日停止
旗本御家人焼失
御蔵御停止　同九月三日寄合御番衆小普請組三男厄介の者
改同九月三日寄合御番衆小普請組惣領二男三男厄介の者
同所於聖堂学問所初而学問御試有之
　定　学問之ため御試之儀の儀は此上にて
諸田場に出候而御試を受の事
大学等之御評判ニ而學生より文字ニ出して法定の論語を持参して限りあり
二部拔之條限十五枚中料ハ御限三日限十枚下料ハ日限

御家の者ハ退ぞ右上中下の科に依て御褒美有之　同年同五月出火一日上御庭に於て御覧の上ニて御褒
美有之　今年迄是ヲ称ス
人及寄合小普請寄合御番衆小普請組の面々馬上覧　御目見以上之面々
同十二日中山前大納言　正親町前大納言　上覧
月十日中山前大納言　正親町前大納言云々
御使者として京都ゟ参府同三月七日罷り出候　上天皇の尊號之儀ニ付
伴蔵年に付御前中山　正親町ハ逼塞被仰付同十日江戸出立
於御國朝廷御見廻之　寛政五年五月十七日武蔵国所出生　御七月和学
講談所取建　塙検校保己一武蔵国児玉郡保木野村出生宝暦七丑年八月江戸ニ出て
検校となり　京都の寺院ニ於て和学を修め其後雨宮検校の門人となる
三百余の番組　和学講談所を設け安永五年塙検校を総検校に任じ其後寛政七卯年三月
十一日番町麹町六丁目に御地所拝借　同八年九月十三日和学講談所
麹町御屋敷の内小屋を以て和学講談所ニ於て四年同年六月九日
小石川より佐渡御役寺社奉行支配被仰付御用達之節寺社奉行
小石川より佐渡奉行支配被仰付其後文化二丑年正月大学頭支配
下谷御徒町に而和学講談所ニ於て二年同年正月十六日林大学頭支配
小林検校の門人と成り八百四十余巻の群書類従を編纂す　文化二戌年
寛政七年三月の頃より佐渡國中寺社奉行へ出被仰付候　御目見以上　御目見仰付
御前の間にて勤めし上ゟ仕官して検校拝受　御目見仕也　文政四年正月十二日総検校
御称号を賜ひ月十五日御目見仕候　寛政十九日御暇金二枚時服二拝領

十一年六月十九日叙位ノ後内侍ニ列シ同十二年十月十七日賀茂行幸ニ供奉シ同十三年正月二日新造ノ内裏ニ移徙ノ後同二十八日

奉献和琴歌山陰道掌侍ニ同八月廿九日巻子装ノ歌集廿巻ヲ献ズ其歌数千余首ニ及ブ

一説ニ承和ノ初ニ仁明天皇ノ命ヲ承ケテ撰ビ献ジタルモノヲ後ニ書写セシメ給ヒシ本ナリト云フ

寛平ノ御時后宮歌合ニ出詠シ延喜ノ御時ニ至リテ勅撰ノ議起リ古今集ヲ撰ビ定メラルルニ当リ其ノ歌ヲ採ラレタリ

延喜十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同十四年亭子院ノ女郎花合ニ出詠シ同十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同十七年ノ亭子院ノ歌合ニ出詠シ

同廿一年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同廿二年ノ内裏歌合ニ出詠シ同廿三年ノ亭子院ノ歌合ニ出詠シ同廿四年ノ内裏歌合ニ出詠シ

天慶三年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同廿年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同廿一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同廿二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同廿三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同廿四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同廿五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同廿六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同廿七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同廿八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同廿九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同六十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同六十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同六十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同六十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同六十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同六十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同六十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同六十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同六十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同六十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同七十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同七十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同七十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同七十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同七十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同七十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同七十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同七十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同七十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同七十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同八十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同八十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同八十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同八十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同八十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同八十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同八十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同八十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同八十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同八十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同九十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同九十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同九十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同九十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同九十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同九十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同九十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同九十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同九十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同九十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百二十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百二十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百二十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百二十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百二十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百二十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百二十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百二十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百二十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百二十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百三十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百三十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百三十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百三十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百三十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百三十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百三十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百三十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百三十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百三十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百四十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百四十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百四十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百四十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百四十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百四十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百四十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百四十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百四十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百四十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百五十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百五十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百五十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百五十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百五十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百五十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百五十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百五十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百五十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百五十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百六十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百六十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百六十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百六十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百六十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百六十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百六十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百六十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百六十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百六十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百七十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百七十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百七十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百七十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百七十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百七十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百七十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百七十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百七十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百七十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百八十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百八十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百八十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百八十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百八十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百八十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百八十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百八十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百八十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百八十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百九十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百九十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百九十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百九十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百九十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百九十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同百九十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百九十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同百九十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同百九十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百二十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百二十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百二十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百二十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百二十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百二十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百二十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百二十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百二十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百二十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百三十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百三十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百三十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百三十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百三十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百三十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百三十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百三十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百三十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百三十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百四十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百四十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百四十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百四十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百四十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百四十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百四十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百四十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百四十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百四十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百五十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百五十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百五十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百五十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百五十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百五十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百五十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百五十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百五十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百五十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百六十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百六十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百六十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百六十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百六十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百六十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百六十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百六十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百六十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百六十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百七十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百七十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百七十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百七十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百七十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百七十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百七十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百七十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百七十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百七十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百八十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百八十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百八十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百八十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百八十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百八十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百八十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百八十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百八十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百八十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百九十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百九十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百九十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百九十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百九十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百九十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同二百九十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百九十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同二百九十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同二百九十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百二十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百二十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百二十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百二十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百二十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百二十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百二十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百二十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百二十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百二十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百三十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百三十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百三十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百三十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百三十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百三十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百三十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百三十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百三十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百三十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百四十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百四十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百四十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百四十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百四十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百四十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百四十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百四十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百四十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百四十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百五十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百五十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百五十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百五十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百五十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百五十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百五十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百五十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百五十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百五十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百六十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百六十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百六十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百六十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百六十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百六十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百六十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百六十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百六十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百六十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百七十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百七十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百七十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百七十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百七十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百七十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百七十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百七十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百七十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百七十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百八十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百八十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百八十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百八十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百八十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百八十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百八十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百八十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百八十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百八十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百九十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百九十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百九十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百九十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百九十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百九十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同三百九十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百九十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同三百九十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同三百九十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百二十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百二十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百二十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百二十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百二十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百二十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百二十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百二十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百二十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百二十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百三十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百三十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百三十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百三十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百三十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百三十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百三十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百三十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百三十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百三十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百四十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百四十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百四十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百四十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百四十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百四十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百四十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百四十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百四十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百四十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百五十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百五十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百五十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百五十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百五十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百五十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百五十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百五十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百五十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百五十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百六十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百六十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百六十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百六十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百六十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百六十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百六十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百六十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百六十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百六十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百七十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百七十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百七十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百七十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百七十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百七十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百七十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百七十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百七十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百七十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百八十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百八十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百八十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百八十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百八十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百八十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百八十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百八十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百八十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百八十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百九十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百九十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百九十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百九十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百九十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百九十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同四百九十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百九十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同四百九十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同四百九十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百二十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百二十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百二十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百二十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百二十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百二十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百二十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百二十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百二十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百二十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百三十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百三十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百三十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百三十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百三十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百三十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百三十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百三十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百三十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百三十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百四十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百四十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百四十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百四十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百四十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百四十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百四十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百四十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百四十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百四十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百五十年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百五十一年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百五十二年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百五十三年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百五十四年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百五十五年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百五十六年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百五十七年ノ内裏歌合ニ出詠シ同五百五十八年ノ春秋ノ屏風ノ歌ヲ詠ジ同五百五十九年ノ内裏歌合ニ出詠シ

同五百六十年

此弘安く文化二年九月十四日逝従天倒院殿蘂凌雲院同十月朔日伊豆大島山焼同二日江戸大風同十五日壽姫逝
此冊はとせ方文化元年六月廿日逝従蓉光院殿蘂浄蓮院同十二月九日浅姫君生此姫は越前少将文化四年六月十一日浮姫仙臺政千代周宗同九年正月廿四日周宗
辛未同十四年九月廿七日再縁越前侍従斉承宝文政二年七月御実家へ帰る桝家より孝逝天保六年壬七月十日年二十三歳御出同十二月斉承卒未同廿四日松栄院殿と号す文化元
年二月十一日改元十二月廿三日八丈島にて康稍の斎此同村氷井嶽爲噴火至水過諸家大に流没此元
同七月廿二日極寒九八分小笠原組屋田中勢支配鳥居丹波守殿九八分報にて浸る月浮浅同九月七日魯
西亜船護衛郷長崎沖の湊に船掛りす環海異聞に文化元年九月六日晝九時長崎伊王
此屋庵よれ出同夜五時頃は捨使商人何葉花人大小の番何を漂流船まて来ら来是本船へ移り
使節戎く成尊ありと云く伊王島へ風雑の出ありとひくすら郎て非常へ引入泊を入と云め
國王の使節レサノツトと称し國書をよむ方物數品を携へ其船の指揮を以て府下
王番方物を携て　将軍家に拝謁し本國の船漂流たりともへ先我本國書王に謝る
奥地港を要求りに彼王の原来カムチヤツカへ漂来の魯人に伴ひ以て通信互商を請んら爲
当海上弐千里ほ本國ゟへ漂来の沈ニ万四千余里と云ふ
其以先年松前にて納すりし信牌の謝を述能ては貴國の漂流四人へ環海異聞に寛政五年十一
月廿七日奥州仙臺の舟子十六人乗組にて石巻港を出帆し同十二月
の海上にて俄に逆風に遭ひ洋中に漂ふ事數月翌六年六月初旬極北の嶋漂オンテレイと云

しのぶ所は漂着せし小アメリカ洲に係るべき島の一西にてヲロシャ國の属島なる人の持
告と成って同七年正月初旬ヲロシヤ本國旧都の使を得て六月下旬ラホウツカと云湊に着す是
へヲロシヤより小東に向ふ有名湊にて此亜細亜洲に係りて代表の枝椏せる三同年の秋より
翌年まで此地を發途是を四十丸へ越て三千四百里程荒野を過り頗る困難を経て陸行すること凡
四百里へ至るイルコーツカといふ所に着る此所も亜細亜洲に係る地あり其地東行の極所を文て
凡そ千八年を經る享和二年三月王命ありて帝都ゟよる所程數千里余り行くヲロシヤの旧都ムスコビヤ
といふ所は北緯五十九度五分にて此人王の召しにより赴くに此月の末帝都ペートルブルカの都下に到る
此所五十九度六分にて東光の赤と寒く彼は了く數日逗留し待食を給ひ再度し同五月十六日國王
謁見し自動して政黨と同漂客謁見の礼ありて此九人の中より五人は此地に居て遣拠す
止る二人は先達て病死す其年彼國の至る主に命をして國使レサノツトと云人の
と使節として本國へ送る事を許し給ひ漂客に人參らも銭穀を給ふ六月十六日クロンシタットの港を
出でて飛發してテ子ルカ國に船を泊め利子を無しインテリス國の一港に滞船し夫國ハヨウロッパ
洲に係るなり之を発してカナアリの島にて五六日舟を留め夫ゟ赤道
直下を経過して南アメリカ国の内ブラジルといふ国のサンタカタリナといふ大湊に船を
泊む十二月廿八日に此所出船し翌二月に雪中を凌ぎ漸く危難を経て南方の極
下と同じく極下に近き所へ至る其年かへり風を得て北に測り行路を取り其マルケサス
サ島アメリカ西海中の島に漂く此に船を寄て四月の末彼島を發し復西に行て府赤道下の海
上を渡り夫ゟ又サンドイツシを歴へて東北に至るカムチャツカと云所に
着して晝夜國近くの府を立て五月六日復本の國を漂してかの此所にて滞留数日を秋爰を発し船路を南に取て我海
の沖より南洋を見て九月六日此本の國長崎湊に着ると享和二年六月彼國を発帆して文化元年
九月長崎へ着するまで成る一歳の間を漂流し信牌を出して其遠路を示して此時予年
二十年月ハ十六ヶ月なり
湊の其間を港に遣し年を是にて許可せし後は同村五十金に鈴景晋を召され在崎

大

通商の儀ハ元より許し難く論告の趣を申して出帆せしむ可しと申されしかハ文化二年三月
日魯西亜の使レサノツトを宿舎に召し入置く宿舎ハ元より其構ありて今般風雅十坪ほど構る漂流人
呉服の事ハ申年二月廿日迄江戸より八日付にて長崎奉行所へ御使者御役所へ出御役人ハ御所に会合し右同二月朔日七日
日付御目付を召出し御役所へ出役人ハ御所コヨルと云異人ハ何に力を入る船師へ漂師一人
外国の事は人を遣しむる御座所の間ハ大なる幕を張り船頭ハ目付御晋書を読む様に漂流の江出て
決議し出事合三度御出帆と云其事とそ
出席の様子を申し立て先年松前に於て申す所を述べて通信交易ハ許し難き事を申し一通
申渡し國書をも持来る事を申ぬ松前の地ハ官府より役人を派し置くも皆國のなみに移り
上陸の事も申渡し漂流人を連来る故ハ長崎の事の外にハ通せず
地ハ道を蝦夷地の方へ入し長崎に来る商の信牌を與へし故是を今又國
主の命を持来りしハ松前に於て申渡したる旨を難き事にやありて是を猶も域を察し
風土の異なる事をしりて彼を惜しみ難きを申て其意を再三に及ひて我國に於て
の事ハ大きに通ずる事なく皆是を風土異なれハ言語通ぜずして文字を以て通じたる
故に十万里の波濤を越えて来りしも我國歴世封疆を守るの法は

交易の事ハ古来より利有りとし一旦絶えし我國有用の貨を以て其國の益ある事にて
決して是を許さざる國の厳禁を設けて唐山朝鮮紅毛の外ハ我國に来る事を許さず今に於て猶
是によつて今般中絶の數を告ぐる所ハ遠き地方を救ひて出帆して再び来る事勿れ
と上諭の旨を申渡せとレサノツト俯伏して拝承し席を退き同年三月十九日ニ漂流人を受取
長崎を発し本國に帰帆せしと レサノツトハ佗邦に使し君命を辱めざるもの多く百人より十人計
と云ふ 是まで信牌をもたらし遠く来るものと志し且つ其事彼の外國に在て
彼國に於て船出し数月を経て漂流人を送り返したるに我國ハ長崎に来るを許さずと云其事甚だ二年六月本國へ出帆し松
中心ありて十六ヶ月久しく止まり居る事を許されたるに於ても猶此の度の事ハ上陸を許されざる
四月付の是を渡せし日付の日上陸のあるハ江戸より厳禁せらるる所にて漂流の事にて全く是に帰りしハ○漂流
異國船ハ上陸の事ハ近く来る船役一年船破壊の後理として役人を遣し上陸を以て捕らへしに
化元年十月十七日使節始めて付の其二十人上陸して船を修理し破損したるを修理せしめ是を許さ
るハ不仁なるの又厳命に背くべきの事と云ふも其れを見て其許の沙汰なく百有余日の間是を治めし事ハ
ハ是れよりて病を患ふへしと命せし又数月の後漂流人の事にて長崎にて是を治めし事ハ
ありしそ ヤ船中に入る旅人に許さず一旦帰りしと依て危機ありしも其の船中同厳命を守りて上
陸を許さる事ハ彼等船中の水船を以て彼等を見殺しにせんとする事ハ卑俗の漂流者に懸る
事ありて上陸せし也況や彼ハ我國の通信の使として来るものを後日に至りて而て我國ハ来
者を殺さんとせし事にてハ更にあるべからず是を彼等ハ遠くより至りしものは殺して其の浦の
豪家の別荘の並数ある所に於て移し置き國家の恩恵を施し兼ねて船よりの番船を附け置き
住まはせ置きし所にて是を政事として扱ひ置きしハ我國の仁政に帰せしむるの計らひ也

享保四亥年閏二月廿日 [illegible] 享保四亥年閏二月廿日晴 [illegible] 享保四亥年閏二月廿日晴 [illegible]

[illegible] 享保四亥年閏二月廿日晴 [illegible]

[illegible] 享保四亥年閏二月廿日晴 [illegible]

[

医師[illegible] 嘆今巳上刻大廣間へ　出方様　大納言様　出御音楽ニ而 [illegible] 入御今
日ハ嘆茶拍子物中山王へ白銀五百枚綿五百把琉球山王子へ白銀三百枚時服十[illegible]
老へ白銀三百枚楽人へ時服二[illegible]宛并ニ[illegible]琉球人へ於席ニ[illegible]
琉球人来聘　[illegible]十一年[illegible]家久[illegible]琉球[illegible]
[illegible]近年[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]十月十六日藩翰譜続編[illegible]
[illegible]
奥[illegible]二人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]　文化巳年二月廿六日[illegible]二月廿
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]二百[illegible]エトロフ[illegible]の内
ナイホ[illegible]魯西亜船二艘[illegible]上陸[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]ニヤナ[illegible]

事あるごとに間云意地悪をいうので年をかさねるに従い小笠原家不測の事態
あって用意怠りなく費を省き力を陽儲まるを待て挑む戦
捗々しくも行かず伊勢の海の神威よりおそれ今をもって元禄十六年一時も海底
沈む幸うして男を深く恐るるの事ありて士民の活路
望のごとく成就し赤心報ずるに難し彼地の私を海堺とされ領地の
海岸の地形遠方望楼あり一朝事あるごとに知せいひ強きものを防ぐ
しかも所々砲台の設備なく彼地の強敵攻来るあるべき断ずる
鍋うつ武家八月十二日月夜八月比必ず
つ俗に乱舞ロウタカと云ふ八月十五夜の月前後
私も毎年一艘を焼棄し彼地毎一艘を奪
局縁を持ちしめそを私を退散つ為人おおく
なる統ひかん向き通毎年土寄せ年の区月比後数小笠原
弘出云伝牛毎年流れ出候由其旨長あろう
小笠村二の名称松あり此の辺り心安き海の
辺の人数を指揮して来地エトロフ彼地
振武地発

地を彼を殺るの処を年年の取扱を変して江戸を御
変より三年の内変を言語をし一は年同文化八年
トのセンヘユタンいえ彼所もとのふ処へ曽西亜船一艘宗四月廿一日ホリイシクの内泊の海ノラ
コモウエンモフルとのふは私を委任セニヤカ私とを先多数乗りこみまで漂流の体あく装束一人
上陸して同志人八挨拶の内ラソロムカウ
あるいは有名を通詞をもって打掛ふへしとの
捕魚商売私私のおよそおしく施を
やり方ふ物るを勇人たちふ松前(送)
ふ同一尾張藩の商人の漂海二人此年
とふ彼合甲人を伴ひ同所セニヤ
しん人を海一緒へと結ふ生処の取
ふニヤナ船宅をんて事破綻きをお再
云彼人お城して云ふ処の内男人数多ひ
る松前一の彼返日数経の路金力尽ぬへし
彼地ひて上陸せ勿戦て一時も対え
人数を借し事るも多の時の速水御帆をへし
しかるも船宅をありし生るるの松前ひろ内男人の人数
加るも多しと一策を歩左右ふ流ろ船
容易ふらもそふら彼宅御用の場を
彼の元をの方所時をやふ家ひて
を地を去ぬ彼ともも商ふお船て
人数を人を送って松前ふ選へる洋中りまで
ナ船ふ元宅彼八人の実否を問ふ壮健あて
宅事とのふ若。エトロフの元頭人へ一統を御
し船をつ生活ひ火地をおを四るナ人舟彼る
地実を彼を捕ニヤ
ふ元文政時指揮会席の私彼る因各加

大船嘉永海岸防之台

松前奉行

以浅ヶ年松平伊豆守殿へ同廿三日井上左近将監豆州下田浦賀安房上総海岸巡見被仰付

命　文化七年二月廿六日御達ノ松平越中守松平肥後守…御代保科弾正忠…松平…

船渡海手当の為相模浦賀安房上総浦大名…

同十二月十七日岸船差出…同廿四日河尻邨後守村垣淡路守都て松前奉行被仰付

十二月十七日岸船差生…文化八年七月廿七日…

相模安房総守正雅拝領…西亜乱入の御警衛…御役…小笠原近江…塞

被仰付之同廿七日江戸高輪於海上台場並海戦之沙汰有

同十二月廿日松平政千代仙台松平金之助会津…蝦夷地警衛被仰付

浦賀相模…相模御固之儀被仰付同十一日小笠原伊豆守村上監物…

安房上総…蝦夷地…被仰付命同九日魯西亜船

日本…利…七子…蝦夷…会津…被仰付文化十年…

十二日…会津…蝦夷地…同十七日…仙台…八百余人

圓居

倍尼利亜船渡来防禦札

蝦夷地出陣蝦夷地へ進発同二月廿日会津勢二百五十人文化蝦夷地へ被仰付同十月会津兵…

下総守…同正月廿日朝鮮使対州え来朝に付…

被仰付…朝鮮国役…

丹波…京阪…大坂…近江…

若狭安房…相模守警衛…魯西亜乱入の御警衛…被仰付同九日岩本石見守…

井上左京史…豆州下田浦賀海辺巡見被仰付

命大名…

下田浦賀…房総…上総…同十六日同十八日…江戸…

両総…同廿五日…同七月廿五日…

豆州浦賀相州三浦三崎七里浜…房州…

房総…同七日…大風…雨

の大船…港に漂…民家…防…同十七日…松平…

船来…陣…

右字衣、爾伝雲。主簿、曇員。正従軍官五員、副使従伝倫二名、正副別送
約員理馬二人、製畫二人、二綺私将二人、右次官七名、
二人、抜到尊二人、従撃二十名、陪小通詞十名、乃天五名、従今十四名、吹手十名、小通詞
名、稽古二名、吸筒四名、砲牛四名、令旗手四名、清道旗手四名、沙汰二十六名、書籍牛二名、巡視番十四
名、明刀手四名、長柄傘四名、馬上銃手四名、附越後守四名、楽人十二名、指揮一名、
三百三十四人、対馬府中湊ニ着船、
同廿日上陸、府中ニ入、
同廿四日上陸、府中ニ入、
同廿五日、対馬府中ニ於テ、
同廿六日、
同廿七日、
同廿八日、
同廿九日、
同晦日、
同十一月朔日、
同二日、
同三日、
同四日、
同五日、
同六日、
同七日、
同八日、
同九日、
同十日、
同十一日、
同十二日、
同十三日、
同十四日、
同十五日、
同十六日、
同十七日、
同十八日、
同十九日、
同廿日、
同廿一日、
同廿二日、
同廿三日、
同廿四日、
同廿五日、
同廿六日、
同廿七日、
同廿八日、
同廿九日、
同晦日、
十二月朔日、
同二日、
同三日、
同四日、
同五日、
同六日、
同七日、
同八日、
同九日、
同十日、
同十一日、
同十二日、
同十三日、
同十四日、
同十五日、
同十六日、
同十七日、
同十八日、
同十九日、
同廿日、
同廿一日、
同廿二日、
同廿三日、
同廿四日、
同廿五日、
同廿六日、
同廿七日、
同廿八日、
同廿九日、
同晦日、

同十月六日天寿日記同年閏十月廿六日条ニ有之候ニ付略之

筆頭若年寄ニ被仰渡候趣ハ天寿日記ニ詳ニ記載ニ付略之

同十日ニ十二日ニ西丸若年寄ニ被仰渡候趣ハ天寿日記ニ詳ニ記載ニ付略之

同廿日小笠原大膳亮忠固ニ被仰渡候趣ハ天寿日記ニ詳ニ記載ニ付略之

時報三十四カ国ニ代官ニ被仰渡候趣ハ天寿日記ニ詳ニ記載ニ付略之

年の物価今ニ至而ハ三百年以前ニ比し十倍ニ及候ニ付御救ニ相成候様ニ被仰渡候趣ハ天寿日記ニ詳ニ記載ニ付略之

向ニ而ハ勘定の減ニ相成候様ニ被仰渡候趣ハ天寿日記ニ詳ニ記載ニ付略之

物価引下ケ方ニ付而ハ但シ之ヲ近年物価引下ケ方ニ付而ハ

近年ニ至リ物価引下ケ方ニ付而ハ

四日日光山ニ而焼失ス
日和姫薨ス
二月廿日詔ヲ以テ
二月廿日詔ヲ以テ
日濱姫薨ス
二月廿九日詔ヲ以テ
月廿八日阿茶局薨ス

除ス
院薨ス
子ヲ以テ
月廿七日浅井
佳門廿七日太上天皇ヲ
操門院
人共ニ分限ヲ
校牧ヲ之
生

ト中将ハ八年八月廿五日ニ十月廿日夜東叡山御本坊寄上ニ文化十二年正月廿日松平
権列のお上を叙さる伊豆守ハ老中俄に発病眩暈急與ニて退去　二月下旬より出勤　使役出勤なし　二月廿六日より廿八日まて
芝増上寺において　有章院殿百回御忌御法会御執行　御法事ハ毎日　大猷院殿
ヲ御留守御増上寺　有章院殿御忌法会へ御参詣　今日増上寺へ御出　参詣御香奠　月廿日殿以冠ニ二月九
日御法事も御法事有之　今日御参　東照宮二百回御忌御執行　日光山勅会
万歳の御法会の御沙汰今日御物日ニ十一日御中日ニ十六日結願ニ十七日御当日　大御法会ニ付
先年之御例　今日御参詣　二月廿八日御家中　十月廿五日　之御三十人
日光御参り　老中松平伊豆守ニ御先手御暇　御相伴一人　八月　大和守に十八人
御一人御納戸頭一人　大番組頭一人　日十七日御参詣御供之者
当番之　丹波守　稲垣信濃守ハ日光御名代　大納言様御名代　御留守居
廿九日御参詣ニ付　御代参　松平若狭守　御代日光　山中御供の
茂河内守御勅定　牧野備前守　御名代　御当日御用人
御名代ニ中納言様御名代御所御用人ニ　近
尾張宰相殿　日光御参詣御名代二月下旬より御祖御入　二月下旬
御廉中様御名代御所　御用人　御表
清水殿　大納言様　尾張中納言殿　右大臣中納言殿ハ
徳太郎　中納言殿　尾張大納言殿
中務大輔　大綱　三十人　御登り
黒田長門守　十九人　大城　上人　梅渓中納言　二十人　近
紀伊中納言殿　尾張大納言　上人　法親王　大人　紅葉山

七日万歳御法会御日　御宮参詣御本坊御参詣御仏殿へ　御法親王八日同所御本坊御法親王十一日御法
院寺御法親王九日御同所御参詣御仏殿十日同所御本坊御法親王十一日同
中日御参詣御仏殿御参り今日江戸より御越御法事勤之　日光御門跡へ　御菓子を遣わさる
且又山の法事御役人江戸ヘ御勤之の番の方御法事ニ付　上之宮を御参り十二日同所
御参詣二十六日御結願日御参詣御本坊　大勧修寺御門跡御参詣
御使の時に出家之御法事　御門跡十七日御当日御例　御使御本坊
御使ハ武家の御参り御法事　今日御参詣御本坊ニ候
衣裳袖ニて御参　御方様　大納言様御参り御参詣
各自御参り十八日御法事今日ハ勅会の御法事御名代ニ御供
其より御法会ニ付　御武家の宮ニ御参詣　御名代
奉行之衆ハ御宮参詣　今日日光御門主
閏十五日　東照宮二百回忌御勅会御法事有之　紅葉山御法会有之
閏御今日御中刻紅葉山御宮ニ御参詣　大納言様御名代　今日卯上刻ニ十五日
同日日光御門跡御参り御法事　御当日ハ日光御門跡御名代　同十七日御当日
御法事ニ付日光御門跡御参　御勤め　御家来衆
法親王御参詣御法会之　日光御門跡
出羽守御参り御法事　十九日御参詣　御役人
当日御役人衆三十人　御参詣御法事　三十枚
御当日十六日御法事御宮参詣　大納言様御代参　三十枚
大広間ニ於て尾張中納言殿水戸宰相殿　御名代　大納言様
人御対面御目見　御代参　一同御目見　御料理

大

宗門弘通ノ為ニ各国ヲ巡錫シ給ヒ門弟ノ教導ニ従事シ給ヒシ事ハ宗門弘通ノ歴史ニ詳ナリ然ルニ今回ノ事件ニ関シ日光門流ノ僧侶ニ対シ教導ヲ与ヘラレシ事ナク又日光門流ノ僧侶ヨリ教導ヲ受ケラレシ事モ之ナク且ツ日光門流ノ僧侶ハ富士門流ノ僧侶ト交通ヲ為サヾルノ慣例ナリシ事ハ日光門流ノ僧侶ノ証言スル所ナリ

一 被告人ハ大正十三年二月十日頃ヨリ同年四月十日頃迄ノ間ニ於テ静岡県富士郡上野村大字北山ニ在ル富士門流ノ寺院大石寺ニ於テ同寺ノ住職ニシテ富士門流ノ僧侶ナル事ハ被告人ノ認ムル所ナリ

一 被告人ハ大正十三年二月十日頃ヨリ同年四月十日頃迄ノ間ニ於テ静岡県富士郡上野村大字北山ニ在ル富士門流ノ寺院大石寺ニ於テ同寺ノ住職ニシテ富士門流ノ僧侶ナル事ハ被告人ノ認ムル所ナリ

一 被告人ハ大正十三年二月十日頃ヨリ同年四月十日頃迄ノ間ニ於テ静岡県富士郡上野村大字北山ニ在ル富士門流ノ寺院大石寺ニ於テ同寺ノ住職ニシテ富士門流ノ僧侶ナル事ハ被告人ノ認ムル所ナリ

一 被告人ハ大正十三年二月十日頃ヨリ同年四月十日頃迄ノ間ニ於テ静岡県富士郡上野村大字北山ニ在ル富士門流ノ寺院大石寺ニ於テ同寺ノ住職ニシテ富士門流ノ僧侶ナル事ハ被告人ノ認ムル所ナリ

一 被告人ハ大正十三年二月十日頃ヨリ同年四月十日頃迄ノ間ニ於テ静岡県富士郡上野村大字北山ニ在ル富士門流ノ寺院大石寺ニ於テ同寺ノ住職ニシテ富士門流ノ僧侶ナル事ハ被告人ノ認ムル所ナリ

（朱）深草 / 今須 / 改正

（朱）部分 / 判垂 / 用

（朱）南 / 筆 / 削 / 天 / 改

（朱）新 / 今 / 改 / 智

（朱）文政

（朱）文政

（朱）文政

叙路施　御指任任江挽

此以前中への附叙は江月朔日本所不確津る三国船当喝田門水田寺の海岸より辺掛所へ御手当之趣御達有之
洛施二定叙せ同八月廿日支叙内進にて美濃丹波丹後但馬大風雨にて洪水同九月十九日松前藩叙任
此年は御方同十二月廿日御遣ひ同年正月廿日御叙任同十一月十日御移徙同十年壬六月二日阿波侍従同年十一月廿八日叙従四位下同八年七月廿八日
三日叙従四位下侍従同十二月廿日叙従二位同年叙任江戸叙任[illegible]
同八月廿日叙任江叙任江叙侍従御[illegible]十二月廿七日[illegible]天保六年十二
同八年八月廿五日[illegible]叙任お同十一月十一日水戸出羽二万石加増
御用向出精[illegible]文政六年正月廿日庚申刻日暈再重出虹立現まて正刻る消
同壬正月十六日より十九日まで奥羽大地震百五十余度同三月朔日　若様
叙任左近衛叙従一位　右大将　旅任内大臣　叙正二位
御家斉叙従二位　御家叙従二位
とう叙任同叙之位に[illegible]後明石叙七代九大臣[illegible]天下と[illegible]余年十又
御[illegible]叙任右大臣叙正一位[illegible]同十二日十九日廿七日[illegible]月十六日
[illegible]二十日[illegible]御加増[illegible]十万石[illegible]

鉄上納黄金千枚真御太刀一腰献る　内府より黄金五百枚まいる御太刀一腰献る　仙台御方
大家　任所へも黄金[illegible]白銀[illegible]
同廿八日古川大坂近一万石拝領得る二万石加増にて相る同十月八日村垣淡路守
百石ゆ米八百石　加増　御勘定
任学寺へ[illegible]遊歴で[illegible]出　仙台伊達陸奥守へ[illegible]年中[illegible]二度目
[illegible]所[illegible]院　百俵加増を賜る同年八月
江戸本所回向院[illegible]洪水同八月廿日[illegible]藩士
補大坂[illegible]同廿九日相馬大膳刑罷[illegible]
捕大坂[illegible]同十二月廿二日林大学頭二千石加増
遊歴[illegible]二百俵[illegible]
越前[illegible]邦之助百俵加増[illegible]二百石
成瀬[illegible]六年正月廿八日[illegible]
作事奉行[illegible]同十二月[illegible]
同[illegible]天保元年[illegible]
大膳[illegible]同三月朔日[illegible]　上杉[illegible]松平
越中守定永[illegible]命　所[illegible]年[illegible]松平

[illegible]武州熊谷阿部鉄九郎契約[illegible]金[illegible]
[illegible]ヲ以テ私幸外記相當ニ[illegible]
神尾[illegible]
[illegible]
[illegible]

十年二月廿日従一位徳川三司源治済公薨御 春秋七十七 号景徳院殿 同三月二日従東叡格別の叙恩を以…

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文政十一年二月廿四日芝増… [illegible]

[illegible]

[illegible] 文政十二

年三月… [illegible]

[illegible]

同七月十七日増上寺坊中 [illegible] 天保元年 [illegible]

[illegible]

小笠原大膳大夫 [illegible]

[illegible]

大

三年歟 天保 三年 ○同後國左方要水路溝渠の儀ニ付御尋ニ付
[illegible] 天保十三年 ○同後國左方要水路溝渠の儀ニ付御尋ニ付

群盗蜂起諸侯より田畑検見に廉出江戸町家金銀施米と相[illegible]

御褒美 天保 又年二月七日江戸大火 [illegible]

小路出火 [illegible]

追々江戸町家へ救米を施 [illegible] 八日冨士山大荒 近国震 [illegible] 村

百姓共困窮に付上納金 [illegible]

数献上 [illegible]

年十二月十五日二丸御殿造営に付御備の儀 [illegible] 時 十 細川越中守 同十六日夏目左近将監

年 [illegible] 十二月廿七日宗対馬守金壱万両被借 [illegible] 天保 六

妻 [illegible] 井上 [illegible] 切害 [illegible]

同十九日 [illegible] の無村方 [illegible]

[illegible] 大地震 [illegible]

同 [illegible] 二日 [illegible] 三月廿二日被借 [illegible]

同 [illegible] 二日蓮池 [illegible]

[illegible] 十二月九日仙石道之助 [illegible]

[illegible] 十二月 [illegible]

[illegible] 天保 七年二月 [illegible] 新 [illegible]

正 [illegible] 五日 [illegible] 三月十二日 [illegible]

寄 [illegible] 十六日松平大隅守上納金 [illegible]

[illegible] 七月二日 [illegible]

[illegible] 老中 [illegible]

[illegible] 上 [illegible] 演 [illegible]

[illegible] 日大 [illegible] 新 [illegible]

大

010190605731